

イリヤ兄と美遊兄が合  
わさり最強（のお兄  
ちゃん）に見える

作者B

## 【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## 【あらすじ】

アンジェリカの持つ天地開闢の剣を食らうも、美遊を平行世界へと逃がすことに成功した美遊の兄、衛宮士郎。そして力尽きた彼の前に、ある者が現れた。

そう、もしも願うことが許されるのなら――

「俺は――美遊を守りたい」

これは、どうやったらイリヤや美遊といちゃいちゃ出来るかを考えた結果生まれた、

衛宮士郎が主人公です。日常回比率多めで書きたいとは思っていますが、どうなるか予定は未定です。

なので、意見や批判がありましたら大歓迎です。

一応、本編はクロ登場あたりから始めるつもりです。

# 目次

士郎はこうしてシロウとなった | 1

衛宮士郎の華麗なる一日 | 14

拜啓 親父、妹が3人になりました

27

保健室―それは魅惑の空間 | 40

身体は包丁で出来ている 血潮は鉄分で

心は俎板 | 56

鶴翼不欠落 | 72

これまでのあらすじ(士郎視点)

92

衛宮家に泊まろう! | 109

ひと夏の夢 | 120

番外編 家政婦(つばいステッキ)は見た

139

イリヤ・イン・チルドレンズパーク

152

番外編:シスターカレン | 182

シロウ・ジョーンズ『魔法の宝石』を追

えく | 199

## 士郎はこうしてシロウとなった

「ならば、すべてを切り裂こう。貴様の世界ごと」

俺の世界が崩れる。

あの、世界を切り裂く剣のせいじゃない。美遊からもらっていた魔力ちからがなくなっただか  
らだ。でも、これでいい。これで、美遊はもう苦しまなくて済む。

「……勝ったよ。切嗣」

俺は誰もいないそれを見上げて、ぽつりと呟いた。

ああ、でも

一つ心残りがあるとすれば

最後まで守ってあげたかった

ふと、ほのかな草いきれが鼻に通う。

……草の匂い？

「——ッ！」

俺は思わず飛び起きた。ありえない！だって、俺がさっきまでいた場所は！

目を開けるとそこは、一面の草原が広がっていた。雲ひとつない深い空は一面ほのおのように大きく渦巻き、大地は平らでくるぶしまでの柔かい草が浅瀬のように広がっていた。

なんだここは？こんな綺麗な場所は冬木市に——いやそれよりも！なぜ俺の身体は動く?!俺はさっきの攻撃をまともに食らったはず！

だが、そんなこととは裏腹に俺の身体に傷は一切ついてない。魔術の使い過ぎで黒ずんだ腕も元に戻っている。ただ、ところどころ破れた服だけが、さっきまでの戦いがゆめまぼろし夢・幻ではないことを告げる。

すると、まるでこの暖かい陽気の春一番だと言わんばかりの、息が苦しくなるほどの風が吹き込んできた。思わず腕で目を覆うが、数秒もしないうちにその風はすぐに止む。ただ、その風が運んできたのは春なんかじゃなかった。

「切………嗣………」

こんな広い草原の真ん中に現れた、草臥れた和服を着た中年ぐらいの男性。その姿は間違いなく切嗣のそれだった。そう、その姿は。

「誰だお前。切嗣じゃないな」

俺の言葉に答えるように微笑を浮かべる切嗣。だけど、俺にはその表情がどうも貼り付けたような笑みにしか見えなかった。見た目はどこをどう見ても切嗣。でも、ずっと一緒に居た俺には分かる。あれは切嗣じゃない。

「お前が俺をここに連れてきたのか？ 此処は何処だ？ お前は何者——」

「士郎。士郎には選択肢がある」

俺の言葉を遮るように切嗣が話し出した。柔らかいようで、暖かいようで、それでいて人間味を感じない声で。

「ひとつは『選ばない』こと。そしてもうひとつは『選ぶ』こと」

「……選ぶ？」

「そうだ。その身を糧に願いをかなえるか、否か」

「ツ?!」

「願い、だって？」

「どういう意味だ」

「そのままの意味さ。士郎がその身を差し出すならひとつだけ、願いが叶う。ああ、もちろん対価は死んだ後に貰うから心配いらないよ」

「……」

まるで、世間話でもするかのような軽い口調で告げる切嗣。正直、突拍子もない話で

ついていけない。大体死んだ後についていうのなら、もう俺は死んでいるだろう。なんたつて、あの規格外の宝具を食らったんだから。でも、もしも……もしも願うことが許されるのだとしたら——

「——妹を、美遊を守りたい」

そうだ。美遊を守りたい。美遊が手に入れるあたりまえの幸せを奪う、その何もかもから。

「そうか。喜べ、士郎。お前の願いは叶う」

そこで、俺の意識は闇に落ちた——



「はあっ……はあっ……な、なんでこんなことに！」

確かに、一成に頼まれた仕事か思いのほか時間がかかって、空も暗くなるまで学校にこもってたけど！だからって！

『■■■■ ツ!!』

「あんなのに襲われるなんて、思わない、だろッ！」

何かが反転するかのような感覚。そして、その直後に現れたアイツ。

全身にくまなく施された禍々しい刺青、頭と腰に赤い布を巻いた男。そんなやつが二刀一対の双剣を持って、何の因果か俺を追ってくる。

「くそッ！」

思わず言葉が漏れる。そんな余裕、元より俺にはないはずなのに。

だけど、今は1階に下りる階段。このまま逃げ切れば、もうすぐ校庭に出られる！

「間に合ええッ！」

階段を一気に駆け下りた俺は、そのまま目の前の昇降口に駆け込む。そして――

「出られた！」

後は警察にでも何でも駆け込めばいい！そうすれば助か――

「――え？」

突然、俺の左胸から突起物が突き出した。

「——な、んで」

現状を理解できないまま膝から力が抜ける。地面に倒れるまで、俺の時間感覚が極限まで引き延ばされる中、俺は後ろを振り向いた。そこにいたのは、昇降口の扉の前で弓を構えるあの男だった。この突起物の正体はあの男が放った矢だったんだな。

……そうか。学校から出たかったのは、むしろあいつの方だったのか。校内じゃ弓なんて使えないもんな。

そんな自分のことを他人事のように考えていると、ようやく俺の身体が地面に触れた。

弓が光の粉となって消滅する。俺の下に血だまりができる。アドレナリンが分泌されているのか全然痛みを感じないのが唯一の救いか。

あいつが近づいてくる。その手には俺を仕留めた弓矢じゃなく、さつき持っていた陰陽の双剣を握っていた。俺に、止めを刺しに来たのか？

ああ、俺、死ぬのかな。

特に未練なんてないけど……：……：そういえば、今度の休みに買い物に付き合うって約束したっけ。約束、守れそうにないな。

ごめんな。イリ、ヤ……

—— 生きたいか？少年 ——

……… なんだ？男の、声？

—— 生きたいか？少年 ——

……… 幻聴か？だったら、別に最期ぐらいこんな胡散臭そうな奴の声じゃなくてもいいじゃないか。

—— 生きたいか？少年 ——

……… しつこいな。そりや、助かるのなら助かりたいさ。人間だれしも好き好んで死にたくないだろ。それに ——

ふと、襲い掛かっていたあいつのことを思い浮かべる。あいつが現れたのは学校。つまり、あいつを野放しにしたら学校の皆も襲われるかもしれない。そして何よりも。

—— イリヤが、妹が危ないから、な……

—— 君は運がいい。丁度一つ、手の空いている魂がいてね ——

—— 喜べ少年。君の願いは叶う ——

トレースオン  
「同調開始」

死に体だったはずの俺の身体に魔力が灯る。熱い。体の中が火に焼べられたように熱い。その中で何かが溶かし尽くされ、混ざり合い、俺という存在が曖昧になる。それはまるで熱した鉄を鍛えて剣にするかのように、俺でありながら俺でなくなる、どこかそんな確信があった。だけど、それでも構わない。

これで、イリヤ<sup>い</sup>／美遊<sup>も</sup>を守れるというのなら！

トレースオン  
「投影開始！」

俺は起き上がると同時に、両手に投影した干将莫耶で奴に切りかかる。攻撃は双剣で防がれたものの、奴は大きく後退する。

身体の熱はまだ冷めない。俺の体内が高速で、戦いに最適な構造へと書き換わる。存在しなかったはずの27の魔術回路に魔力が走る。熱と痛みで思考がまとまらない。だが、そんな俺のことなどお構いなしに、奴は双剣を構えてこちらに向かってきた。

「ちいッ！」

切りかかる奴の双剣の片割れを、同じくこちらの干将で迎え撃つ。しかし、攻撃を一度防いただけで干将はあっけなく砕かれた。

「なッ?!」

呆ける俺を余所に、奴はもう一方の剣で切りかかる。俺は身体を捻って剣を無理やり莫耶で弾くと、干将と同様に跡形もなく砕け散った。どういうことだ?!こんなに脆いなんて!

剣が両方砕かれたことで、俺は一旦距離を取る。まずい。こんなんじや、剣を受け止めることだって出来やしない。幸い、奴の剣技はそのまま高くない。これなら経験の差で――

そんな思考の僅かな隙、奴は再び俺に接近し、剣を振り落す。俺は咄嗟に投影した干将莫耶の双刀でそれを防ぐが、やはり罅が入る。そして、両腕のふさがった俺に、奴はもう片方の剣の柄頭で俺のこめかみを殴りつける。

「があッ！」

吹き飛ばされた衝撃で干将莫耶は再び砕け、俺は無様に地面に転がる。何を馬鹿なことを考えてんだ俺は！衛宮士郎は極める者なんかじゃない！

追撃とばかりに向かってきた奴に、俺は顔の横を流れる血を無視して起き上がり、無手のまま走り出す。そして、奴が切りかかろうと腕を振り上げた瞬間、今度は俺が奴の剣の柄頭を掴み、動きを止める。

『■■■■ツ?!』

トレース  
「投影」

創造の理念を鑑定、基本となる骨子を想定、構成された材質を複製、製作に及ぶ技術を模倣、成長に至る経験に共感、蓄積された年月を再現する！

「——完了ッ！」

奴を剣ごと向こうへ押し出すと、俺の両手に再び干将莫耶を投影する。そうだ。俺は極める者じゃない。何時だって俺ができるのは、最強の自分を創造することだけ！

「はあああッ！」

今度は俺の方から打って出る。さっきまでの劣勢が嘘のように、剣は砕けず、鏢迫り合いは互角以上に戦える。当たり前だ。奴今まで戦ってきた敵に比べたら同等の経験を得た俺なら、意志のない抜け殻同然のこいつなんかには負ける道理はない！

今度は奴の方から距離を取る。そして、その頭上にはレイピア、ロングソード、シヨ-

テル、フランベルジエ、エストツク、青銅劍等の無秩序なまでの劍群が現れる。

「ツ——トレリスオン 投影開始！ 憑依経験、共感終了！ 工程完了、全投影待機！」

それに対抗するため、俺の背後にも奴と全く同じ劍たちを投影する。性能が同じならこれで十分だ。

「■■■■ ツー！」

「停止解凍、全投影連続層写！」

俺の劍と奴の劍がほぼ同時に放たれ、それらがすべて相殺されていく。そして劍がぶつかり合う中、俺は奴の下へ走る。もとより、劍の打ち合いで決着がつかなくなって思っちゃいない。

「はあッ！」

俺の振り下ろした莫耶を奴が双劍を交差させて受け止める。それは奇しくも、さっきの俺と奴の攻防の再現となった。

「でりやあッ！」

両手がふさがりながら空きになった腹部を思い切り蹴り飛ばし、そのまま両手の干将莫耶を破棄する。そうだ、二度目のチャンスを与えられたのなら、今度こそ——

「……あんたには世話になった。だから——俺はあんたを越えていく」

俺 エミヤ専用<sub>天</sub>に造られた西洋弓と、選定の劍を改造することで原典の特性を得た名劍を投

影する。

「I a m t h e b o n e o f m y s w o r d .」

奴は地面を転がりながらも体勢を立て直す。だが、もう遅い！

「偽・螺旋剣！」

弓から放たれた剣は螺旋状に回転し、大地を抉り、周りの大気を巻き込みながら突き

進む。

『■■■■ツツ！』

そして、奴の身体を貫いた。

—————  
—————  
—————

「———ッはあつ……はあつ……」

気が付くと、俺は校庭のど真ん中に立っていた。さっきまでの戦闘の跡は一切なく、



まるで白昼夢でも見ていたかのような錯覚を覚えた。

いや、本当に現実だったのか……だって、急に変な奴が襲ってきて、俺も剣を取り出して……駄目だ、頭がはつきりしない。さっきまでクリアになっていた思考に、急に靄がかかる。

俺、何してたんだっけ？……ああ、そうだ。一成の頼みごとが思いのほか時間がかかって、今から帰るところだった。早く、帰らな、い……と……

肌寒い夜に、まだ熱の引かない俺はそのまま眠るように意識を落とした。

## 衛宮士郎の華麗なる一日

帰宅中に倒れた俺は、おそらく通りがかりの誰かがしてくれたのであろう1119の連絡により、病院に運ばれた。

家に連絡が行ったのかイリヤたちはすぐさま駆けつけてくれたのだが、イリヤには泣きつかれたりセラには無理のし過ぎだと説教されたりといろいろ大変だったけど、ただの過労ということで直ぐに退院できたのはよかった。特にこれといって無理をした心当たりなんてないんだけどなあ。まあ、知らず知らずのうちに疲労をため込んでたのかもしれない。なんとって、体中が筋肉痛になって数日は動きがギクシヤクしてたぐらいし。

そんなこんなで俺はすぐに普段の生活に戻り、それから3ヶ月ほどの月日が経った。倒れたあの時から何か、こう、思い出せそうで思い出せないモヤモヤとしたものが時々頭を過ぎるが、それ以外は特に何事もなく学園生活を過ごしている。ああ、何事もなくっていうのはちよつと違うな。遠坂とルヴィアがロンドンから留学しにきたり、あとイリヤに新しい友達ができたらしい。

そんなことが頭を過ぎりつつ、俺は弦を引き軋む弓の音を聞きながら、同時に眼前の

霞的だけに意識を集中する。静寂が当たりを包む弓道場。そんな中、打起こしから引き分け、会へと至り、矢尻が的へと向けられる。その動作は、一切の雑念が入る余地はないほど完成されたものでありながら、どこか無骨さを感じさせる。そう、その姿は言うなれば王道ではなく邪道、誇り高き騎士ではなく泥臭い傭兵。

刹那

弦が空気を弾く音と共に矢が放たれる。それは、まるで吸い込まれるように霞的の中央の白円『正鵠』を射抜いた。

ふう、と一息つき、弓を下して集中力を霧散させる。いつも通り射抜かれているのを見て余韻に浸っていると、後ろから感嘆の声が届いてきた。

「今日も今日とて絶好調だな、衛宮！」

振り返ると、そこには女子弓道部主将である美綴綾子が快活な笑みで近づいてきた。

「美綴だって、今日は調子がいいじゃないか」

「お？それは私に対する宣戦布告か？ここんところ、正鵠から外してるところをほとんど見ない衛宮士郎君？」

「や、やめてくれよ。そんなつもりじゃないって」

美綴が、遠坂がからかう時のような笑みを浮かべていると、ふと視界の外から白いものが現れた。

「もう、美綴主将。あまり先輩をいじめちゃ駄目ですよ。はい、先輩。タオルをどうぞ」  
「ああ、ありがとう。桜」

そう言つて、差し出されたタオルで額の汗を拭く。その様子を見て、渡した本人『間桐桜』は満足そうに、嬉しそうに微笑む。といつてもこのタオルは部の備品ではなく桜の私物であり、最初は流石に悪いと思つて断ろうとも思つた。けど、俺の考えを察してあからさまに悲しそうに落ち込む彼女の姿を見て、何故か異様に心の奥底がきつく締め付けられるのを感じ、それ以来あまり遠慮しないようにすることにしている。

「まったく、こっちは散々よ。弓の腕では敵わないわ、かわいい後輩は取られるわ」  
「取られ?! な、何言つてるんですか主将! 別にそういうのじゃ!」

「照れるな照れるな。ほら、衛宮だつてこんな後輩に尽くされて悪い気はしないんじゃない?」

まったく、何言つてんだ美綴は……

そう思いつつ、なんとなく言われたとおりに改めて桜の姿を見る。紫髪のアストレートスタイルは良し。家事はそつなくこなすし、性格は穏和で献身的。ぐいぐいと引つ張つていく遠坂やルヴィアのようなタイプとは違い、後ろから支えてくれる古き良き大和撫子のような感じだ。以上のことを総合的に判断すると――

「桜はいいお嫁さんになりそうだな」

「よ、嫁?!」

俺の言葉を聞いて桜の顔が真っ赤に染まる。あれ? やつぱり、お嫁さんなんて軽々しく言うもんじゃなかったかな。

「そんなお嫁さんだなんて……確かに遠坂先輩の居ない部活中にコツコツと好感度を稼いで先輩の卒業式に第2ボタンを貰いつつ告白して私も翌年には先輩と同じ大学に進学してキャンパスライフを楽しみつつ卒業と同時に結婚してゆくゆくは一姫二太郎を授かって幸せな家庭を築こうと思ってますけど先輩が望むなら今すぐにも私——」

「あ……衛宮、今日は日直だろ? こつちのことはいいから、ちやつちやと片付けちゃいなよ」

「え? あ、ああ。分かった」

桜が自分の世界に入ってしまった。こういうとき、無暗に話しかければ藪蛇になる。遠坂やルヴィア他、色々な女子との交流の中で学んだ処世術だ。

頬に手を当てて顔を左右に振っている後輩を美綴に任せ、俺は弓道場を後にした。

「駄目ですよ先輩、そんな後ろから。鍋が吹いちゃいます。料理が終わったらちゃんと相手してあげますから。え? もう我慢できない? もう、堪え性がないんですから。でも、そんな先輩も——」

「おーい、桜。何時までもトリップしてないで練習再開するぞー」

「失礼しました」

職員室で日誌を受け取った俺は、そのまま自分の教室に向かう。流石に朝早いせいか、廊下にはあまり生徒がいない。

「やあ、そこにいるのは衛宮じゃあないか」

するとこんな朝早くというシチュエーションがあまり似合わない人物に声をかけられた。

「あれ？慎二？随分早いじゃないか。どうしたんだ、こんなところで」

「いやあ、僕もできればこんな時間に来たくはなんだけど、最近遠坂やエーデルフェルトにエンカウトすると碌な目に合わないからな。態々こうして時間をずらしてるって訳さ」

ああ、そういえば慎二は正体不明の爆発に巻き込まれたり、蛙入りの袋が飛び火して来たり、謎の宝石っぽい石にぶつかって気絶したり、と酷い目に合ってたからな。この事件と二人に何の関連性があるかわからないけど、なんだか慎二はあの二人に苦手意識を持つてるようだ。

「あれ？でも遠坂とルヴィアが編入してきたときは、あんなに熱心に話しかけてたじゃないか」

それを聞いた慎二はふうふう、と深いため息をつきながら肩を竦める。

慎二は顔立ちも整ってるし女子には優しいから結構モテるんだよな。まあ、誰彼かまわずナンパしてるからなんだけど。

「あのな、衛宮。確かに僕は可愛い子には優しくするし仲良くなるうともするさ。けど、それは人間に限った話であって、人の皮を被ったアクマはその限りじゃあないんだよ」  
「アクマって、流石にそれは……」

否定しようと思つて、二の句が継げなくなる。

なんというか、遠坂は最初の印象はいかにも優等生つて感じだったのに、しばらくしたら、正確にはルヴィアと同じクラスに決まつてから妙にハツチャケてるというかなんというか。まあ、最初の猫を被つたときに比べてたら随分と生き生きしてるように見えるし、あの二人は存外相性がいいのかもしれない。（本人達は絶対認めないだろうけど）

「女らしく御淑やかにしろとは言わないけどさ、限度があるだろ！なんなんだよあのインファイト！あの謎の爆発！どう見ても高校生の日常からかけ離れ過ぎてるだろ！いや、あれはもう全国の女子高生に失礼なレベル——ッ！」

慎二が大声で不満を爆発させていると、急に挙動不審になつて辺りを見回した。

「ふう……そうだよな。態々こんな朝早くに来たんだから、あいつらが居るわけがないな」

どうやら、居もしない二人の幻影に怯えているようだ。そんなに怖いなら、あんな大声で文句なんか言わなきゃいいのに。

すると、向こうから「慎二くん」と呼ぶ女子たちの声が聞こえてきた。

「おっと、女の子たちが呼んでるから、僕はもう行くぜ。衛宮、お人よしなのはいいけど付き合う相手はちゃんと考えろよ？」

「ああ。慎二も、偶には弓道場に顔出せよー！」

おそらく暗に遠坂とルヴィアのことを言つてるであろう慎二は、そのまま自分を呼ぶ女子たちの方へ歩いて行つた。確かに慎二は皮肉やなところもあつて勘違いされやすいけど、なんだかんだ言つて俺を心配してくれているあたり、いい奴なんだよな。あと、慎二。お前もあの二人と同じクラスなんだから、結局顔を合わせることになると思うんだが……



慎二たちが遠ざかっていくのを横目に自分のクラスへ向かおうと歩き出す。すると、今度は昇降口の方から女子生徒が駆けてきた。

「あつ！ごっつ、ごめんね士郎君！遅れちゃってっ！私も日直なのにつ」

「別にいいって、これくらい」

『森山奈菜巳』

桃色の髪に細目でふわふわとした雰囲気をした、桜とは別ベクトルで女の子らしい人だ。そのお人よしな性格から下級生にも慕われてるけど、その性格故によく遠坂とルヴィアの鬭争に巻き込まれてる不憫な人でもある。

「じゃあ行こうか」

「う、うんっ」

森山さんは頬をやや赤く染め、なんだか終始嬉しそうにしていたけど、触れてあげないのが優しさだろう。この前尋ねたときは、急に慌て始めちゃったし。俺は、まだ鞆を持っていて彼女と並んで教室まで向かった。

「おはよう、衛宮君」

時間が経ち、クラスメイトもちらほら教室に入ってきた頃、遠坂が今や懐かしい優等

生スタイルで挨拶してきた。

「ああ、おはよう遠坂。今日は珍しく一人なんだな」

ルヴィアとよく一緒にいるせいかな、二人でワンセットってイメージがあるからな。でも、その言葉を聞いて聞き捨てならないとばかりに、遠坂は笑顔を崩さないまま青筋を立てた。やべつ、地雷踏んだか？

「あのね、衛宮君。貴方の頭の中でどういう思考からその結論に至ったのかは知らないけれど、私とルヴィアは別に好き好ん——いつも一緒に居るわけじゃないのよ？叶うならあんな成金——お金持ちのお嬢様となんて、恐れ多くていつか蹴落と——仲間良くなるなんてとてもできないもの」

うふふ、と笑う遠坂のセリフの節々から殺気が零れる。まずい、このままだとんだかよくわからない理屈の末に怒りの矛先が俺に向かいかねない。

「まあいいわ。そこら辺の話は昼食のときにでも屋上でじっくり教えて——ぐふッ?!」

「きげんよう、シエロー！」

すると突然、会話を遮るように、ルヴィアが遠坂にエルボー・スマッシュを決めながらやってきた。

「お、おう。朝から元気だな、ルヴィア」

「当然ですわ。レディたるもの、常に優雅でなくては——げはアツ!」

あ、今度は遠坂の鉄山靠がルヴィアを吹き飛ばした。

「いきなり何すんのよ金ドリル!」

「ぐツ、知れたこと。ひとり抜け駆けしてあろうことかシエロとランチタイムなどと、この私が許わたくししませんわ!」

「なツ?!別にあれはそういう意味じゃ……」

「でしたら問題ありませんわね。さあ、シエロ!本日は我がエーデルフェルト家お抱えのシェフが腕によりをかけたランチを是非お召し上がりには——」

「あんただだって人のこと言えないじゃない!」

そして、今日も今日とて八極拳とプロレス技の応酬が始まった。ああ、なんだかいつも通りの光景過ぎて逆に安心してきた。あつ、教室に入ってきた慎二が意味もなく巻き込まれた。なんというか、一成じゃないけど、南無三。

って森山さん!いくらお人よしだからって拳の嵐を巻き起こしてる二人を仲裁するのは危け——ふ、吹っ飛ばされたああアツ?!だ、大丈夫か、森山さん?!……よかった、気絶してるだけか。とりあえず、保健室に運ばないと。おんぶは……背中に感じる感触がちよつと危険だから横抱きでいいか。おつ、一成。丁度よかった。森山さんを保健室に運んでくるから、先生にHR遅れるって伝えておいてくれ。

さてと、保健室は確か……ん？ああ、よかった。気が付いたんだな、森山さん。遠坂とルヴィアに弾き飛ばされたときはどうなるかと思っただけ。え？お姫様抱っこ？だって森山さん、さっきまで気絶してたし。何？もう大丈夫だから降ろして？いやいや、一応、保健室で見てもらった方が……つて、顔が真っ赤だぞ？熱でもあるんじゃない——つてまた気絶した?!も、森山さあああん！

---

---

「いやはや、今日も手伝いに付き合わせて悪かったな、衛宮」

朝の騒動も葛木先生が教室に来たことで鎮静化、気絶した森山さんを保健室に連れて行ったりと、ある意味でいつも通りの日常を終え、今は放課後。一成の手伝いで生徒会の備品の点検を行っていた。

「まったく、遠坂とエーデルフェルトには毎度困ったものだ。神聖なる教育の場であの

ような取っ組み合いなど」

「まあまあ。いいじゃないか、少しぐらい。二人が来てからクラスが明るくなった気がするし」

「少しじゃないから困っているのだ！まったく、あの女狐共は毎度毎度衛宮を困らせておつて……」

まあ、一成の言わんとしていいこともわかる。なんせ、あの二人の戦いでトトカルチヨが始まる始末だもんな。しかも、率先してるのが藤村先生だし。だけど、そもそもあの二人を止められるなんて、それこそ葛木先生くらいしかいないのが現状だしどうしようもない気が……でも、できれば無関係な慎二や森山さんを巻き込むのは控えてほしい。

「さて、今日はこれくらいでいい」

「え？まだ備品は残ってるぞ」

「馬鹿者。この間倒れたのを忘れたのか？」

この間、というのは俺が入院した時のことだろう。あれは、俺が体調管理を怠ったせいなんだけど、当日仕事を任せてた一成も罪悪感を持っているんだろう。まったく、そんなの気にしなくてもいいのに。

「わかったよ。それじゃあ、お言葉に甘えさせてもらおうかな」

でも、それを口で言っても聞かないのを俺は知ってる。なので、一成の言うことを素直に聞いて、少しでも一成の気の済むようにさせてあげることになっている。

「ああ、具合が悪くなったらいつでもいいのだぞ」

「流石に過保護過ぎだつて。じゃあな」

一成に会釈して、俺は今晚の献立を考えながら帰路に着くのだつた。

## 拝啓 親父、妹が3人になりました

学校から帰宅した俺は、現在リビングで夕飯の下拵えをしている。

家事は本来、家政婦であるセラとリズの仕事なのだが、まあ色々あつて当番制になり俺も参加させて貰っている。実はこの間の入院騒動でセラから『働き過ぎです!』と暫く家事手伝いの禁止令が言い渡されてしまった。料理も趣味の一つである俺にとつては非常に困ったわけで、長きにわたる説得の末、最近になってようやく解禁されたのだ。そんな訳で俺が嬉々として料理に勤しんでいると、玄関から元気な声が聞こえてきた。

「ただいまー! お兄ちゃん!」

「イリヤ? 学校から帰ってきたの——」

リビングに入ってきたその娘の姿を見て、一瞬言葉が詰まった。

そこにいたのは確かにイリヤだ。だけど、イリヤじゃない。確かに肌がやや褐色に焼けてる気がするけど顔は瓜二つだし、何より自分の中でイリヤだという確信がある。でも、同時にイリヤじゃないという確かな自信もあった。

……なんだ、これ?

正体不明の矛盾がグルグルと頭の中を駆け巡り、ある種の前後不覚に陥る。自分で自分が分からない。すると、返答に詰まった俺を心配してか”イリヤ”は不思議そうに首を傾げた。

「お兄ちゃん、大丈夫？」

”イリヤ”は俺の座っていたソファに駆け寄り、心配そうに俺の目を覗く。

……何やってんだ、俺は。

俺は”イリヤ”の頭を優しく撫でる。頭に俺の手が触れた瞬間ビクツと身体を震わせたものの、そのあとは嬉しそうに目を細め、俺に身を委ねた。

そうだ。さつきは変なことが頭を過ぎったけど、目の前にいるのは確かに俺の妹だ。何を考えることがある。

すると、俺に撫でられて気をよくしたのか、”イリヤ”は俺の胸に抱き着いてじゃれ始めた。

「ねーねー、何してるの？」

「何って……下拵えだよ。今晚の料理に使うやつ」

へー、とさして興味のなさそうに”イリヤ”が生返事で答える。その後何だか意地悪な、そう、例えるなら小悪魔のような笑みを浮かべた。

なんだか嫌な予感が……



「お兄ちゃんてさ、どんな女の子が好きなの？」

「ぶふうっ！」

あまりの想定外からの変化球に思わず吹き出す。まさか、イリヤから色恋沙汰の話題が出てくるなんて思わなかった。

「な、なんだよ急に」

「えへへ、お兄ちゃんの好みを知りたいなーって思つて」

「そ、そんなの聞いてどうすんだよ？」

俺があたふたしながら話していると、「イリヤ」は抱き着く手の力を緩め、そのまま四つん這いになるように両手両膝をソファの上につけた。

「それを女の子の口から言わせるの？お兄ちゃんてば、鬼畜きつちく」

「き、鬼畜?!」

今「イリヤ」は四つん這いになつてゐるため、必然的に覗き見る形になつてしまつていゝ。素肌が広く露出された背中に扇情的な黒の見せブラ。やや褐色な肌がそれらを引き立て、幼さを残しながらも色香というものが醸し出されていそうだ。なんと言えばいいのやら、成長したことに喜ぶべきか、色を覚えて悲しむべきか。

俺が妹の成長の方向に頭を抱えていると、「イリヤ」がにじり寄ってくる。

「……ねえ、お兄ちゃん」

右手を俺の頬に添え、顔との距離がどんどん近くなる。その顔は仄かに紅く染まり、熱に浮かされたようにトロンとした目で俺を見つめる。やがて「イリヤ」の顔が俺の目の前に迫り、そして――

「ひぶっ?!」

そのままソファの下に倒れた。

「い、イリヤ?!」

な、何が起こったんだ?!と、とりあえず、今起こった状況は――何やらパアンツと乾いた音が響いたと思ったら、短い悲鳴と共に「イリヤ」がソファから転がり落ちた。

……駄目だ、状況がさっぱり理解できない。

「な、何でもないので、お兄ちゃ――あばあッ!」

「え?ちよ、大丈夫か?!」

起き上がった「イリヤ」が再び倒れ、そのまま断続的な悲鳴と共に床をゴロゴロと転がる。

まずい。あまりにも俺の予想外のことが起こりすぎて、思考が上手く纏まらない!

するとしばらくして、まるでゾンビの様にぬるりと立ち上がった「イリヤ」が、今度は何を思ったのか唇を突き出して俺の方へ飛びかかってきた。

「せめて……最後にキスだけでも!」

「させるかあー!!」

そして、どこからか聞こえた声の後『みぎやつ』という断末魔を残し、“イリヤ”はその場に倒れた。

……つて、棒立ちしてる場合じゃない！ええつと、とりあえず何か冷やすものを！

そんなこんなで、冷やすための氷嚢を作るために台所へと向かおうとした、その時――

「クロー！」

「観念なさい！逃しは――」

これまた、予想外の出来事がやってきた。

「と、遠坂?!それにルヴィアも?!」

同級生でありクラスメイトである留学生コンビが、リビングの入り口から飛び出してきた。手に余る出来事が畳み掛ける様に起こったせいで逆に冷静になった俺は、結局二人は一緒にいるんだな、なんてことを考えていると、二人も俺の存在が予想外だったと言わんばかりに目を見開いていた。

「衛宮君……?」

「シェロ……」

さっきの“イリヤ”のように頬を紅く染め、視線を逸らしたり前髪を弄つたりとソワ

ソワし出した。というか、俺のことを知らなかったってことは、”イリヤ”に用があったのか？いつの間に知り合っただ、”イリヤ”は。そしてふと、さっきの”イリヤ”の小悪魔スマイルを思い出す。

ああ、なるほど。どつかで見たことあると思つたら、遠坂のそれにそっくりだ。言うなれば、アカイアクマならぬ白い小悪魔か。……あまり、遠坂のああいふところは真似て欲しくなかったかなあ。

そんなことを考えていると、この沈黙に耐えられなくなったのか、遠坂とルヴィアがまだ蹲ってた”イリヤ”を担いで走り出した。

「ごめん！ちよつとイリヤ借りてくわね！」

「お、おほほ！ごめんあそばせー！」

「え？なツ?!」

あまりに突然で、その上あまりにも見事な体裁きで走り去って行つたせいで反応ができなかった。

「ちよツ！待てて！」

我に返つた俺は、遠坂とルヴィアを追うべく一拍遅れて玄関へと走り出した。しかし、そこには既に二人の姿はなく、代わりに背を向けて扉に手をかけている少女と連れ去られたはずのイリヤが居た。

「……あれ？イリヤ？」

ふと、さつきまでイリヤに感じていた違和感が消えた。まるで、今の状態こそが自然であるかのように。

……まあ、それはいいか。それよりも気になることがある。何故連れて行かれたはずのイリヤがここに居るのか。何故態々凜とルヴィアがイリヤを玄関まで運んで出て行ったのか。そもそも、二人は何をしに来たのか。

疑問は尽きないが、それは確実にあの二人と関わりがあるイリヤに聞いた方が早いだろう。

「お、おとおおお兄ちゃん?! どうしたのそんなに慌てて?！」

汗を額に浮かべ、ものすごく吃りながら不器用な笑みを浮かべている。

おいおい。追及する側の俺が言うのもなんだけど、そんなんじや、何か隠してますって言ってるようなもんだぞ……

「遠坂やルヴィアと知り合いだったんだな。何時の間に知り合ったんだ?！」

「いやあ……その……あははは」

まずは軽いジャブ。いきなり核心をついても話してくれそうにないしな。

だけど、結論を言えば、俺はこれ以上訊ねることができなかつた。

「そ、そう！友達がルヴィアさんのところでメイドやってて、それで知ってて！あ、それ

でこつちがその友達の——」

なぜなら、それ以上の衝撃が俺を襲ったのだから。

「お兄、ちゃん……う？」

さつきまで玄関の方を向いていた少女がゆっくりと振り返った。後ろで止められた艶のある綺麗な黒髪をしており、俺の姿を映すその金色の瞳には不安、悲哀、孤独、苦痛、後悔、あらゆる負の感情が見て取れた。

そのとき、俺の頭に痛みが走る。

目の前の少女の、まるで人形のように感情のない姿、俺の手を引きながら楽しそうに笑っている姿、祭壇の上で泣いている姿。俺が見たことないはずの映像が頭の中に現れては消え、そして再び現れる。

……いや、何を言っているんだ。見たことがないだって？ そんなはずはない。何故なら——駄目だ。頭がぼおっとしてきた。ありもしない記憶と見たこともない風景で俺の思考はぐちゃぐちゃに混ざり合い、ただの一つに定まらない。でもわかる。でもしってる。目の前の少女こそ、俺の——

「……美遊？」

ああ、呼んでしまった。無意識だった。言葉に出す気もなかった。

だって、俺は俺が分からない。どれがおれでおれがどれだか分からない。そんな俺

に、彼女の名前を呼ぶ資格だってありはしない。

でも、それでも、彼女のあんな表情を見たら、名前を呼ばずにはいられなかった。

「——ッ、うあ……」

目の前の少女、美遊の目から大粒の涙が零れる。まるで、今まで溜め込んでいたものを吐き出すかのように。そしてそのまま、俺に縋りつくように抱き着いた。

「え……う？み、美遊?！」

イリヤが美遊の突然の事態に混乱している中、美遊は俺のシャツをこれでもかというくらい力強く掴み、絶えず涙を流し続けていた。俺は、体を震わせながら泣き続ける美遊の頭に手を乗せ、さっき「イリヤ」にしてあげたように優しく撫でる。

せめて、満足するまでこうしておいてあげよう。

そう思いながら撫でていた俺の顔は、気づかないうちにとてもやわらかいものになっていた。

「イリヤのクラスメイトの美遊といいます」

暫くして泣き止んだ美遊は、はっと気づいたように俺から離れ、取り繕うように自己紹介をした。その表情はやや紅みを帯びていて、それは泣いたせいで腫れただけじゃな

く、気恥ずかしさからきているもののようなのだ。

「ああ、初めまして。俺はイリヤの兄で衛宮士郎です」

そんな彼女に対して、俺は微笑みながら言葉を返す。ある程度時間が経ったことで俺の頭は思考を取り戻していき、今では普通に話せるくらいになった。ただ、さつき頭に浮かんだ映像には霽がかり、思い出せそうにない。

そんな俺たちの何とも言えないような雰囲気気圧されるイリヤを余所に、美遊は話を続ける。

「失礼しました……わたしの兄に似ていたもので……」

「……そっか」

「はい。今は離れて暮らしていて、私はルヴィアさんの家にお世話に——」

確かに覚えていることは少ない。でも、忘れていないこともある。

俺は、さつき振り返ったときの様に表情が暗くなっていく美遊の頭に、もう一度手を添え撫で始める。

「え？ あつ……」

最初は驚いたような顔をしたものの、その表情は次第に崩れ、恥ずかしそうにしながらも気持ちよさそうに頬を緩めた。

「大丈夫」



「……………え？」

「君はもう一人じゃない。それにもしものときは、きつとお兄さんだつて助けてくれる。だから、大丈夫」

傍から聞けばなんと無責任な言葉なのだろう。でも、不思議とその言葉にはそう思わせる何かがあつた。それはきつと、当人たちにしか分かり得ないだろう。

「……………はいっ」

それを聞いた美遊の表情は、喜びと恥ずかしさが入り混じつたような、そんな微笑みだつた。

「それでは、夜分に失礼しました」

俺の手から離れた美遊は、呆然としているイリヤを横切り、玄関の扉に手をかける。

「あつ、ちよつと待ってくれ」

「？」

俺に呼び止められ、美遊は不思議そうに振り返る。

美遊にこれ以上慰めるための言葉は必要ないだろう。だから、これは俺のわがまま。

これは俺の誓い。

「出しゃばる様なつもりはないんだけど、その……………もしよかつたら——」

そして、これは俺の覚悟。

「もし、美遊がいいと言うのなら、俺のことを『お兄ちゃん』って呼んでくれないか？」  
だって、俺は彼女たちのお兄ちゃんなのだから。

「俺たちは、美遊の味方だから。だから、絶対に助ける」

俺じゃ頼りないかも知れないけど、なんて頬を掻きながら照れくさそうに言う。けど、今の言葉に嘘はない。そうだ。絶対に守って見せる。彼女たちを害す、その何もかもから。

美遊は俺の言葉にきよんとした表情をしていた。そして、再び目尻に溜まる涙に気づいた彼女はそれを直ぐに払うと、再び俺に視線を合わせた。

「ありがとう、お兄ちゃん」

そう言って俺を見上げた美遊の表情は、咲き誇るほどの満面の笑みだった。そして美遊は玄関の戸を開け、今の自分の家へと帰って行った。

彼女の残していった温かな雰囲気余韻に浸っていた俺は、突如として襲った脇腹の痛みによって現実に戻ってきた。

「ぐふッ！な、イリヤ?!なんだよ急に?!」

「なんだよじゃないよ！何今の?!お兄ちゃん、いつの間に美遊と知り合ったの?!」

そういいながら、脇腹を殴ってきたイリヤに問い詰められる。何だか、さつきまで俺がしていた質問をもの見事に返されてしまった。

「いや、会ったのは今日が初めてで——」

「そんな訳ないでしょ?! だって、ミュのあんな顔初めて見たもん!」

とは言うものの、これ以外に言いようがないからなあ。

捲し立ててくるイリヤをいなしつつ、俺は夕飯の下拵えの続きをすべくりビングに戻る。俺に聞いても無駄と判断したのか、イリヤは頭を抱えてしやがみ込み、「うう……ク口だけでも頭が痛いのに、凜さんたちやミュまで……」なんてぶつぶつ小言を話し出す。そんな中俺は、ふと「あれ? 冷静に考えると俺、妹の友達にお兄ちゃん呼びを要求した変態ってことになるんじゃないか」という事実が付き、別の意味で頭が痛くなるのだった。

## 保健室―それは魅惑の空間

えっと、俺はさつきまで何をしてたんだったっけ？

確か、裏庭で遠坂と話してたところにルヴィアがやってきて、それで表面上は穏やかな会話で互いを口撃こうげきし合って、何故か弁当対決をすることになって、それで、突然謎の爆発が……

「せ、先輩?!大丈夫ですか?!しっかりしてください、センパイーツ!」

「あばばばばっ!」

誰かに頭をガクガク揺らされて意識が覚醒する。この声は桜?――てか、揺らし過ぎだ!余計に頭がクラクラする!

「も、もういい!起きた!起きたから!」

「あつ、よかった。気が付いたんですね」

うん。危うく2度目の気絶をするところだったけど。

裏庭で横たわっていた俺は、桜の手を借りて上体を起こす。周りをよく見ると、俺を中心に小さいクレーターっぽいものができていて、その上俺の全身がボロボロになっていた。

……マジで何が起こったんだ？

「でも酷い怪我。立てますか、先輩？とりあえず保健室に」

「あ、ああ。大丈夫——痛つつつ」

「もう、あまり無理しないでください。ほら、肩貸しますから」

立ち上がろうとするも全身の痛みにすぐさま尻餅をついてしまった俺は、桜の好意に甘え肩を借りて起き上がった。

怪我をしたとはいえ、大の男が女の子の手を借りないと立てないなんて、我ながら情けない。

「今日は、保健の先生はいないんですけど……大丈夫ですつ。私が看病しますから。こう見えても看病、得意なんですよ？」

「そうか。助かるよ、桜」

「いえ、そんな……」

いや本当よくできた後輩で、感動のあまり涙が出そうだよ。小声で『そう、夜まで……しつかり……』なんて空耳が聞こえた気がしたけど、きつと気のせいだろう。日常の象徴である桜が、一瞬何か黒いものに染まっているように見えたけど、おそらく目の錯覚か何かなんだろう。

「さあ、先輩。着きましたよ」

変なことを考えていたら、いつの間にか保健室についていたようだ。不用心にも鍵の掛かっている校庭側の入り口から入った俺たちは、桜の先導の下、ベッドの上に座らせてもらった。

「ちよつと待つてくださいね。今消毒液とガーゼを出しますから」

そう言うのと、桜は薬品棚から手際よく必要なものを取り出し、テキパキとテーブルに並べる。

「へえー、ずいぶん慣れた手つきだな」

「いえ、これでも保健委員ですから」

そして消毒液をガーゼに染み込ませ、いざ俺の患部に当てようとしたところで、びたつと、桜の手が止まった。ん？どうしたんだろう。

「せ、せんぱいっ？あの、上着を脱いで貰っても——い、いえ！別にやましい意味じゃなくて！服の下も怪我してるみたいですし！特に深い意味はっ！」

何やら桜がやたらと浮ついた声で言ってきた。ああ、そういえばそうだな。これから手当してもらおうつてのに、気が利かなかったか。

俺は桜に言われた通り、裾が破れて穴が至る所に空いているボロボロの上着を脱いだ。

「これでいいか——って桜？」

上半身裸になった俺が桜の方へ向き直ると、桜は口元、というか鼻から下を両手で押さえて顔を真っ赤にしていた。

「だ、大丈夫か？」

「はひっ?!も、問題ありません」

いや、どう見てもそっちの方が問題ありそうんだけど……

そんな俺の心配を余所に、桜は改めて消毒液を染み込ませたガーゼを俺の傷口に当てる。桜がポンポンとガーゼを当てる度に消毒液が俺の患部を刺激するが、これ以上みづともない姿を見せられない俺は声を上げるのを我慢する。そして、俺がそんな意地を張っている間も、桜は黙々と傷口を消毒していく。いや、黙々というよりなんか凝視しているように見えるんだけど。

「あの、桜? 流石にそんなにまじまじと見られると……」

「あ、す、すみません。先輩の身体、鍛えられてるなあって思ってます」

「まあ、弓道部のエースなんて広められちゃ、頑張らないわけにはいかなかったからな」  
「……」

退院した後に参加した部活動のとき、やたらと弓の調子がいいのを見た美綴が『ウチの衛宮は最強なんだ!』ってガッツポーズで野次馬に言ったせいで、噂に尾ひれがついていつの間にかエースにさせられていた。そんな偶々よく当たる日が続いただけでそ

んなこと言われちゃ、普段通りに戻った時どうなるかわかったもんじやない。そんなわけで、自宅での筋トレの時間を増やしたりと色々努力することになったというわけだ。

俺が過去のあらましを振り返っていると、それまで俺の身体をぼうつとみていた桜が突然ペタペタと触り始めた。

「うふふ……先輩の身体、素敵……」

サ、サクラサン？なんか虚ろな目をしてて怖いんだけど。

何かに取りつかれたかのように頬を紅く染めて息を荒くし、一心不乱に俺の身体を優しく触り続ける桜の姿を見た俺は、怖くて何も言い出せなかった。さっき大の男がどうのって言ったけど、訂正する。今の桜には誰であつても逆らえる気がしない。

「はあ……はあ……私、何だか熱くなっちゃいました」

そう言う桜は、自分の制服のボタンに手をかけて——つて流石にそれ以上はまずいって！

どうのこうの言ってる場合じゃなくなった俺は、桜の手を掴んで止めようとして、固まった。何故か、と聞かれればそんなのは決まっている。

それ以上の衝撃があつたからだ。

「あら、どうしたのかしら？私に気にせず、獣のように盛つたらどうなの？」

いつの間にか、入り口に保険医のカレン先生が立っていた。



「……………か、カレン先生？」

カレン先生の声を聞いて我に返ったのか、桜がギギギときこちない音を立てて入口の方へ振り向く。

「あの……………何時から其処に？」

「そうね。あなたが獲物を密室に連れ込んで、看病の名目で雌犬のごとく盛り始めたあたりかしら」

「それって最初からじゃないですかあ！うわあーん！」

「さ、桜あツ?！」

桜はカレン先生を押しのと、そのまま廊下を走り去ってしまった。

「随分と根性のないこと。そんなんじやいずれ、気が強くて文武両道容姿端麗の猫かぶり優等生ツインテールに掻つ攫われそうね」

「……………やけに具体的な予言ですな」

「まあ、いいけれど。「検閲済」の匂いを取るのって面倒なもの」

「真昼間の学校で女性がそんなこと口にしないで欲しい。飛び出していった桜やベツドに座る俺を無視して、カレン先生は深いため息と共に椅子へと腰を下ろした。

オルテンシア  
折手死亜 カレン  
華憐

イリヤとは違った銀色の髪を後ろで留めてポニーテールにしている、太股の半分ほど

の丈しかないスカートを履き、何故か大層な白衣を身に纏っている見た目20代前半の保険医だ。さっきのような毒舌を吐くこともあり、一部を除いて生徒はあまり保健室に近づきたがらないらしい。俺もお世話になるのは今回が初めてだけど、確かに評判通りの人のようだ。

すると、カレン先生は窓の外を眺めながら、スカートから延びる肢を組む。その薄幸を感じさせる憂えた瞳と、肢を組んだことで強調された脚線美が合わさり、その扇情的な姿は世の男性の心を掴んで離さないだろう。

そんな一男性である俺はというと、こんなあからさまに怪我してるんだから治療してほしいんだけど、なんて視線で訴えていた。いや、黄昏るのいいけど最低限の職務は全うしてほしいなあ。

そして暫くの沈黙の後、観念して自分で消毒しようとガーゼに手を伸ばそうとしたら、先にカレン先生がこれまた深い溜め息をついた。

「あの……何か？」

「この駄犬は、なんで何もしてこないのかしら」

「……はい？」

何もしない？いや、何もしてこないって言ったのか。それってどういう——

「あら、今ので理解できない程度 of 知性しか持ち合わせていないの？誰もいない部屋で、

目の前に不用心にも足を組んで挑発している銀髪美女保険医がこうして無防備に座っているというのに、なんで発情期の獣の如く襲い掛からないのかしら、って言ったのよ」  
改めて言い直されたけど全く理解できねえ！

「ちよっ！何言ってるんですか！先生！」

「なによ。こうして懇切丁寧に話してあげたのに、まだ説明を要求するの？それなら、その場で3回まわって『私めはカレン様の忠実な犬です。ワン』と言いなさい」

「いや、言葉の意味は分かりますけど！というか、その3回まわった後の台詞もおかしい！」

「な、なんなんだこの人は?!桜の暴走を止めずに観察しようとしてたり、俺に襲わせようとしてたり、まるで意味が分からんぞ！」

「だ、大体、女性に無理やりとか、そんなのするわけないじゃないですか！」

「どうして?……あつ、もしかしてホ——」

「違います！というか、意味もなく相手を傷つけるわけないでしょう！」

「……随分と殊勝なことね。男子高校生と言えば万年ピンク脳だと思っていたけれど」

それは流石に偏見だ！なんて心の中でぶつくさ不満を言っていると、カレン先生は立ち上がり俺の方へ近づいてきた。

その姿はただ歩いているだけなのに——言いようのないナニカを感じる。

『女性に手を上げない』なんて高らかに謳う自称紳士でも、その根底には雄の獣欲が伏在している。彼らはそれを尤もらしい詭弁で抑え込んでいる気になっているだけ」

カレン先生の毒舌交じりの暴論。普段なら一蹴しているであろうそんな与太話から、俺は気を逸らせないでいた。

「似非紳士でも草食系ヘタレでも、その瞳には隠し切れない色欲が現れる。それこそが人の業であり、心に巢食う魔であり、そして生類の証でもある」

カレン先生は俺の目線に合わせる様に屈む。

目を逸らせない。

身体が動かせない。

抵抗できない。

「でも、貴方にはそれがない」

彼女の言葉が、俺の剥き出しの心を侵食する。

「貴方は番でない雌に手性欲を抱かないを出さない。それが人の世の常識だから。でもそれは矛盾している。だって、そもそも性欲のない雄が番を見つけないことなんてできないのだから」

「貴方には人としての当然の機能がなない。それでいて、人であろうとする貴方は、そう――

——まるで、人に憧れる人形のように」

「元々素質はあったのかも知れない。けれど、少なくとも今までの貴方は、私の記憶に残らないほど平凡な犬だったはず」

「どうしたら、短期間でここまで壊れられるのかしら。ふふっ……こんな欲のない眼なんて初めて」

「貴方、興味があるわ。とおつても、ね……」

「はい、終わったわよ」

「へあッ?!」

気が付くと俺の身体は包帯が巻かれており、治療が完了していた。

いつの間に? 確かさつきまで——えっと、あれ? 何があったんだっけ?

「今まで見た患者の中で一番の損傷具合だったけれど、まだまだね。今度は骨を折つてきなさいな」

「なっ、はあっ?!そこは、もう怪我をしないようにー、とかいう所じゃないんですか?!」  
「何言ってるの。それだと、重傷で苦しむ患者が私に罵詈雑言を浴びせられてそれでも私の介護を受けざるを得ないという、怨恨と屈辱入り混じった視線を向けて貰えないじゃない」

め、滅茶苦茶だこの人ー!なんなんだ?!ドSなのか?!ドMなのか?!それとも、今はやりのハイブリットってやつなのか?!

「ほら、治療が終わったんだから出ていきなさい。元気な人間の声を聴くと虫唾が走るの」

なんだそりゃ?!——ってカレン先生!モツプで押さないで!まだ俺上半身何も着てないからあー!!!



「——みや、風邪を引くぞ。起きろ、衛宮」

「ぬあッ?!」

「こ、ここは何処?!俺は、さつきまで保健室に——」

「何を寝ぼけている。早くしないと次の授業が始まってしまうぞ」

あ……つ、そうか。さつきのは夢だったのか。そういえば、そもそも保健室に行ったのは二か月前の話だったな。

まだ重たい瞼を擦りつつ、次の授業の準備をしようとお鞆から教科書を取り出す。すると、廊下の方からドタバタと何やら大きな足音が聞こえてきた。これは——こつちにへ近づいてきてる?そして、教室の扉が勢いよく開けられた。

「たいへんたいへんたいへんたいへんたいへんたいへん!変態——!じゃなかった大変よお——!」

「ふ、藤村先生?!」

教室に乱入してきたのは、イリヤのクラスの担任をしている藤村先生だった。

……なぜか全身ジャージ姿で。

「ど、どうしたんですか?そんなに慌てて」

「これが慌てずに居られますか?ってんだこんちくしょうめえ!イリヤちゃんが、イリヤちゃんがドツチボールでボールを顔面して気絶があ——!」

「落ち着いてください!言ってることが支離滅裂ですよ!」

「ええい！まどろっこしい！いいから黙って私についてきなさい！ごおーとうーへえええるツ！」

「わ、わかりましたから！一咸！次の授業抜けるって言つといてk——ちよツ、襟元掴まないでぐぼあツ！」

予想以上の怪力の前に俺は為す術もなく、藤村先生に引きずられながらイリヤが倒れて（先生の言葉から察するに）運ばれたであろう保健室に向かうのだった。

〈 i n t e r m e d i o 〉

「あら、まだ何か用？」

ドツチボールの試合で気絶したイリヤが運ばれた保健室。『軽い打撲』と『頭打つてどうこうなる系のそんな感じのやつ』と診断されて、イリヤをここまで運んできた彼女の友達は追い出された。しかし、その中で美遊だけが再び戻ってきた。

「いえ、その……イリヤの様子を見るに——」



しかし、来訪者は美遊一人ではなかった。ドドドドドツ！と轟音を立て、勢いよく保健室の扉が開けられる。

「イリヤちゆわあぁん！お兄さん連れてきたわよ！目を覚ましてえ！」

「藤村先生！落ち着いて！」

騒音をまき散らしてやってきたのは、イリヤたちの担任である藤村大河と、彼女に引つ張られる形でやってきたイリヤの兄である衛宮士郎だった。

「ふ、藤村先生？それと——お兄ちゃん？」

「え？ああ、美遊。丁度よかった。一体何が？」

「あつ、い、イリヤは顔にボールが当たったただけだから大丈夫」

大河から大した説明もなく拉致られた士郎は、美遊からイリヤの現状を聞くと安堵の息を漏らす。結局は、大河が大げさに騒いでいるだけのことだった。

「……やれやれ」

大河の放つ雑音を聞き流しているカレンが小声でそう呟くと、控えめながらも嬉しそうに士郎と話す美遊を見て、思考する。

イリヤス必フイー然ル 美遊調然 クロエ奇跡 そして此処にもう一人——

するとカレンは何か思い立ったのか立ち上がり、美遊と士郎の下へ歩き出した。

「……」

シロウの目の前に立つと、濁りきってそれでいて澄んでいるような眼で士郎を、正確には士郎の瞳を見つめる。

「えつと……何か？」

「相変わらずね、その眼」

「はい？」

カレンは目を合わせながら士郎に近づき、自らの右手を士郎の頬へと伸ばす。そして

「——ッ」

「うわっ！み、美遊？」

美遊が士郎の身体に抱き着き、視線でカレンを威嚇する。

『私のお兄ちゃんに触れるな』

美遊はカレンのことをあまりよく知らない。いや、それどころか、この学園に居る誰であってもカレンを深く理解している者などいないだろう。それでも美遊は、カレンはよくない人だと本能的に感じ取った。あるいは恋する乙女の勘。

「あらあら。小学生なのに、もう立派に女ね」

カレンはそれを称賛するわけでもなく侮蔑するわけでもなく、ただ淡々と言葉にした。

カレンは再び思考する。

あの面倒な子達を中心にいる、この壊れたお人形。私が彼を人間にしてあげたら、彼女たちはどんな表情を見せるのだろう。悲痛、拒絶、憤怒、憎恨、憎悪、自棄。そんな感情に染まる彼女たちを想像して、思わず下腹部に熱がこもる。

ああ、なんてこと！それこそ人間の賤劣！人間の悪性！そんな感情に支配された彼女達はきつと——きつと愉快すばらしいなことに違いない。

内々から溢れ出そうになる歓喜の声を押し殺し、カレンは士郎から名残惜しそうに離れて再び自分の椅子に座る。そして、徐に活動日誌を開いた。

『本日は異常なし』

## 身体は包丁で出来ている　血潮は鉄分で心は俎板

家にあまり帰れない親父へ

元気にしていますか？今何処に居るかわからないけど、体調には十分に気を付けて下さい。

さて本題ですが、親父が留守の間に……いや、もしかしたら親父は既に知っていたのかももしれないけど——

「従妹のクロエちゃんよ。仲良くしてあげてね」

俺に新しく妹ができました。

セラや俺が目を見開いて驚いているのを余所に、お袋はニコニコとした笑顔を崩さないまま、まるで大したことでもないかのように家族が増えたことを報告してきた。

お袋が家に連れてきたのは、やや赤に染まった白髪に褐色の肌。そしてなんといつても、双子なんじゃないかっていうぐらいイリヤと瓜二つだ。……これ、隠し子とかじゃないよな？

彼女はやや不安そうな表情で紹介されていたものの、俺の姿を見つけるや否やパアアアと花が咲いたような笑顔になり、そのまま俺の方へ近寄ってきた。

「これからもよろしくね、おにいちゃん！」

「あ、ああ、よろしく。ええつと……クロエ？」

「クロ、つて呼んでほしいな」

「わ、わかったよ、クロ」

名前を呼ばれた彼女、クロは満面の笑みを浮かべて俺に抱き着く。でも、なんだか既視感というか初めて会った気が全然しないな。なんでだろ。イリヤとそっくりだからかな？

……あと、何だかイリヤの方からの妙に重いプレッシャーを感じる気がする。

「はい。それじゃあせつかくだし、今日はクロのプチ歓迎会をしましょう！晩御飯も豪華にね」

「お、奥様?!急に仰られても、今あるのは至って普通の晩御飯の材料しか——」

「まあいいじゃないか。ありふれた食材だって、いくらでもやりようがある」

俺はクロを一旦離し、キッチンへと向かう。

「なっ！今晚の料理担当は私ですよ！何を勝手なことを！」

「豪勢について注文なんだから一人じゃ作るの大変だろ？それに、和食とかは俺の方が作り慣れてるしな」

「ッ！その言葉、宣戦布告と見なしましたよ！」

仕舞つてあつた俺のエプロンを取り出すと、セラも俺に続いて料理の支度に入る。懐かしいな。俺が料理を始めたてだった頃は、セラとよく一緒に料理したもんだ。

誰かと一緒に料理する。それは、相手よりもより美味しい料理を作ろうと意識し、互いが互いを高め合う。この瞬間こそ、俺という器が満たされ、俺の魂が本来あるべき姿になる。

——ああ、そうか。衛宮士郎は料理に特化した存在だったのか。

「——ついで来れるか」

「はっ！何を馬鹿なことを。貴方の方こそついてきなさい！」

セラの言葉を合図に、俺たちの調理たたくいが始まった！

「……ねえ、なんだかお兄ちゃんとかセラの様子、変じゃない？」

「懐かしいわ。昔はああやって二人で料理対決してたものね」

「うん。あのときは毎日が食べ放題だった」

お袋やリズたちはひそひそ話しているのも耳に入らず、俺たちはただ目の前の食材てきに意識を集中させた。

「うわあー……す、すごい」

イリヤが感嘆の声を上げる。目の前のテーブルに並ぶのは、和洋折衷あらゆる料理がこれでもかと敷き詰められていた。

流石にやりすぎたかな。セラなんか、気力を使い果たしたのか椅子にうなだれてるし。

「それじゃあ、冷めないうちに頂いちゃいませうか。いただきまーす」

目の前の料理に満足した様子のお袋が食事開始の挨拶をする。それにリズ、イリヤ、ク口も続き食事を始める。

「美味しい！美味しいよ、お兄ちゃん！」

「あはは、ありがとうイリヤ」

滅多に見ない豪華な食事を満足そうに食べるイリヤ。すると、その横に座っているク口はぼーつとしながら箸を止めていた。

「うん？どうした、ク口。何か食べられないものでもあったか？」

「え？あ、ううん！違うの！」

ハツと我に返ったクロは慌てて食べ始める。その様子は別に無理しているという訳ではなく、純粋に美味しそうに食べているように見える。うーむ、だったらさっきのは一体……

すると、クロの瞳から一筋の涙が零れ落ちた。

「あ、あれ？どうしたんだろ、私。おかしいな。幸せなはず、なのに……」

「クロ……？」

まるで決壊したダムのように次々と涙があふれ出す。クロ自身も自分がなぜ涙を流しているのかわからないように、必死に涙を止めようと目を擦る。そんな様子を見た俺は、ハンカチを持ってクロの側に寄り添い、目尻に当てて涙を拭き取る。

「……お兄、ちゃん？」

「大丈夫。俺達はもう家族なんだから、我慢なんてする必要はないんだ」

俺は出来る限り優しく微笑みかけた。過去、クロに何があつたのかは分からない。だけど、これからは俺達家族の一員として暮らすんだから、クロの負担を減らしてやることは出来ると思う。

涙を拭き終えると、クロは俺の胸に飛び込み、服を力強く掴んだ。

「……じゃあ、少しだけ……このまま」



クロは身体を震わせ、再び涙を流す。それを俺に、いや、誰にも見られないように顔を埋める。俺はそんなクロを宥めるように、優しく頭を撫でる。

こうして、俺たちとクロは家族になった。

それから暫く経ち、クロはすっかり我が家に馴染んでいった。いつの間にか俺の布団に潜り込んでいたり、調理実習でイリヤと料理対決したり、俺の布団に潜り込んでいたり、姉妹頂上決戦が勃発したり、俺の布団に潜り込んでいたり e t c .

そして今日はどうと——

「というわけで、第一回衛宮家お料理教室の開催よー！はい、拍手！」

「わ、わー」

ノリノリのクロと顔がやや引き攣ってるイリヤ、そして美遊と共に、何故か料理教室が始まった。

「すみません。私までお邪魔しちゃって」

「ん？いいって、気にしなくても。妹の面倒を見るのも兄の務めだからな」

「あつ——」

そう言つて、委縮気味だった美遊をリラックスさせるために頭を撫でる。最初はビクツと身体を震わせたものの、次第に緊張が解れて表情が柔らかくなつていく。

「あー！ミユばかりずるーい！私も私も！」

「お、お兄ちゃん！そうやって直ぐ手を出すのはどうかと思ふんだけどー！」

「ちよつ！そんなんじゃないつて！いいから落ち着け！」

その様子を見たクロとイリヤが、ここぞとばかりに俺の周りに近づいてくる。小学生とはいえ、女三人寄れば姦しいということか。まあ、主に騒いでるのは二人だけだ。

「で、でもどうしたんだ？急に料理を教わりたくないんで」

とりあえず話を進めるために話題を振る。俺の知る限り、二人が特別料理に興味を持つてる様子はなかったと思うんだけど。あと、イリヤから聞いた話じゃ美遊の料理の腕は凄いらしいし、こつちは付き添いかな？

「なんでもなにもない！この間の料理対決の雪辱を果たすために決まつてるわ！そして、この前はイリヤに奪われた『お兄ちゃんのちゅー』を今度こそ手に入れてみせる！」

「な、何言つてるのクロ?!」

「お兄ちゃんのちゅー……?イリヤ、どういふことか説明して」

「ひいっ！ミユが今まで見たことない能面みたいな表情になつてる?!」

この間のつてことは、家庭科のお菓子作りの実習のやつか。確かあの時は、勝者のご褒美としてイリヤのおでこにキスして、そのままセラに折檻されたんだっけか。

「まあ、なんであれ、料理を教えてほしいって言うんなら大歓迎だ。それで、何を作りた  
いんだ？」

「うーん、そうね。どうせなら甘〜いスイーツがいいな〜」

「それならホットケーキはどうだ？今ある材料で作れるし、クリームとか果物でトッピングすればそれっぽくなるだろ」

小麦粉や卵とかは常備してるし、まさかイリヤたちに触発されてお菓子を作ろうと生クリームやドライフルーツを買い込んでいたのが役に立つとは思わなかった。

「ホットケーキか。それだったら然程難しくなさそうだし、決まりね。ほら、いつまでも  
じゃれてないでさっさと始めるわよ」

「……分かった」

「た、助かったあ〜」

クロの呼びかけで二人が落ち着いたところで頭巾とエプロンを身に纏う。まあ、教室  
なんてクロは言ったけど、今回は気軽に楽しんで貰えることが第一かな。

「それじゃあ——つて、そうだ。家はフライパンとか泡立て器とかも2つずつしかない  
んだった。どうするか」

「あ、今日は私も教える側にまわるから、大丈夫」

「そうか？一人だけごめんな、美遊」

「ううん、平気。えへへ」

まだ小学生なのにすっかりしてるなあ。俺が小学生のときなんて結構やんちゃしてた気がするのに。

(……ねえ、なんかミュの様子おかしくない？なんであんなにお兄ちゃんにデレてるのよ！)

(そ、そんなこと言われても。確かに、お兄ちゃんがミュに『お兄ちゃんと呼んでもいいんだZ E ☆』って言ってたけど)

(くっ！お兄ちゃんの話し力を甘く見てたわね)

今度はイリヤとクロがごそこそ話してる。うむうむ、姉妹仲良くやってるようで、お兄ちゃんは安心だ。

「じゃあ始めるか。まずは、そうだな……ボウルを冷蔵庫に入れて冷やしておくか」

「え？空のボウルを？」

「ああ。生クリームを混ぜるのに使うんだけど、生クリームは常温だと水と油に分離しやすくなるから、あらかじめ器を冷やしておくんだ」

「へえ〜そうなんだ」

とりあえず、ボウルを冷蔵庫に入れるついでに必要な材料を取り出してつと。

「改めて始めるぞ。最初は薄力粉をボウルにふるい入れて、泡だて器でかき混ぜるんだ」  
「これは家庭科の実習でもやったから大丈夫！」

そう言つてイリヤがふるいに薄力粉を入れ、元気よくふるいにかける。こらこら、そんなに激しくやつたら零れちゃうぞ。

クロの方はというと、イリヤとは違つて静かに作業してる。が、カサカサカサカサと単純作業が続く、中々減らないふるいの中身を見て段々作業が雑になつてきてる。

「はあ……なんか、思つてたよりも地味ね、これ。省略しちゃダメ？」

「クロ、雀花と同じこと言つてるし」

「あはは。こういう作業をコツコツやるのも、おいしい料理を作る秘訣だからな」

「はい、と生返事で返すクロだけど、一応は作業に戻つた。

暫くして、二人ともボウルに薄力粉をふるい入れ終わる。

「二人とも終わったな。それじゃあ、別のボウルに卵と牛乳を入れてかき混ぜてくれ」

「やつと料理つぽくなつてきたわね。卵を割るの、一度やつてみたかったのよね」

「卵は平らな所でコンコンつて叩いて罅を入れるのがコツだぞ」

イリヤとクロは卵を手取つてボウルに出そうと四苦八苦している。まあ、卵を割るのつて慣れないうちは難しいからな。

「むむむ、中々割れな——ああつ！」

そうこうしている内に、イリヤが卵を割るのを失敗して黄身ごと殻をボウルに落とししまった。

「あらあらあら。イリヤつてば、上手に割れないからつてドジツ娘アピール？なんてあざといのかしらー！」

「ち、違うもん！それに、クロだつて似たようなものでしょ！」

「落ち着いてイリヤ。落ちた殻は菜箸でとれば大丈夫だから」

すぐさま美遊がイリヤのフォローに入り、卵の殻を取り除く。イリヤの言つてた通り結構慣れた手つきだな。あれ？もしかして俺、要らないんじや——

「そんなことない。お兄ちゃんは必要」

「お、おう。そうか……」

俺の思考を読んだかのように、美遊が作業の手を止めずに言い放つた。ま、まあ、必要と言われて悪い気はしないかな。あはは………背筋に冷たいものが走るのに目を瞑れば。

「はい、取れたよイリヤ」

「わあ！ありがとう、ミュー！」

美遊が殻を綺麗に取り除いたボウルをイリヤに渡すと、俺に視線を合わせた。その姿

からは心なしか、ブンブンと激しく横に振る犬の尻尾が幻視<sup>み</sup>えてきた。

取り敢えず美遊の頭に手を乗せ、頭巾がずれないように頭を撫でてみる。すると、美遊は嬉しそうに目を細める。もしかして、お兄さんに会えなくて寂しかったのかな。それで代わりに俺に甘えてるとか。

（やっぱり、ミュの様子おかしくない？あのデレツぷり、下手したら凜やルヴィア以上よ）

（うーん。でも、お兄ちゃんもこの間の一件より前に会ったことないって言ってたし……あつ、でも確か、お兄ちゃんがミュのお兄さんに似てるって言ってた気が）

（……………）

（クロ？）

俺が頭を撫でると、またイリヤとクロが内緒話してる。今どきの小学生は色々あるのか？まあ、とやかく口出しすることもないか。

そんなこんなで、料理教室は少し不安を抱えつつも始まるのだった。

「結構かき混ぜにくく——うわあつ！」

「おっと、危ない危ない。零すところだった」

「イリヤ。泡立て器はそんなに力を入れてかき混ぜなくても大丈夫だから」

イリヤが力いっぱいかき混ぜた結果、ホットケーキのタネが入ったボウルが明後日の方向に跳んでいったり

「焼き加減はこんなものかしらね。そおーれ！」

「のわあああ！熱い熱い熱いッ！」

「あッ」

「クロ！何やってるのー！」

クロがフライパンで焼いてるホットケーキを片手でひっくり返そうとして、ホットケーキが俺の顔面に跳んで来たり

「お兄ちゃん（猫撫で声）、クリームってえー、これくらい混ぜれば——」

「デザートの上に流し込むとかならこれくらいでもいいけど、絞出しに使うならもっとかき混ぜた方がいい」

「……あらー。ありがとう、ミュ」

「……どういたしまして」

クロと美遊が時々火花を散らしてたり

とまあ、所々ハプニングはあったものの兼ね兼ね順調に進んでいった。



「よし、完成ー！」

「うん。二人ともよく頑張ったな」

料理開始から2時間後、ホイップクリームとフルーツでデコレーションされた2つのホットケーキが完成した。

「じゃあ、お兄ちゃん！食べて食べて！そして、美味しかった方にご褒美のちゅーを！」

「なっ！クロ！またそんな！」

「……ずるい」

またかー。食べ比べるのはいいんだけど、ご褒美はちよつと……。あれ以来セラが妙に警戒した目つきで俺を見てるしな。

現に今も――

「あはは。悪いけど今回はお預けな」

「ええー、なんでよ」

「だって、ほら」

俺はクロたちの横、リビングの入り口を指さす。そこには、こめかみを若干ヒクヒクさせながらこつちの様子をうかがっているセラの姿があった。

「あ、セラ。帰ってきてたんだ」

「なーんだ。もう帰ってきちゃったのね。せつかくお兄ちゃんにちゅーしてもらおうチャンスだったのに」

「なーんだ、じゃありません！クロさんはもつと恥じらいといものを持ってですねー」

セラの説教をクロは軽く聞き流す。いつもなら暫くしてから適当なところで止めるんだけど、今はホットケーキの試食もあるからな。早々に止めるか。

「まあまあ。今はそれくらいで——」

「なんですか？ああ。そういえばさつき、私が居なければチューしてあげられたのにー、とか言っていましたね。すみませんね、お邪魔してしまつて」

「いやいやいや！さつきのはそういう意味じゃないから！変に曲解してないか?!」

「嘘おつしやい！このシスコン&ロリコン！」

「わあー！お、落ち着けてセラ！」

やべつ！今度は矛先が俺に向いてきた。しまったな、こういうときは大抵俺が巻き込

まれるってわかっていたはずなのに。

結局セラの矛先は、イリヤがホットケーキの試食をセラに進めるまで収まることはなかった。

途中から愚痴の内容が『貴方はイリヤさんやクロさんを甘やかしすぎなんです！』とか『そんなんじゃないよお二人のためになりません！』とか話がおかしな方向に行っていたけど、気にしないでおこう。何故かクロは頬を膨らまして美遊は光のない眼でこつちを見てたけど、きつとホットケーキを早く食べてほしかつたんだろう。うん、そういうことにしておこう。

## 鶴翼不欠落

思えば、違和感を感じていたのは最初からだつた。

家の目の前に突然建てられた西洋風の豪邸。始めは、違和感はその現実離れした存在のせいだと思っていた。でも、それは間違いだつた——

「悪いな衛宮。こんな遅くまで手伝ってもらつて」

「気にするなつて。俺だつて弓道部員なんだから、当然だろう？」

季節も初夏に入り暑さが日に日に増していく頃、テスト期間に入る関係で部活動が休みになるので、俺と美綴は部室や弓道場の片づけをしていた。二人で始めたはいいものの思いのほか時間が掛かつてしまい、気が付けが太陽がもう沈もうかという時間だつた。

「結構暗いし、送ってこうか？」

「いいっていいって。家の方向全然違うし。じゃあ、また明日な」

「おう、じゃあな」

俺に背を向けて手を振ると、美綴は校門を出て俺の家がある方向と逆の方向へと歩き出した。流石にこれ以上遅くなるのもあまりよろしくないの、俺もそのまま帰路に就いた。

なんて仰々しく言ったものの、辺りが薄暗いからと言って特にこれといった事件に巻き込まれるなんてこともなく、俺はそのまま自宅の扉を開けた。

「ただいま」

学園指定の靴を脱ぎ、2階にある俺の部屋へと向かう。ん？イリヤの部屋、やけに静かだな。いつもならクロと騒いであることが多いんだが。

勉強中かな、なんてさして気にも留めず、自室に入った俺は普段着に着替えるべく制服を脱いだ。

「士郎さんちよつといいですか——」

すると、珍しいことにセラが俺の部屋に尋ねてきた。……俺が上半身裸のタイミングで。

「——ッ?!し、失礼しましたッ!」

俺の姿を見たセラは瞬く間に顔を赤らめ、そのまま勢いよく部屋の扉を閉めた。いや、別に上着ぐらいでそんな気を遣って閉めなくても、ちよつとした要件ぐらいなら言ってくれてよかつたんだけどなあ。まあいいか。

俺は素早く上着を羽織り、ズボンも履き替える。そして、扉の向こうのセラに着替え終わつた旨を伝えた。

「……さ、先ほどはすみませんでした。私としたことがノックもせず」

まだ頬が紅潮しており、気まずそうに俺から視線をずらしながら入ってくるセラ。別に、家族みたいなもんなんだからそんなに気にしなくてもいいのに。

「いいって別に。それで、何の用だつたんだ？」

「あ、そうでした。実はイリヤさんとクロさんが先ほど急いで出かけて行つたらしくて」「イリヤとクロが？こんな時間に？」

確かに妙だ。学校に忘れ物をしたとか？だとしても、こんなくらい時間に出歩くのはあまりよくないな。

「はい。リズが言うには、向かいの家に行つたのでは、と」

「なるほどな。それなら少し見てくるよ」

俺は再び玄関に戻る。もしルヴィアのところに居るならそれでいいし、もし居なかつたとしても美遊なら何処に行つたか見当がつくかもしれない。なんにしても、一度

訪ねてみれば分かるだろう。

そして玄関の扉を開けた俺は、向かいの豪邸いへの門の前に立った。

——今、俺の目の前の洋館から放たれる違和感いごは異様だ。門の外から見た外観は何ともないはずなのに、まるでそれがあるべき状態でないかような、よくわからない感覚が俺の中に走る。

そうだ、俺が感じている違和感いごはこれだ。本来の姿を捻じ曲げて誤認させているような。でも何故、今になってその違和感いごが強くなったんだ？

そんな疑問に応えるかのように、無意識に俺の手が門の扉に掛かる。普段ならこんな時は、チャイムの一つでも鳴らすところなのだろう。だけど俺は、その手を止めることができなかつた。

そして、この選択が良くも悪くも、俺の運命を大きく動かすことになる。

「な……ッ?!」

目の前にあるのは瓦礫の山。いたって普通の住宅地に圧倒的な存在感を放ってそびえ立っていた先ほどもまでの豪邸は見る影もなく、瓦礫の所々からは火の手が上がり、煙が日の沈んだ夜空をさらに黒く染める。

そして、その炎に照らさせるように、瓦礫の前に4つの人影が見えた。ひとつは俯せになりながら顔を上げ、ひとつは膝をつき、ひとりは地面に倒れていた。そして最後にひとりは、倒れている人影に近づき――

「ッ――！」

それを見た瞬間、俺の身体が動き出す。何故だかわからない。状況は全く呑み込めない。だけど、直感が俺に訴えかける。

あれを守れ。なんとしても守れ。それこそが俺の、たった一つの願い！

脚に力が入る。魔力が行き渡り強化された俺の脚力は、普段の何倍もの速度で敵に肉薄する。

「うおおおおおッ!!」

俺が手を振り上げると同時に一振りの大剣を投影する。銘も逸話もない、ただ振り下ろすためのだけの剣。それが、俺の腕力と自重による自由落下の力が加わり、強力な一撃となつて敵に降りかかる。

「ッ?!」



しかし、俺の存在に気が付いた奴は、振り返ると同時に自身の右拳で剣の腹を殴り、その軌道を逸らした。

「く——ッ！」

躲された！いや、構わない。この攻撃は倒すためのものじゃない！

俺は大剣をすぐさま放棄し、相手の突き出した腕の外側を回り込むように身体を横に右回転。そのまま奴と立ち位置を入れ替える。

これでいい。これで倒れている人との間に割り込むことができた。

「……お兄、ちゃん？」

背後から投げかけられたその言葉を聞いて、ようやく気が付く。奴と距離が開き、戦場を見回す余裕ができた俺は改めて認識する。

目の前で俺の剣を躲したのは、二の腕や脇腹の部分が破れたワイシャツに、至る所がボロボロのスーツを着た男装の麗人。そして、俯せになり驚愕の表情で俺の方を見ているのはイリヤ、同じく膝をついているのがクロ。そして、俺の後ろで倒れているのが、美遊。

正直訳が分からなかった。どうして三人は普段の装いとは全く違うコスプレのような恰好をしているのか、そもそも何故こんなところで倒れているのか、そして目の前の女性は何者なのか。すべての状況が、俺の理解を超えていた。

「……どうして、ここに？」

「だけど、これだけは分かる。これだけは言える。俺は妹達を害する奴らの敵で——  
「助けに来たぞ、美遊」

——妹達の味方だということだ。

「またしても増援ですか」

すると、目の前の敵が拳を構え戦闘態勢に入る。

「見たところ、貴方の登場は彼女たちにとつても想定外のようにすが」

「ああ。俺は、イリヤたちがここで何をしていたかなんて知らない」

「そうですか。私は貴方に用はありません。抵抗しなければ、身の安全は保障しまし  
う」

奴から上から目線の忠告。当たり前だろう。おそらくこいつは俺よりも格上だ。そ  
んなこと、対峙してる俺が一番理解してる。だけど——

「それは無理だな。お前が、妹達の敵である限り」

そんなこと、俺が引く理由にはならない！

「わかりました。それでは、実力で排除します」

俺の言葉に淡々と答えた奴は、人間離れした速度で俺に接近する。常人なら反応する  
ことさえ難しく、かつての俺なら何もできなかつただろう。でも、今は違う！

「トリースオン  
投影開始!」

奴が振った拳を、干将莫耶を交差させて受け止める。しかし、衝撃は殺しきれずに俺の身体が少し後退する。

「ツ?!その剣は——ツ」

「はあああツ!」

俺の双剣を見て奴が一瞬怯んだ瞬間、俺は右手の莫耶で切りかかる。しかし、相手は難なく左手の甲で受け止めると、そのまま外へ弾いた。

馬鹿な?!こいつの身体は鉛でできてるだけでもいいのか?!でも、ここで引くわけにはいかない!

すかさず左手の干将で攻撃、今度は右手の甲で弾かれる。

右斬上 逆袈裟 袈裟斬り 左薙

俺の陰陽剣から繰り出される斬撃のすべてが弾き、弾かれ、打ち合うたびに火花が散る。くそっ!攻めきれない!

そして、気持ちに焦りが出た俺の隙を、奴は見逃さなかった。今まで守りに回っていた敵は、俺の懐に深く踏み込む。

「くッ!」

ジャブ フック ストレート ボディブロー

奴の繰り出す拳のすべてを流し、受け止め、いなす。打って変わって攻勢に出た奴の拳はまさに嵐の如く。いつも凜とルヴィアの殴り合いじゃれを見てたけど、本当にあれがじゃれ合いに見えてくるほどこいつの拳は速く重い。

「すごい……あのバゼットと、互角に戦ってる……!」

誰かから眩きが零れる。有効打が入らず互いに攻めあぐねている今の状況は、傍から見れば拮抗しているように見えるだろう。でも、それは違う。俺の方は既に本気に近い力を出しているのに、奴はまだ底を見せちやいない。まだ手札があるという意味なら俺も同じだが、そもそも奴はそれを見せる隙すら与えてくれない。

しかし、このまま戦えばポテンシャルの差で確実に負ける。なら、ここは無理しても押し通す!

俺は再び干将莫耶を交差させて受け止め、奴の拳を押し出す。それと同時に後ろへ跳び、追撃に干将莫耶を投合。体勢を崩された奴は両拳で双剣を弾くも、その場で一瞬動きを止めた。

たつた一瞬。でも、俺にはそれで十分だ。

俺は魔術回路に魔力を流し投影を開始する。創り出すのはあの夜の再現。あの黒い弓兵を打ち抜いた、捻じれ狂った一振りの剣。それが今まさにこの手に現れ——

「ッ——!お兄ちゃん!宝具を使っちゃ駄目ッ!」

「ッ?!」

突然叫んだクロの言葉を聞いて、手に込めていた魔力が霧散する。どういふことだ、宝具を使つたらいけないって——

刹那

俺の思考が空白になった瞬間、奴は瞬く間に俺に近づき、そのまま腹部に強烈な蹴りを叩き込んだ。

「ぐあぁッ!」

そして俺は為す術もなく、背後のルヴィア邸だったものと思しき瓦礫に突っ込んだ。

「お兄ちゃん!」

「……急所を外しましたか」

イリヤの悲痛な叫びが聞こえる。砂塵が舞う中、俺は腹に溜まった痛みを吐き出すように咳をして、気絶しないように何とか意識を保つ。奴に攻撃される寸前、咄嗟に体幹をずらしたのが功を奏したようだ。腹部に鈍痛が走り意識は朦朧とするものの、致命傷は何とか回避できた。

「お兄ちゃ——ぐうッ!」

『美遊様! まだ動くのは危険です!』

「これは美遊と……誰の声だ?」

「でも、お兄ちゃんが……」

『それに、恐らくフラガラックの残弾はまだあのケースに残っています。切り札が封じられている以上、闇雲に行っても返り討ちにあうだけです!』

「でも……ッ!」

美遊と誰かの口論を聞きながら意識を覚醒させ、同時に思考する。

フラガラック

ケルトの光神ルーが持つとされる短剣。抜こうと思うだけでひとりでに鞘から抜け、一度放たれば、鎧でも防げない一撃で敵が抜刀する前に斬り伏せる。

おそらくこいつが奴の切り札なんだろう。どうやって宝具を封じるのかは分からないけど、さっきの美遊とクロの言葉から察するに恐らくフラガラックは宝具、いや、切り札の発動に反応するタイプの宝具といったところか。宝具そのものに反応するのなら、仮にもC—ランクの宝具である干将莫耶に対して使わないのがおかしい。

そして伝承から考えるに、フラガラックは手に持つことなく剣を抜くことができる。だが逆に言えば、現在無手のあいつはフラガラックを使うために一度抜刀する必要があるってことだ。

要は、抜刀させる隙を与えずこちらの攻撃を叩き込めばいい。現状で、その条件を満たすことができるのは——

「トレースオン  
投影開始」

両手に干将莫耶を投影、さらにもう一組の干将莫耶を待機。俺は吹き飛ばされてボロボロになった身体に鞭を打ち立ち上がる。

確証はない、保障もない、間違えれば死ぬ。

……上等だ。そんなもの、俺は何度も体験してきた！

頭の中の霧が晴れ、俺の思考が冴え渡る。

「——ッ!!」

投げる。

魔力を込め、それぞれ左右から同時に放つ。投擲された刃は敵の首を狙うように弧を描き、鶴翼は美しく十字を象る。

「疾ッ!」

岩をも砕く宝具の一撃、奴はそれを素早い二撃のジャブで軌道をずらし、躲す。双剣は再び手元に戻ってくること叶わず、そのまま敵の背後へと飛んでいく。

無手となった俺に、敵が間合いを詰める。だが俺は自ら、奴の懐へ飛び込まん突進する。

「泰山山を抜二至り 黄河水を割ヲ渡り」

待機させていたもう一組の干将莫耶を投影し、投合。その軌跡は奴の首を落とさんと

再び飛翔する。

「同じ武器……?!だが——ッ」

同じ手は二度通じぬと言わんばかりに両手のガードを上げ、最小限の動作で弾く。双剣は奴の手に押し出され、そのまま両翼に跳んでいく。

これでは駄目だ。これでは足りない。

二度の攻撃の末に距離を詰め、それと同時に放たれた奴の拳が眼前に迫る。その瞬間、俺の腕に魔力が走る。

「な——ッ?!」

俺の手に握られた、三度目の双剣が奴の拳を受け止める。急ごしらえの無理のある投影、それは俺の身体の負担となるだろう。だけど、そんなこと後で考えればいい。

再三の振り出し。

接敵、布石、そして現在。いま三度に及ぶ攻防、そのすべてがこれからの伏線。

「両雄、共二命ヲ別ツ」  
なわ離ちることなきその両翼

俺は再び奴の拳を押し出し、それと同時に後ろへ跳躍。干将莫耶を左右に、奴を挟み打つように投擲する。

「それはもう見ましたッ！」

押し出された奴は即座に体勢を立て直し、目の前に迫る双剣の迎撃態勢に入る。だ



が、今度のはこれだけじゃない。

「——ッ?! 飛来物、6ッ?!」

ありえない方向からの奇襲。言うまでもなくそれは、先の二投で弾かれた双剣だ。

干将莫耶

その夫婦剣は干将<sup>片割れ</sup>が莫耶<sup>片割れ</sup>を引き寄せる。後方、側方、それぞれに弾かれた二組の陰陽

剣は今投擲したそれと引き合う。その集約点は中心、無数の白刃と黒刃が奴を六方向から襲撃する!

「この程度ッ!」

だが奴は怯まない。これでもまだ足りない。

何故なら、6の剣戟が奴の身体を貫くまでに、奴には抜刀と迎撃の猶予がある。だからこそ、これまでが伏線。そして、これが秘策。

奴との距離—— 1 m!

「壊れた幻想」

瞬間、囲うように飛来する6つの刃が爆発する。重なる爆音が、奴の姿を包んで光と音の中に消し去った。

「ッ?! 何、あの爆発?!」

『膨大な魔力の詰まった剣を爆発させたんです! 宝具<sup>ノウブル・ファンタズム</sup>を使い捨てるなんて中々大

胆ですなえ、士郎さんは』

六つの爆炎が互いを押し合い、その中央は熱と光が犇めき合う。そこは最早、地獄の業火ですら生温い。

だが、その予想とは裏腹に、爆炎の中からひとつの影が飛び出した。

「ッ——はあッ……はあッ……」

奴は地面を転がりながら爆発から抜け出し、息も切れ切れになりながら両手両膝を地面について立ち上がろうとする。

ワイシャツの背中への布は吹き飛び、そこからは酷い火傷を負ったのが目に見えてわかる。恐らく、剣が爆発する寸前に爆破の範囲以外へ逃れようと、自ら剣のある方向へ突っ込んだのだろう。何故——いや、もしかして奴は、分かっているその選択肢を取ったのか？

六方向からの起爆は、奴を逃がさないように閉じ込めるだけでなく、中心部の空気が一気に過熱することによって奴は息をするだけで体の中が焼かれる、そうした外と内の二面攻撃が目的だった。もし、囲まれたあの状況でそれを回避するなら、奴の様にダメージ覚悟で外へ逃げるしかない。

あの一瞬でそれを思い立ち、実行したというのなら……いや、今そんなことはどうでもいい。問題は、奴はまだ戦えるということだ。

さっきの技のせいで魔力の残りも少ない、奴の切り札封じがある以上こちらにもう有効打はない。このまま、持久戦に持ち込むしかないか……!」

「そこまでよー!」

俺が覚悟を決めて脚に力を入れようとした瞬間、後ろから制止の声をかけられた。

この声は――

「と、遠坂?!」

そこに居たのは急いで此処に駆け付けたらしく息を切らした、トートバッグを持つ遠坂の姿だった。

「こんばんは、衛宮君。お互い聞きたいこともあるだろうけど、とりあえず後にして頂戴」

そう言うと、遠坂は奴の方へ視線を向ける。

「ねえ、バゼット。提案なんだけど、今回はこれで痛み分けてことにしない?」

「なッ?!」

「イリヤたちはステッキから魔力を供給し続けることができるから、時間をかければ回復できる。貴女も随分手酷くやられたみたいだし、持久戦になれば有利になるのはこつちよ」

遠坂の口から出たのはとんでもない言葉だった。

痛み分けて、つまり停戦しようってことだよな？ 奴の目的を俺はよく知らないけど、今更そんなことが通るとは思えない。第一、奴がそんなものに応じる性格じゃないってことぐらい、剣と拳を合わせただけの俺にだって分かる。

それとも、遠坂には何か策があるのか？

「……問題ありません。この程度のダメージで戦えないほど、軟な鍛え方をしていません」

やはりというべきか、遠坂の言葉を一蹴して奴は再びファイティングポーズに入る。

「でしようね。でも、私としては貴女にあまり無理をされると困るのよね」

「？それはどういう——」

奴が疑問を言い切る前に、これが答えだと言わんばかりに遠坂がトートバッグから一枚の大きな紙を取り出し、奴を含めた俺たち全員に見せつけた。

なんだ？あの、黒くてウネウネしてるような絵は。

「これは冬木の町の地脈図。それで、問題はその左下」

「まさか……ッ！」

遠坂が示した場所。そこには黒く塗りつぶされた模様の末端に一か所だけ、白い正方形が描かれていた。

「そう。この虚数域に存在する正方形、いや、正確には立方体か。これは——八枚目の

カードよ」

「ッ?!」

虚数域、カード、八枚目。

俺にはさっぱり理解できない話だけど、ここに居る誰もが目を見開いて動揺しているところを見ると、余程の事態なのか？

「魔力を吸収し続けているこいつの戦闘能力は未知数、今は少しでも人手が欲しいのよ。全カードの回収が貴女の任務なのなら、勿論断らないわよね？」

「……」

少しの間遠坂と睨み合いをした奴は、やがてその構えを解いた。そして少し足元をふらつかせながら、地面に投げ捨てられていた奴の物であろうボロボロのスーツの上着を羽織り、同じく地面に転がっていた縦長のケースを背負った。

「停戦する、と見てもいいのかしら？」

「好きに取っただいて構いません。これは現場判断の域を超えています。一度、協会に指示を仰がなければ」

「ちよつと待ちなさい！」

門を出て立ち去ろうとしているあいつを遠坂が引き止める。

「……何か？」

「停戦協定つてのは、互いに譲歩して成り立つものでしょう?」

そう言い放った遠坂からは、心なしかいつものアカイアクマオーラが出ている気がした。……思わず身震いが。

それを聞いたあいつも眉間に皺を寄せて溜め息をすると、懐から3枚のカードを取り出し遠坂の方へと投げる。そしてそのまま、もうこの場に用はない、と早々に立ち去って行った。

相変わらず凄いな、遠坂は。あの状況で奴を追い払っただけじゃなく、戦利品までぶんどるとは。

奴の姿が見えなくなったことで気が抜けたのか、俺は腰が抜けてしまい、その場にしゃがみ込んだ。

「お兄ちゃん!」

その様子を見た美遊が、慌てて俺の方へと駆け寄ってきた。それに遅れる様に、イリヤとクロも走ってくる。

「ああ、美遊。それにイリヤとクロ。大丈夫だったか?」

「う、うん。私は平気——」

「そんなことよりもお兄ちゃんは?!何処か怪我してない?!」

「あはは、これぐらい問題ないって」

三人が思い思いに心配してくれていると、向こうからカードを拾い終えた遠坂がやってきた。

「そうね。色々言いたいこともあるけど、取り敢えず——ありがとう、衛宮君。助かったわ」

「……いいって別に。俺はただ、こいつらを守りたかったただだから」

そういつて三人に目を向ける。

今なら自信を持つて言える。俺は、自分の手で守ることができたんだ。イリヤを、ク口を、そして美遊を。

そして、その充実感と達成感と共にこのポロポロになった服を見て、セラにどう言い訳しようかなあ、なんて考えながら満天の星空を眺めていた。

## これまでのあらすじ（士郎視点）

あの激闘の後、俺たちは倒壊した屋敷の地下室に居るルヴィアを救助しに行った。遠坂曰く、この屋敷の惨状のほとんどはルヴィアによつて目眩しのために引き起こされたものようだ。ここに来るまでは一緒にいたから命に別状はないとのことで、実際に駆け付けた時も、苦しうに腹部を抑えていたものの話せるだけの元気はあった。

それよりも、俺がこの場にいたことの方に驚かれたけど。

一緒に居た執事の人の応急手当てによりルヴィアの容体が落ち着いたのを見届けると、一先ずこの場は解散となった。ルヴィアは勿論のこと、イリヤたちもだいぶ疲れが溜まつてるようだし、なにより俺もさっきの戦闘で精神をすり減らして身体が怠い。とてもじゃないけど、話のできる状態じゃなかった。

そういうわけで泥だらけになって自宅に帰ったイリヤ、クロ、俺は、その姿を見て驚くセラを適当にいなしつつ、そのまま自分のベッドに倒れる様に寝転がり、気絶するように眠りについた。



そして翌日——

「あら、もう工事始まつてるのね」

「お見舞いに来ましたー」

お見舞いという名目で、俺はイリヤとクロの3人で再び屋敷を訪れた。セラたちには一応、ボイラーの爆発事故ということで誤魔化してある。まあ、お見舞いつてのも嘘じゃないけど。

「衛宮君？それにイリヤとクロも」

「ああ、シエロ！態々ありがとうございますわ！」

そこには、昨日の負傷が嘘のようにハイテンションなルヴィア、それに遠坂と美遊も居た。

「あ、これ。お見舞いの品。セラが渡しておいてくれた」

「ありがとう、お兄ちゃん」

セラから受け取った品を美遊に渡す。イリヤとクロも昨日はだいぶ疲れてたし少し心配だったけど、見た感じ美遊はもう大丈夫そうだな。

「それにしても、ルヴィア。怪我はもう大丈夫なのか？」

「ええ。淑女<sup>レディ</sup>たる者、あの程度の怪我を引きずるほど軟ではありませんの」

そう言つてルヴィアは優雅に胸を張る。なんとというか、淑女つて凄いな。

「ならよかった。嫁入り前の女の子の肌に傷でも残ったら大変だから」

「嫁?!……し、シエロ?もしよろしければ、傷跡が残ってないか私の身体わたくしを確認していた  
だいても——」

すると突然、ルヴィアが顔を赤くしてモジモジしながら上着を臍の辺りまで捲り始めた。ちよつ!こんな外でそれは流石にまずいつて!

「白昼堂々何やってんのよあんたは!」

「ぶべらっ!」

しかし、寸のところで遠坂のツツコミという名の張り手がルヴィアの頭を直撃した。ふう、助かった。……主に俺が、世間体的な意味で。

「またしても邪魔を!何ですの?羨ましい?シエロに触診して貰えるのがそんなに羨ましいのかしら?だったら惨めだったらしく言いなさいな、この駄メイド!」

「あ、あんたみたいな痴女と一緒にするな——」

そうして、いつの間にか触診することになっていた俺を余所に取っ組み合いを始める遠坂をルヴィア。あー、これを見ると落ち着くのは、俺の日常が段々と侵されているということなのだろうか。

俺が安心した様子で二人の殴りげんか合いを見ていると、右足に思い切り踏まれたような痛みが走った。

「痛ッ！な、なんだ？」

すぐさま右側へ顔を向けると、そこに居たのはつーんとした感じで頬を膨らませているイリヤだった。

「ど、どうしたんだ？イリヤ」

「べっつにー」

いや。明らかに不機嫌ですオーラを出されて、別について言われてもな……

「もうっ！お兄ちゃんってば、ルヴィアの裸を想像してそんなに頬を緩めちゃってー」  
「なッ?!」

今度は、クロがとんでもないことを言い出した。なんだそりや！もしかして、遠坂とルヴィアのやり取りを見てほっとしてたのを曲解したのか？!

「ご、誤解だつて！俺は別にそんな——」

「お兄ちゃん。どうしても、というのなら私が。物足りないかもしれないけど、きつと私ならお兄ちゃんを満足させてあげられる」

「み、みみみミュ?!何言ってるの?!」

と思つたら、今度は美遊がクロの比じゃないほどの爆弾を投下してきた。

もう勘弁してくれーッ！

イリヤが美遊の肩をガクガク揺らしているのを横目に、俺の独白は心の中だけで虚し

く響き渡るのだった。

---

---

ところ変わってホテルの一室。

遠坂とルヴィアの取っ組み合いは何時もの通り引き分けて終わり、その頃にはイリヤたちの騒ぎも収まった。そして俺たちはようやく今日の本題を思い出した二人に連れられ、皆でルヴィアが宿泊している新都のホテルへとやってきたのだ。

それにしても、ホテル最上階のスイートルームとか初めて入ったぞ。仮住まいでこれなんだから、やっぱりルヴィアってかなりのお金持ちだよな。

「さあ、自由におかけになって下さいな」

ルヴィアに促されるように、高級そうなソファに腰掛ける。イリヤは雰囲気やや気圧され、クローは興味津々に辺りを見ながら、俺の後に続いて座る。

「衛宮君、紅茶でよかったかしら」

「ああ。ありがとう、遠坂」

目の前のテーブルに、遠坂が居れたであろう紅茶が人数分配膳される。そういえば、遠坂はルヴィアの家でメイドのアルバイトしてたんだっけ。

一通り配膳が終わると遠坂も椅子に腰を下ろし、これでテーブルを囲うように全員が座った。

「さて、それじゃあキリキリ話してもらおうわよ」

遠坂がいつものツンとした言動とは少し異なるベクトルで、やや威圧するように話し始めた。その言葉の節々からは日常とはかけ離れた何かを感じる。なんとというか、遠坂の別の一面を見た気分だ。いや、もしかしなくてもこの間の出来事は、間違いなく俺の知らない遠坂やルヴィアの”日常”なのだろう。

「それは構わないんだけど、出来れば俺にもこの間のことを教えて欲しい」

「……そうね、いいわよ。等価交換は魔術師の基本だし、もしかしたら衛宮君の事情にも関わってるかもしれないしね」

魔術師？ まあいいか。別に隠すことでもないし、遠坂からも事情説明の確約を貰ったところで、俺はあの日のことを話すことにした。

「イリヤ。俺が入院したの、覚えてるか？」

「え?う、うん。4ヶ月くらい前だよね」

あの日——今の今まで忘れていた、俺が非日常と出会った日のことを。

「そうだ。あの時はただの過労ってことになってたんだけど、実は俺、その日に妙な奴に襲われてさ」

「妙な奴?」

「お、襲われたって!お兄ちゃん!なんでそんな大事なこと黙ってたの?!」

「どうしてって言われても……俺もつい昨日まで忘れてたんだよ」

イリヤに問い詰められ、俺はあの日あったことを思い出す。そう、理由はわからないが今では鮮明に覚えてる。

「昨日まで、ね。イリヤ、一先ずそのことは後にして。続けて、衛宮君」

「おう。一瞬目の前が歪んで、そう、例えるなら何かが反転したような感覚に襲われて、気が付いたら全身に刺青を施した男に襲い掛かれたんだ。それで——」

魔術回路に魔力を巡らせる。そして俺は、その手に干将莫邪を投影した。突然武器を出したことで皆一斉に反応したが、構わず俺は話を続ける。

「———それいつもこれと同じ剣を持っていた」

「ツ?!まさか、それはツ!」

「……」

俺の言葉聞いて心当たりがあるらしく、その場の全員が反応する。でも、ルヴィアは特に驚愕していたのに対し、遠坂は一瞬目を見開いた後に思案顔となった。

暫く続く沈黙。今の話はそんなの予想外だったのか？いや、それよりも、この反応を見るにあの日のこととイリヤたちの事情はどうやら無関係じゃなさそうだな。

「えっと、その後はどうなったの？」

年長者二人が固まってしまったところで、美遊が話の続きを促す。俺はもう不要だと投影した双剣を消し、話を続けた。

「俺は奴から逃げるために昇降口へ走って、それから——」

俺は再び思考の海にダイブする。あの時は必死だったな。日も暮れた学園で襲われて、何とか昇降口から外に出て、それで——

「色々あって今に至る」

「——はあ?！」

遠坂が、お前ふざけてんのか、と訴えかけてくるように睨み付けてくる。ちよっ！そんなに威圧しないでくれよ遠坂！

「し、しょうがないだろ！その時はとにかく無我夢中でよく覚えてないんだから！気が付いたら、俺も同じような力を使うようになってたんだって！」

何故だか分からないけど、あの時の、初めて力を発現した時の状況は記憶に靄がか

かった様に思い出せない。だけど、俺はこの力を使い奴を撃退したことは確かだ。

あれ……? そういえばこの感じ、前にどこかで――

「もういいわ。つまり、4か月前の一件で初めてその力を使えるようになった、そういうことでもいいのね?」

「ああ、そうだ」

俺の答えを聞いた遠坂はルヴィアと小声で相談し始めた。やはり、何か思うところがあのだろうか。といっても、このまま蚊帳の外で、二人で勝手に納得されるのは困る。

「遠坂、ルヴィア。話し合うのもいいけど、今度は俺にも説明してくれないか?」

「……それもそうね。結局、衛宮君のことは、何もわからないってことが分かっただけだし」

あはは、それを言われると何も言い返せないな。まあ、当事者である俺自身が理解できていないんだから当然と言えば当然だけど、中々手厳しい。

「さて、何から話したのかしら。そういえば衛宮君。貴方のその力、どういうものか理解してる?」

「え? ああ、なんとなくだけど。魔術によるものだろう?」

俺の言葉を聞いてイリヤが驚いたようにこつちを見る。そりやそうか。少し前まで一般人だったはずの俺が、魔術の知識を持ってたんだから。



そう、俺の力は剣を生み出す投影魔術のようなもの。かつての俺が知り得なかった魔術、そして投影の知識。それが当たり前の様に俺の頭に刻み込まれているが、それは恐らくこの力を手に入れた時に同時に手に入れたんだろう。

「……そう、理解しているのね。じゃあ取り敢えず、私たちがロンドンから日本にやってきた理由から順に説明しましょうか」

また少し思案顔になった遠坂は、すぐに切り替えてテーブルの上に3枚のカードを並べる。これは、確か遠坂が昨日のあいつから受け取ったやつか。

「これは『クラスカード』といって高度な魔術理論で構成されている——って言っても分からないか。要は英雄の力を呼び出せるトンデモカードなのよ」

「セイバー、アーチャー、ランサー、ライダー、キャスター、アサシン、バースーカー。この7枚のカードが冬木の地に散らばっているのを魔術協会が発見しまして、その回収の為に私たちが派遣されました」

英雄っていうと、アーサー王とかヘラクレスみたいな偉業を残し伝説に語られる存在ってことか。

魔術協会がどういったものなのか知らないけど、何だか映画や小説みたいな話だな。実際にこんなことがあるなんて。いや、そういえば俺も、非日常って意味なら昨日体験したばかりだったか。

ん？でもおかしいな。

「なあ、遠坂とルヴィアの目的ってカードを回収するだけなんだろう？何でそれだけのために態々二人が来たんだ？」

「それは、勿論それだけじゃないからよ」

俺の問いを聞いた遠坂が、眉間に皺を寄せて頭を押さえる。

……何かあったのだろうか？

「クラスカードはさっき言った通り英雄の力を引き出せる。でもそれが、地脈に流れる魔力を吸って、あろうことかカードが実体を持ったのよ」

「本物には遠く及びませんが、曲がりなりにも英雄。普通の人間じゃ相手にもなりませんわ」

そんな化け物が冬木に7体も?!それは確かに只事じゃないな。

「そこで、大師父に対抗策として礼装を持たされてこつちに来ただけど——」

『それこそが私、愛と正義のマジカルステッキこと、カレイドルビーちゃんなのでえす！』

「うわっ！」

すると突然、イリヤの髪を掻き分けて、輪の中に星形の飾りがある羽の生えた変なのが飛び出した。

いや、マジで何なんだこれ？

「ルビー。今日は朝からやけに静かだと思ったら、出待ちしてたの？」

『イエクス！こういうのは第一印象が肝心ですからね！』

イリヤとルビーそれは親しげに話す。

……なるほど、一理あるな。おかげでこいつの性格がよく分かった。こいつは真正のトラブルメーカーだ。

『そして私が妹のカレイドサファイアです。士郎様、以後お見知り置きを』

「え？あ、ああ。よろしく」

続いて美遊の髪をかき分けて、妹と名乗るサファイアが出てきた。さっきのルビーと違って羽が青いリボンのような形をしていて、中央の飾りが六芒星になってる。そして何よりも、ルビーあれよりもそうだ。

『私たちカレイドステッキは、もうそんじょそこの礼装とは比べ物にならないくらいすんごい魔術礼装なのです！』

『主な機能としましては、Aランクの魔術障壁、物理保護、治療促進、身体能力強化、無制限の魔力供給などがあります』

「そのかわり、フリフリの衣装を着させられるんだけどね……」

イリヤが死んだ魚のような目で虚空を見上げる。昨日の恰好はこのステッキのせい

だったのか。

と、とにかく、詳しくは分からないけど凄いつてことは伝わった。そのすんごい魔術礼装とやらの力を使って冬木中に散らばった実体化英雄を倒し、クラスカードを回収するのが遠坂とルヴィアの仕事ってことか。

でも、それだとひとつ分らないことがある。

「今の話を聞いている限り、このカレイドステッキつてのはカード回収のために渡されたんだよな。それなら、なんでイリヤと美遊が使ってるんだ？」

俺の記憶が確かなら、確か昨日の戦いのときにこのカレイドステッキに似たものを見た気がする。そのときは円形の胴体の下から棒見たいのが伸びてて、イリヤと美遊がそれを杖みたいに持ってたはず。

「それは、その……」

「ええつと、なんといいましょうか……」

俺の問いかけを聞いた途端、遠坂とルヴィアがあからさまに目を逸らした。おい、何をしたんだ一体。

俺が二人を呆れたような目で見てみると、やれやれ仕方ありませんねえ、と言いなからルビーが説明を始めた。

曰く、カレイドステッキで変身した魔法少女は二人で一人と言われるくらい互いの連

携が必要なんだとか。それを聞いて、俺はすべてを理解してしまった。あー、いつも通り喧嘩して、ステツキに見放されたのか。確かにこの二人が仲良く手を取り合う姿なんて想像できない。向こうの責任者は、いったい何を考えてこのステツキを渡したんだ？

「それで、新しいパートナーとしてイリヤと美遊を選んだって訳か」

『その通りでございませす  
Exactly!』

なるほどな。イリヤたちが関わっている理由はわかった。

この調子じゃあ、イリヤたちの代役として魔術協会とやらから補充要員を連れてきたとしても、おそらく交代には応じないだろうなあ。

「遠坂。カード回収の任務、まだ終わってないんだろ？」

「え？！ええ、そうよ」

「だったら、俺にも手伝わせてくれないか？」

「ええっ?!」

俺の提案にイリヤが声を上げて驚く。そんなに意外だったか？

「えっと、私としては助かるんだけど、いいの？正直、衛宮君には関わりのない話だと思っただけ」

「なに言ってるんだ。俺も冬木に住んでるんだから無関係じゃないさ。それに、イリヤたちだけに無茶をさせるわけにはいかないからな」

俺としては正直、イリヤたちが昨日のような危険な目に合うのは到底許容できるものじゃない。だけど、クラスカードを放っておけば冬木に住む皆に危険が及ぶ可能性がある。もちろんそれは、イリヤたちだって例外じゃない。

だったら、俺にできることは近くに居て皆を守ってやることだけだ。

「……ごめんさい。貴方の妹を巻き込んでしまった」

「別に、遠坂が直接何かしたわけじゃないんだろ？ だったらいいって。本人達も、納得しているみたいだしな」

そう言って、イリヤたちの方を見る。昨日、あれだけ危険な目に合っていないながらも、その瞳の奥にあったのは戦いの恐怖ではなく守れたことへの達成感だった。そんな眼をされたら、俺はもう何も言えなくなってしまった。

いつの間にか人間的にも大きくなっていて、その成長が嬉しいような寂しいような。

「そういえば、まだ昨日の奴のことを聞いてなかった」

「バゼットのことね。あいつはカード回収任務の前任者。アーチャーとランサーの実体化した英雄をステゴロで倒した、怪物じみた奴よ。因みに、そのアーチャーが多分、衛宮君が戦った相手ね」

そんなとんでもない奴だったのか！ よく昨日は追い払えたな。

「あれ？ なんで遠坂は俺が戦った相手が分かったんだ？ さっきの言いぶりだと、直接接

敵したわけじゃないんだろ？」

「あ、えつと、それは……」

「それは、私がアーチャーのクラスカードの力を使えるからよ」

遠坂が言いよんどんでいるところにクロが割り込んで答えた。

なるほどな。だから、昨日俺が宝具を使おうとしたタイミングが分かったんだな。言われてみると、昨日のクロの恰好は何処となくあの弓兵に似ていたような気がする。

「その後、任務は正式に私達へ引き継がれたはずなのですが、何やら協会の方で動きがあつたらしく。まったく、困つたものですよ」

忌々しそうにルヴィアが吐き捨てる。

あー、もしかして、なんかお決まりの派閥争いとかそこらへんが原因なのか？冬木の危機だつてのに手柄の争奪とか呑気なもんだな、そういう奴らは。

「でも、今その件は大して重要じゃなくなつたわ。むしろ問題なのは——」

「……八枚目のカード」

遠坂に続くようにそう呟く美遊の表情は、どこか暗く、なにか追い詰められているようだった。

「そう。協会でも見つけれなかった八枚目。発見が遅れたせいでどれだけの魔力を溜め込んでるか、どれほどの化け物になつてるのか想像もできない。その上、カードがあ

るのが遙か地下深くって言うんだから厄介なんてもんじゃないわよ」

その遠坂の口ぶりから、おそらくイリヤたちが今まで戦つてきた英雄てきよりも遙かに強いのだろう。勿論、昨日のバゼットよりも。

『もう！そんなにネガティブじゃ勝てる者も勝てませんよ。凜さんもルヴィアさんも、普段は対して活躍できないんですから、こういうときぐらいは頑張つてください。愉悦ラヴ& 愉快ピースです！』

「うっさいわ！元はと言えばあんたが——」

ルビーの煽りを皮切りに遠坂が騒ぎだし、イリヤと美遊がそれを諫めに向かう。

俺はそんな様子を見ながら、この平和な日常を守つて見せると心に誓いながら、仲裁を手伝いに行くのだった。



## 衛宮家に泊まろう!

結局あの後、カード回収の手段はルヴィアが確保することに決まり、そのまま解散になった。なんでも、カードが普通の手段では到底行くことができない場所にあるらしく、準備に時間がかかるようだ。なので、遠坂からのお呼び出しがあるまでは特にやることがない。

なんだか、せっかく意気込んだのに空回りした気分だ。

そんなわけで、イリヤたちも俺もいつも通り夏休みを過ごすことになった。そして今日日は――

「ただいまー!」

おっと、来たみたいだな。

夕食の準備を一時中断し、玄関へと出迎えに行く。

「おかえり、イリヤ、クロ。そしていらっしやい、美遊」

玄関から入ってきたのは、買い物袋をぶら下げたイリヤ、クロ、そしてやや大きめの鞆を持った美遊の三人。今朝出かけるときに水着を買ってくると言っていたから、買い物袋の中身はそれかな。

「さき、上がってくれ」

「はい。お邪魔します」

明日、イリヤたち3人は俺引率の下、同級生の友達と海へ行く予定になっている。それでイリヤが『どうせだから家ウチに泊まって、一緒に行こう』と誘ったらしい。まあ、美遊が今寝泊まりしてるのは新都のホテルだし、あそこからだとちよつと遠回りになるからな。そして、イリヤの提案にお袋も乗り気で了承して、今日美遊が泊まることになったというわけだ。

「夕食の支度は今してるから、もう少し待っててくれ」

「お兄ちゃんの料理かあ。楽しみだなー」

「ああ、今日はクロのときみたいに腕によりをかけて作るから、期待してくれていいぞ」  
「クロのとき？それってまさか——」

「ぐッ！」

今までの攻防に耐えきれず、思わず膝を突く。

「いくら料理ができるといっても、所詮は学生！前は不覚を取りましたが、炊事家事洗濯身の回りのお世話を本職とする、メイドたるこの私に敵う筈がないのです！」

無様に床に這いつくばっている俺を、セラは高笑いをしながら見下ろす。

確かにそうだ。俺はセラのような卓越した技術もそれに至る経験も足りない。だが、それがどうした。そんなもの、俺が諦める理由にはならない！

「えっと、イリヤ。あれは一体……？」

「あー、聞かないで。というか、聞かれても私にも分からない」

「セラってば、お兄ちゃんと二人きりの世界に入って羨ましいなあ。まあ、割り込むのは無理そうだけど」

俺は膝にまだ力が入るのを確認すると、その場から立ち上がり、床に突いた手を綺麗に洗う。

「おや、力の差を思い知らされて猶立ち上がりますか」

当たり前だ。ここで引くわけにはいかない。俺はセラの挑発に応える様に、二刀一對の包丁を取り出す。

「ツ！それは『ZツWツイIッLッLンIンGグ』最高峰のモデル、『ツインセルマックスMD67』ツ?!分不相応なツ！」

……そうだ。俺は勘違いしていた。俺は料理を極める者じゃない。俺は無限にレシピを内包する世界を作る。それだけが、衛宮士郎に許された調理だった。

「セラ、俺はあんたを超える」

忘れるな。イメージするのは常に最強の自分。

難しい筈はない。不可能な事でもない。もとよりこの身は、ただそれだけに特化した存在——！

「いくぞ！アインツベルン包丁術——」

俺の言葉を合図に頭上へ人参、玉ねぎ、ジャガイモ、その他野菜や果物を放り投げる。

「模倣『瞬撃／千裂断』ッ！」

そして、俺の両手に持つ包丁が空中に放られた野菜たちを縦横無尽に切断する。

「なんか凄い技が出たーッ?!」

「あ、あれはー」

「知っているの、リズっ！」

「うむ。あれはアインツベルンのメイドに代々伝承される『アインツベルン・調理の法』のひとつ。その包丁さばきは神速に匹敵しながらも極めて繊細で、一瞬のうちに獲物を切り刻むことができるという。民明書房刊『お願い！アインツベルン相談室』より」

「まさか、士郎がこれほどまでの使用人スキルを習得していたなんて。このママの目を

もってしても見抜けなかったわ」

「アインツベルンって、凄いい……」

「違うから!別にアインツベルンは万国びつくりショーじゃないから!」

バラバラになった野菜や果物が、ボウルの中に吸い寄せられるように入っていく。

「こ、これは!ここまで丁寧に飾り切りを?!」

当たり前だ。これは岩をも砕く大胆さと針穴に糸を通す繊細さを併せ持つ技。幼少の頃、セラが俺の前で実演して見せてくれた、その再現。

「いくぞセラ。レシピの貯蔵は十分か」

「は——思い上がりましたね!」

そして、俺とセラは再び調理の中へ身を窺す。

「ふうー……、流石に今日は張り切りすぎたな」

食事も終え、食べ終わった食器を洗いながら時折肩に手を当て、首をグルグル回して

コリを解す。

今日は3人ということもあってか俺もセラも前回以上に白熱してしまい、食材も潤沢にあつたせいか結果的にかなり豪快な量になってしまった。まあ、そのほとんどはリズが食べてくれたんで事なきを得たんだが。

そしてセラはというと、前回自分だけダウンしたのが相当悔しかったのか、後片付けを俺に任せて他の家事に向かった。まあ、足元は覚束ない感じだったけど。

『まー、ミュ——大胆——』

『こ、これ——過激——じゃ——かな……』

すると、お風呂から出たのか、イリヤたちの声がこつちまで聞こえてくる。3人仲良くお風呂に入る辺り、相変わらず仲は良さそうでお兄ちゃんは安心だ。

『……ちよつと行——』

『み、ミュ?!それ——流石に——!』

それにしても騒がしいな。何かあつたのか？

「お兄ちゃん」

おっと、一番乗りは美遊か。

「おう、美遊。どうし——ぶふうっ!」

キッチン越しに美遊の方へ顔を向けると、そこに居たのはピンクのネグリジェに身を

包んだ美遊の姿だった。

「どう? お兄ちゃん。似合ってる? ルヴィアさんが持たせてくれたのだけれど」

「そ、それを俺に聞くのか?!」

ルヴィアの奴、いったい何を考えて小学生にこんなものを持たせたんだ?! いや、一応寝巻だから別におかしくないと言えはおかしくないけど……ああー! やっぱり金持ちの思考回路はわからん!

「あらー。駄目じゃない、士郎。女の子が服の感想を求めてるんだから、ちゃんと答えてあげないと」

俺がパニックになっていると、お袋がニヤニヤしながら横槍を入れてきた。くそっ! 相変わらずこういうネタには敏感だな!

お袋に恨みがましい視線をぶつけていると、いつの間に近づいたのか、美遊が俺の腕を掴んだ。

「お兄ちゃん。どう、かな?」

再び視線を戻すと、美遊がネグリジエの薄い布の奥から湯上りのしっとりとした肌を見せ、その瞳に僅かながらの潤いを持たせながら、上目使いで俺の方を見てくる。

その光景を見た俺は思わず息を飲む。そして――

「何やってるの、お兄ちゃん!」

「ひでぶっ！」

突然顔面に向かって投げつけられた丸い輪っか状の物体（というカルビー）に視界を遮られ、そのまま床に倒れ伏した。

「ミュも！流石にそれはシャレにならないから！パジャマなら私の貸すから！」

「……分かった。このくらいにしておく………今回は」

『『今回は』?!』

「じゃあミュ。今度は私に貸して〜」

「クロも駄目に決まってるでしょ〜」

三人が騒いで、というかイリヤがクロと美遊を諫めている間、とりあえず俺は床に倒れたままになっておく。こうなってしまうえば、下手に会話に参加すると藪蛇にしかならないので、後は嵐が過ぎ去るのを待つしかない。俺の身に着けた処世術の一つだ。

『いや〜士郎さんの周りは楽しそうですね〜』

このステツキめ、他人事だと思つて……っ！

結局、美遊がイリヤに連行されて再び脱衣所に戻るまで、俺はひたすら床に寝そべつて耐え忍ぶのだった。

不幸中の幸いと言えば、この騒動中にセラが下りてこなかったことか？流石にあの場面を目撃されたらどうなるか……想像したくない。



〈 i n t e r m e d i o 〉

「ママ」

「なに?イリヤちゃん」

夜もだいぶ更け、皆が寝静まる時間になったところ、イリヤがアイリに話しかける。

「あの、なんとというか……とつても狭いんだけど!」

現在イリヤたちは、アイリの寝室の二つあるベッドをくっつけ、右からイリヤ、アイリ、クロ、美遊の順で同じベッドに入っているのだ。

「いいじゃない。せつかくミュちゃんがお泊りに来てるんだから」

「だとしても、ママが居るのはおかしくない?!

「イリヤちゃんつてば、そんなに大きな声を出したら近所迷惑でしょ?」

もー!と声を上げるイリヤを難なく往なすアイリ。このあたりが、アイリがアインツベルン家の頂点に君臨する所以なのだろう。

「そ・れ・に・く女の子のトークタイムはこれからが本番よ？」

「いや、そもそもママは女の子って歳じゃ——」

クロがそう呟いた瞬間、ゾクリ、と首筋に冷たい金属が突き付けられたような感覚に襲われた。幸か不幸か、魔法少女三人の中ですば抜けて勘の良いクロだからこそ、そのイメージがより繊細なものとなって脳裏に焼き付けられた。

「何か言った？クロちゃん」

「な、なんでもない……」

有無を言わさぬ笑顔を見せるアイリにクロは押し黙り、イリヤも美遊も逆らうのは無意味だと察した。

「そ・れ・じゃ・あく左から順にクラスの誰が好きかな話を——」

「お兄ちゃん」

アイリが台詞を言い切る前に、美遊が即答する。あまりの回答の速さに、とうるかこんなアグレッシブな性格だったかなくという意味でイリヤは呆気にとられていた。

「へ、へえくそうなんだ。でもあれでしょ？ミュの言うお兄ちゃんって、前に行つてた実のお兄——」

「土郎さん」

イリヤの僅かな希望をかけた問いも一刀両断する美遊。一体誰が、誰が美遊をこんな

風にしてしまったんだ!

「大丈夫だよ、イリヤ」

「え? な、何が?」

更なる混乱を極めるイリヤに、美遊が安心させるような声で話しかける。

「私は、愛人には理解がある」

「いや何言ってるの?!」

そして、さも大したことのないことのように、更なる爆弾発言を繰り返した。

「え? だって、義理とはいえ兄妹の結婚は難しいから——」

「待って! ちよつと待って! それだと、まるで私がお兄ちゃんをす、す、す、好きみたい

じゃない!」

「まるで何も…:…ああ、なるほど。これが”ツンデレ”なんだね。流石イリヤ」

「ツンデレ違ーう!!」

イリヤの絶叫が夜の街を木霊する。こうして、美遊の暴走、イリヤのツツコミは士郎

が様子を見に来るまで続くのだった。

因みに、クロは先ほどの殺気のせいで話が耳に入っておらず、アイリは二人の様子を

とても楽しそうな笑顔を浮かべて聞いていたという。

## ひと夏の夢

「えっと……此処は何処だ？」

目の前に見えるのは広大な海。水平線の先は何も見えず、どこまでも青い海洋と青い大空が広がり、穢れを知らぬ純白に染まった雲が気持ちよさそうに漂っている。

えっと、確か俺はイリヤたちとその友達の引率で海に来たんだよな。だったら、この光景は何もおかしなところはない。ないんだが——

「なんで拘束されてるんだ俺……」

地面からまつすぐ上に建てられた一本の棒。それにロープで縛られているのが現在の俺の状況だ。どうしてこうなった。

「……すみません、すみません」

そして、俺の後ろの物陰に隠れている女性が、俺の様子を伺いながら必死に謝っている。

いや、謝るくらいなら助けてほしいんだけど。というか、この女性ひとどこかで——ああ、何だか思い出してきたぞ。

美遊が俺の家に泊まった翌日、俺はイリヤの友達と一成、慎二と合流して海にやってきていた。まあ、俺たち高校生は引率役だけど、そういえばどうして慎二も海に来たがったんだらう。一成に引率の手伝いを頼んだとき、やたらと食いついてきたけど。まあ、いいか。

そして、イリヤの友達の一人が車に吹っ飛ばされながらも無傷だったり、メガネをかけた子に慎二と一成の関係を聞かれたりと色々あったが、今は皆でビーチバレーをして遊んでいる。

「なあなあ、衛宮」

俺と一成がビーチパラソルの下で座っていると、飲み物を買に行っていた慎二がニヤニヤした笑みを浮かべて帰ってきた。

「な、なんだよ慎二。そんな変な顔して」

「これが浮かれずにいられるわけないだろ？海だけ海！やつぱり海と言ったらナンパに決まつてるだろ！」

おまつ、やたらと着いて来たがってたのはそういうことか。隣にいる一成も、全くお前は、と呆れた様に溜め息をついてるし。

「あのな、慎二。俺たちは仮にもイリヤたちの引率で来ているわけだな」

「そんなの一人いれば大丈夫だつて。ほら衛宮、お前も行くうぜ」

そう言つて、やたらといい笑顔で俺の肩を叩きながらサムズアップする慎二。というかお前、さりげなく一成を省いてないか？まあ、確かに本人はそんなの興味なさそうだけど。

「ちよつと待たんか、間桐」

案の定というか、一成の”待った”が入った。

「衛宮の主張の方が正しい。そもそも、そんなに行きたいのなら一人で行けばいいだろう」

あれ？てつきり『ナンパなどけしからん！』とか言つて止めるかと思つたのに。もしかして、慎二の言う通り確かに引率に3人は多いから、不満を垂れ流されるくらいならほつぽり出そうつて魂胆かな。

「えー！いいだろ別にー！ナンパぐらい付き合つてくれたつてー！」

しかし、一成の発言を無視して駄々を捏ねる子供の様に俺に縋りつく慎二。

……なんというか、今日の慎二は妙なテンションだな。

「慎二、今日はどうしたんだ？何か変だぞ」

俺に指摘された途端、慎二はピクツと身体を震わせ、その場で静止してしまった。

「あの一……慎二？」

「当たり前じゃないか！こんなテンションでもないとやってられんわ！」

お、落ち着け慎二！キャラが崩壊してるぞ！

「学校では遠坂とエーデルフェルトのせいでも何か僕がいつも酷い目に合うし！家では最近妹が背筋の凍る笑みを浮かべてるし！もうやだ！僕だつて偶には癒しが欲しいんだあああ！」

それは、漢の魂の叫びだった。

「……はあ、わかったよ。ついて行ってやる」

「衛宮?!」

一成が目を見開いて俺の方を向く。まあ、普段ならナンパなんてやらないから意外だったんだろうけど、あんな切実な心の叫びを聞いてしまったら付き合つてやらないわけにはいかないだろ。それに遠坂、ルヴィア、桜が原因だと言われると、あまり他人事のような気がしないしな。

「本当か?!衛宮ー!お前はやっぱりいい奴だなあ!」

「そんなにくつつくな!その代わり、少しでもだからな!すまん、一成。適当なところで帰ってくるから、後は頼む」

その場を一成に託し、俺は慎二に引つ張られるままナンパへと繰り出すことになってしまった。

それからどうしたかというと、最初は妙なテンションのせいで引かれていた慎二も時間と共に落ち着いていき、案の定と言うべきかあつさりナンパに成功した。その様子を確認した俺は、もう大丈夫だろうと判断して一成の下に戻るべく歩き出していた。

「あ——」

その途中で、浜辺に座る一人の女性が目に入った。ホルターネックタイプの黒ビキニを纏い、やや紫がかつた長い髪が海風に揺れる。すらつと伸びた手足からはモデルのよくな高身長を想起させ、その物静かな様子は眼鏡を掛けていることも相まって知的な印象を与える。

普段なら、綺麗な人だなー、で終わらせるところだけど、俺は何故か彼女に話しかけたい衝動に駆られた。それは、慎二に付き合つてナンパなんて言う慣れないことをした



せいなのか、それとも、彼女の背中がどこか寂しそうに見えたからなのか。  
「あの、今お時間は大丈夫ですか？」

「……完全に自業自得じゃないか」

縛り付けられながら器用に項垂れる。あの後どうなったかと言えば、意外にも話が弾み、色々なことを話してくれた。

リフレッシュも兼ねて海に来たこと、二人の双子(?)の姉のこと、海を見て地元の思い出に浸っていたこと、意地悪な二人の姉のこと、一人で来てみたものの周囲から浮いてしまっていて困っていたこと、安全なところから他人の慌てふためく様を見るのが趣味である姉のこと e t c . . .

その後、急に何か思いつめたような表情をしたと思ったら『少し歩きませんか』と言

われて海岸の端の方へ歩いて行って、そこから記憶がない。

でも、ここ何処なんだ？ さっきまで居た海水浴場はおろか、辺りの植生からしたら下手すれば日本ですらないぞ。

「あら、ステンノ私。久しぶりの人間だわ」

「ええ、エウリユアレ私。暫くぶりの人間ね」

そして、縛り付けられている俺の様子を微笑みと共に観察しているのが、地面にまで届くのではないかというほど長いツインテールをした幼女二人。服装は純白のドレスであるものの、ステンノと呼ばれた少女は左胸に黒い花飾りを身に着け左側にスリットの開いたドレスを着ており、エウリユアレと呼ばれた少女はステンノと飾りやスリットが左右逆のドレスを着ている。というより、二人の顔が瓜二つで、ドレスでないで見分けがつかない。

その髪の色は俺の後ろで未だに謝り続けている女性と同じであること、そして海で散々聞かされた特徴から察するに、あの女性の姉ということになるのだろう。

普通なら逆じゃないかと考えるとところだが、俺の女難センサーがこの仮定を真実だと告げている。こういう時の勘はよく当たる。俺の実体験からの経験則だ。

「なあ、いい加減状況の説明をしてほしいんだが」

「すみません。姉さま達に突然『面白おもしろそうね。それ、連れてきなさい』と脅されました。

「さもないと私が……」

だからって俺を生贄にしなくたって。

とはいえ、何故か余り彼女を責める気にならない。どうしてだろう、どこからともなく独逸の白い小悪魔のせせら笑う声が……うつ頭が！

「心配しなくても、とって食べたりしないわよ」

「女神ですもの、そんな野蛮なこととはしませんわ。少し血を貰うだけ」

俺の様子を見かねた少女二人が、俺を安心させるような口調で語りかける。

いや、それでも十分大事おかしこなんですけど。

「えっと、因みにどれくらいなんだ？」

「ふふ、怖いのかしら？」

「ほんの少しよ。ええ、ほんの0.1タラントタルラントだけ」

「タラント？聞いたことない単位が出てきたな。でも、0.1って言うてたし本当に少し——」

「……おおよそ2.6リットルです」

「死ぬわ！」

後ろの女性がボソツと教えてくれた。

おかしいだろ！ほんの少しでそんなに血液取られたら堪ったもんじゃない！しかし、

この鎖余程頑丈なのか、体を必死に左右に振つてもびくともしない。

……こうなつたら最後の手段だ。

「トレスオン  
投影開始！」

「ツ?!」

「あら?」

俺の魔術回路に魔力が流れる。俺が魔術師だったことがそんなに意外だったのか、後ろの女性、前の少女の順で声上がる。

俺の頭に浮かんだのは一つの宝具。何故それが急に浮かんだのかはわからないけど、なるほど確かにこれなら今の状況に丁度いい。

「鏡像結界の袋！」

真名解放の瞬間、俺の手に現れた皮袋が光を発し辺り一帯を包み込む。そして――

「よし、抜け出せた！」  
光が収まったとき、俺は鎖から逃れていた。

鏡像結界の袋

「内」と「外」の概念を反転させる力を持つ、ペルセウスが冥王ハデスから授かった皮袋だ。

俺は縛っていた鎖を結界と見立て、その内外を反転させることで鎖の内側に居た俺を

外側へと移動反転させた。結構無理やりな使い方だったけど、上手くいってよかった。

「こんな、いとも容易く?!というか、その宝具は!」

「ちよつと、抜け出されてしまったじゃない」

「まったくだわ。きちんと捕まえておけない愚妹は後でお仕置きしましょう」

「ええっ?!」

後ろの女性が不憫な目に合いそうになっているが、そんなのは後回しだ!

俺はとにかくその場を離れるべく、強化した脚で全力で駆け出す。

「でも、私達から逃げられるかしら。ねえ、強い女」

「そうね、遠くエウリユアレに飛ぶ女。私達から逃げられた獲物おもちゃなんて今まで居なかつたわ」

何だか不穏な会話が聞こえてくる……

走りながら振り返ってみると、そこに居たのはエウリユアレの両手を掴みジャイアン

トスイングの様にグルグルと回すステンノの姿だった。

「そおーれっ!」

そして、掛け声とともにステンノが手を放し、振り回されていたエウリユアレが俺の方へ飛んできた——つて、ええええッ?!

「ぐはあッ!」

突発的な事態だったことと、子供サイズとはいえ流石に人一人を受け止めきれはす

もなく、そのまま押し倒される形で地面に倒れこんでしまった。

「それじゃあ、いただきまあす」

うわっ！この娘、意外と力強い！ぎゃー！助けてー！ヘルプミー！

すると、そんな願いが通じたのか、俺の近くに魔法陣のようなものが現れる。

「お兄ちゃん！」

この声は美遊?!魔法少女の恰好してるし、ステッキの力で来たのか?まあ、何でもいい!とりあえず助かった!

「お兄ちゃん、大丈夫——」

すると、美遊が俺の姿を見た途端ピタリと、まるでビデオの一時停止の様に止まった。一体どうしたんだ?

……そういえば、今の俺の恰好って『見た目少女に押し倒されている』様にしか見えないんだよなあ。やばい!何がどういいう風にやばいのか具体的にはわからないけど、とにかくやばい!

まるで浮気現場を見られた夫の如き心境で、恐る恐る美遊の方を見る。

「だれ? その女」

予想外に冷たいッ?!

ハイライトのない、底なしの闇で染まった瞳で俺を見つめる美遊には、もはや恐怖し

か感じない。

「お、落ち着けつて美遊！とりあえず俺の話をだな！」

「私は冷静だよ、お兄ちゃん。だって、こんなにも心が冷たいもの」

「それは冷やしちや駄目えええ！」

すると、上に跨っていたエウリュアレが俺の身体から離れた。チャンス！今はこの状況を何とかしないと、俺の命が危ない気がする！……あれ？これ、さつきと状況変わってない？

しかし、俺は気が付かなかつた。俺の近くに、いつの間にかステンノが来ていたことを。そして、二人してとても悪い笑みを浮かべていたことを。

「と、とにかくこれは誤解で——」

「あら、酷いわ。あんなにも熱く語り合っただのに」

「ええ。あれだけ散々身体に刻み付けておいて、もう他の女に目移りだなんて」

「えつ?!ちよつと何を——」

「は？」

なんか周りの気温が更に1度下がったんだけど！ていうか、なんなんだこの二人?!急にこんな態度をして……！

するとステンノに遅れて、岩の後ろに隠れていた長身の女性が近付いてきた。

「すみません。言い忘れていたのですが、姉さま達は他人の人間関係を引つ掻き回すのに至高の喜びを感じる方ですて」

「控えめに言つて最低だなそれ！」

畜生！なんて娘たちだ！この人が浜辺で話してくれたことは、すべて誇張のない実話だったというのか?!

「ふふ、滑稽だわ。男が盗られて、そんなに荒れ狂つて」

「違うわ、ステッソ私。こんなのだから捨てられたのよ」

ブチッ

あつ、何だか切れちゃいけないものが切れた音がした。

「……サファイア。インストール夢幻召喚」

『え？み、美遊様？あの——』

「イン ス ト ー ル」

『は、はいいいい！』

美遊が一枚のカードを取り出すと、それをサファイアに翳し、抑揚のない声で呪文を唱えた。そして、光は美遊の身体を包み、新たな姿へと変身させた。

手足を守る革製のプロテクターに、黒い腰鎧。胸はサラシで覆われ、その手には美遊の身長を優に超える大剣、いや、剣と言えるのかも怪しい、ただ岩を荒削りしただけの



ような斧剣が握られていた。

「今度は逆上？益々無様だわ」

「ね、姉さま?!これ以上煽るのは!」

「いいわ。相手をしてあげる

—————  
メデューサ  
愚妹が」

「……え?」

ステンノが長身の女性、メデューサさんの方を指さすと、美遊はターゲットをそつちへ定めた。

「■■■■ツ!」

「こ、これは洒落になっていませんよ、姉さま——ひいいツ!本当にこつちに来たあああツ!」

そして美遊が、女の子がしちやいけない顔と奇声を発しながらメデューサさんへと襲い掛かっていった。

……どうしてこうなってしまったんだ。

「中々面白いことになってきたわ」

「そうね、エウリュアレ私。まさか、借り物の力とはいえあの男の子孫を見ることになるなんて」

美遊とメデューサさんが激闘を、とうか暴れまわっている美遊から必死に逃げ回っているメデューサさんの様子を、俺の横で楽しそうに眺める鬼畜双子。なんというか、

自分の妹が慌てふためいている様を見て愉しんでいるあたり、本当にアレだな。

「そこまでよ」

すると、俺の背後から声が聞こえてきた。この声は――

「クロ?!それにイリヤも!」

「やつほー、お兄ちゃん」

そこに居たのは、ステンノとエウリュアレに剣を向けているクロと、美遊の様子を苦笑いしながら眺めているイリヤだった。

「あら、またお邪魔虫?それに、貴方は遊び甲斐が無さそうだね」

「でも、後ろの白い娘は別だけどね」

「えっ?!な、何?」

今度はイリヤに目を付けた双子。おいおい、流石に今度は見過ごせないぞ。

「でも丁度良かった!イリヤ、クロ!美遊を止めてくれ!」

「そ、そうしたいのは山々なんだけど……」

「あれに割って入るのは流石に……ねえ?」

それを聞いて再び視線を美遊に戻すと、身長以上ある斧剣をブンブン振り回しながらメデューサさんを追いかけていた。

……うん。俺もどうにか出来る気がしない。

「心配しなくても大丈夫よ」

「そうですね。もう時間ですもの」

俺達がどうしたものかと立ち尽くしていると、答えを示すように双子が口を開いた。  
時間？何のことだ？

すると突然、目の前の風景が歪み始めた。

「なッ！これは——」

「血を貰い損ねてしまったわね」

「仕方ないわ。所詮は夢、いずれ醒めるものだもの」

あれ……声が、遠く……

「愉しかったわ。気が向いたら、また遊んであげる」

「ええ、気が向いたら」

薄れ行く意識の中で、その女神の微笑と女神の視線だけはしっかりと覚えていた。

「——みや。起きろ、衛宮」

「うおッ！」

一成に声を掛けられて飛び起きる。

あれ？ここは……海水浴場？

「疲れているのか？まったく、そんな調子で引率を引き受けて、もう少し身体を労ったらどうだ？」

「だ、大丈夫だって。陽射しが心地よくて、ついウトウトしちゃっただけだし」

「ふむ、ならばよいが」

俺は頭をポリポリと掻きながら起き上がる。でも、なんか一成の言った通り、なんか疲れてる気がする。

えっと……何か疲れるようなことあったっけ？……駄目だ、思い出せない。

すると、飲み物を買って行った慎二が戻ってきた。

「なんだよ、慎二。そんなニヤニヤして」

「なあなあ衛宮、ナンパ行こうぜ！ナンパ！」

「はあ？」

慎二曰く、学校では遠坂とルヴィアに、家では桜によって胃がキリキリするような思いをしているから、たまにはリフレッシュしたい、ということらしい。

あまりにもキャラ崩壊しながら訴えかけるもんだから、付き合ってやろうかなんて思いはじめていた。

その時、ふと小悪魔のような女神の微笑みが頭を過った。

「いや、俺は遠慮しておくよ。イリヤたちを見てないといけないし」

「なんだよー！一緒に来てくれたっていいじゃん！ケチ！いいもんね！僕一人で行っちゃうから！後で仲間に入れてって言っても駄目だからね！」

「あ、おい！慎二！」

キャラ崩壊、といか最早退行を起こしている慎二は、一人でナンパへと行ってしまった。

「まったく間桐は……まあいい。引率は二人でも十分だ」

「……ああ」

俺は慎二の後ろ姿を何気無く眺めていた。それは、慎二の誘いを断ってしまった罪悪感からなのか。それとも、別の――

ちなみに慎二は、別件で来ていた遠坂とルヴィアの喧嘩に巻き込まれたそうなの。

## 番外編：家政婦（つぼいステッキ）は見た

（ Introduction ）

「……」

ごく普通の高校生や魔法少女が暮らすごく普通の家、衛宮邸。そこには、ごく普通の家政婦<sup>メイド</sup>が働いている。朝には朝食を作り、昼間は部屋の掃除と洗濯、夜には風呂の支度に夕飯を作る。海外出張で普段家を空けているという、普通すぎて最早使い古された設定を持つ家主に代わり、彼女たちは家事を一手に担っている。

なお、主に仕事をしているのは一人だけだと、ここに注記しておこう。

「……」

そして、先程から無言のまま立ち尽くしている彼女こそ、衛宮邸で働いている家政婦の一人、セラである。その理由はというと、なんてことはない。

時は休日の午前七時。セラはいつもの様に洗濯物を洗うべく、洗濯機のある浴室の脱衣所の扉を開けた。ただそれだけだ。

ただしそこに、日課の鍛錬の汗を流し終えた士郎が、今まさにバスタオルで体を拭いているタイミングに鉢合わせたというだけの話である。

「えーつと……セラ？」

「ハッ?! し、失礼しましたッ！」

士郎に声を掛けられたことで我に返ったセラは、それはもうすごい勢いで扉を閉めた。

(な、何故咄嗟に出て行ってしまったのでしょうか?! 別に今更気にすることも——まあ、士郎さんも一応思春期なのでから、そういう相手に考慮するのは当然の配慮な訳でして……。というか、最近ラツキースケベが私の周りで頻発しているような——い、いえ! 別にラツキーというわけではないからしてですね!)

士郎からすれば、幼少の頃から一緒に暮らしてゐるんだから別に気を使わないでいいのに、なんてことを考えていた。しかし、そんなことは露知らず、セラは顔を真っ赤にしながらひたすら慌てふためいている。

故に気が付かなかつた。

『……ほほ〜う』

その現場を、最も目撃してはいけない人物(?) が目撃していたことを。

〈 Introduction End 〉



「はあー…暇ねえ」

「……」

私こと、イリヤスフィール・フオン・アインツベルンは、私の部屋にも拘らず我が物顔でベッドに横たわるクロを尻目に、せっせと夏休みの課題を進めていた。

「海にも行っちゃったし、暫く予定も無いし。夏休みって、こういう空き時間があるところがちよっと難点よね」

「……だったら、クロも宿題すればいいじゃない。言っとくけど、後で見せてあげないんだからね」

「なによーケチー」

まったく、後で泣きついてきても知らないんだから！

クロのだらけきった返事を聞き流し、クロの方へ向けていた意識を再び目の前の問題集へと移す。毎日小まめにやっておかないと、後が大変だもんね。

でもそんなやる気も、突然の襲来物によって打ち砕かれた。

『甘あ〜いッ！甘いですよイリヤさん！角砂糖三個分くらい甘々です！』

この愉快型魔術礼装ルビィによって。

「……今度は何なの？」

『冷たっ！まるで養豚場のブタでもみるかのように冷たい目です！でも、そんなことでルビィちゃんは砕けません！それはもう、ダイヤモンドの様に！』

……ダイヤモンドって確か、ハンマーで叩くとあっさり割れるよね。

『ややっ！何やら物騒なことを考えられているような気がしますが、今は気にしないでおきましょう。今回は何を隠そう、士郎さんのことなのですから！』

「え？お兄ちゃん？」

そのとおりでございます

『Exac-tiv!』

ルビィが羽を器用に動かして人差し指を突き出したようなポーズをとる。前から思ってたけど、その羽って飛ぶために使ってないよね。羽ばたいてるの見たことないし。

「お兄ちゃんがどうしたって言うのよ」

ルビィの言葉に関心を持ったのか、さっきまでだらけてたクロが起き上がった。

『はい！ルビィちゃんは気づいてしまったわけなのですよ。このままでは、イリヤさんルートがディスク容量の都合で実装されない、なんてことになりかねない！』

「言ってることはよくわからないけど、それってお兄ちゃんが盗られちゃうってことで

しよ？当たり前じゃない。お兄ちゃんはイリヤじゃなくなつて私のところに来るんだから」

なつ！ちよつとクロ！それどういう意味?!あ、あと、私はお兄ちゃんとなんて、別に、ゴニヨゴニヨ……

『いえいえ。クロさんも他人ごとではありませんよ。なんせ、強敵ライバルは他に居るのですから』

「強敵？凜とルヴィア……は別に大したことないし、後はミユ？まあ、確かにあの娘は最近色々突き抜けてる気がするけど」

ミユかあ……

この間の海での誕生会のおきも、席を立つ振りしてちやつかりお兄ちゃんの隣に座つたり、雀花たちの前で堂々と『お兄ちゃん』宣言してたし。その上、浜辺でエンカウントした凜さんたちと色々あつた時も『お兄ちゃんは私のもの』とか——あれ？そんなこと言つてたつけ？何だか記憶が曖昧な……

『いえ、確かに近頃の美遊さんの兄魂力ブロンはイリヤさんたちのそれに迫りつつありますが』  
「え、何その力。初めて聞いたんだけど」

『それよりも、目下の敵が判明したのです！それは……』

ルビーの凄む様な口調で、思わず生唾を飲み込む。

そ、それは……？

『それは——セラさんです！』

「ねーイリヤ。宿題どこまで進んだ？」

「ええつと、もうすぐ算数の問題集が終わるところ」

『ちよつ！何事もなかったかのようにスルーしないでください！』

ええー、そんなこと言ってたって……。

「だって、何を言い出すかと思えばセラ？ないない。ねえ、イリヤ？」

「うん。確かに二人で料理してるときは完全に二人の世界に入ってることもあるけど、それ以外はあんまり……」

『かーっ！私は悲しいですよ！お二人とも、自らの置かれた現状を理解していない！』

そんなこと言われても、だってセラだよ？ことあるごとにお兄ちゃんに突っかかっているし、お兄ちゃんが料理当番のときなんか未だに不機嫌そうな目で見てるし。

『出会いが悪い印象から始まる。ボーイミーツガールの定番ですよね？』

「え、何？突然」

確かによくある展開と言えばそうかもだけど……

『二人で行う共同作業、料理のような共通の趣味。パーソナルスペースに入り心理的距離を縮めるにはもってこい』

ま、まあ、言われてみれば。

『そのうえ、ラッキースケベという恋愛モノ特有のハプニングも——』  
「えっ?!何それ聞いてないんだけど!」

『安心してください。ラッキースケベされたのは土郎さんの方なので』

それはそれでどういうことなの?!

何だか雲行きが段々怪しくなってきた気がする。い、いや、気のせいだよね?!それに、それくらいだったら私だって経験が……

『確かに、セラさんの建てている恋愛フラグのひとつひとは小さなものです。でもそれは、共に過ごしてきた長い時間の中でコツコツと積み上げられ、今では既に山となっているのですよ?!』

そ、それは……私だって、一緒に暮らしてたのは同じだし!

『イリヤさんは今まで、土郎さんと同じ屋根の下で暮らしているという地位に甘んじていたのではないですか?』

「うっ……」

ルビーの指摘を受けて、思わず言葉が詰まる。

『士郎さんも高校を卒業すれば、一人暮らしすることもあるでしょう。元来、世話焼きのセラさんはきつと「きちんと生活できているか心配だから」と定期的に様子を見に行くかもしれません。』

初めての上京、日々募る不安、そこにやってくる包容力のある姉のような存在。やがて士郎さんは今まで気付かなかったセラさんの魅力に触れ、二人の距離は次第に縮まり、そして——』

いやあー！止めてえ！それ以上聞きたくないっ！

私は両耳を塞ぎ、その場にしゃがみ込んだ。うう……、何故か今の光景が鮮明に想像できてしまった……

「まったく、見ていられないわね」

「……クロ？」

私がルビーの言葉に打ちのめされていると、クロが呆れたように溜め息をついた。

『おや？クロさんはあまりショックを受けていないようですね』

「当たり前でしょ。今のは所詮ルビーの妄想でしかないわけだし。そういう訳で、行くわよイリヤ」

え？行くって、一体何処に……？

「決まってるじゃない。セラとお兄ちゃんのところよ」

時刻は昼時。

居間の入り口で視線だけを覗かせていると、そこにはキッチンで料理真つ最中のお兄ちゃんが居た。夏休み中ということもあつてか、お昼ご飯の担当もお兄ちゃんとセラの交代になつてゐる。そして、一方のセラはというと、居間から外に出て洗濯物を干しているところだ。

（……妙ね）

（妙、つて何が？別にいつも通り、料理をしてるだけだと思ふけど）

（そつちじゃないわよ。セラよ、セラ）

セラが？

クロの言うとおりのセラの方をじっくり観察していると、言われてみれば確かに、なん

となくだけど動きがぎこちない気がする。それに、心なしか顔がいつもより赤いよう  
な。

『恐らく、先ほどのことをまだ引きずっているのでしょう。甘酸っぱいですねえ』

え?! ルビーの言つてたのつて、ついさっきのことだったの?!

『しかし、士郎さんはまったく気にしていないご様子。いやあ、ここまで意識されてない  
と逆に憐れになってきます』

(そ、それつてつまり、お兄ちゃんにセラのことを特別視してないつてことだよな? それ  
なら安心安心!)

『……イリヤさん。それ、思いつきりブルーメランになってますよ』

ぐはあッ!

止めて! 薄々気づいてた事実を突きつけないで!

「あれ? おかしいな。セラ? ちよつといいか?」

「は、はい?!」

「うわつ! ど、どうしたんだよ、急に大声あげて」

「い、いえ、すみません。ぼーつとしてたもので」

なんだろう。二人の間にピンク色の空間が醸し出されている気がする。

「そ、それでどうしたんですか?」



「ああ。それが、あれ見当たらないんだけど——」

「中華鍋でしたら、スペースを取るの上の戸棚にしまいましたよ」

「そこにあつたのか。サンキュー」

中華鍋。昼間から中華はさすがにちよつと……って、場所確認しただけか。

「おや？」

「はい、ハンガーの追加」

「あら、ありがとうございます」

そういうえば、料理の印象が強かったけど、セラは他の家事もやってるんだよね。私も手伝った方がいいのかなあ。

「そういうえば、あれ何時でしたっけ？」

「特売なら明日の午後6時からだぞ。牛肉のやつ」

特売かあ。それなら、明日は焼き肉がいいなあー。

暫く観察してみたところ、最初こそセラがドギマギしていたものの、それ以降は会話もポツリポツリとあるだけで二人とも自分の作業に集中してる感じだった。

（うーん。ルビーが大げさに言うから警戒しちゃったけど、別に和気あいあいとしてる

わけじゃないし、取り越し苦労みたいだったみたい)

(……)

(クロ?)

クロが何やらジト目でお兄ちゃんのことを見てる。どうしたんだらう。何か変なところでもあつたかな?

すると、料理が終わつたお兄ちゃんが入り口に居る私達に気が付いた。

「あれ?イリヤにクロ?まあ、丁度いいか。ご飯で来たぞ」

「あつ、はい。ほら行くよ、クロ」

私はクロの手を引いて料理の配膳を手伝う。今日の献立は夏の定番の冷やし中華だ。いつもながら、お兄ちゃんの料理はおいしそう。

(何なの、さっきのあれ? ツーカー? 甘酸っぱいとかもうそんなレベル通り越して、既に熟成された感マシマシなだけ! イリヤは全然気づいてる様子ないし、これは生半可な攻勢じゃ効果無さそうね。セラ、恐ろしい子!)

「どうしたの? クロ」

「べつつにー」

「?」

何だかクロがブツブツ言つた気がしたけれど、まあ気にしてもしょうがないか。

結局、今日もルビーに振り回されたただけだったなあ。

因みに翌日、またクロがお兄ちゃんの部屋に薄着で忍び込んでいたのを注記しておく。

八月〇△日 イリヤスフィール・フォン・アインツベルン

## イリヤ・イン・チルドレンズパーク

「わあ、広い！」

イリヤが目をキラキラさせながら辺りを見回している。目の前に広がるのは、観覧車にゴーカート、メリーゴーランドやジェットコースター。そう、俺たちが居るのは遊園地だ。

「ちよつと、いつまではしやいでのよ、イリヤ。遊びに来たわけじゃないんだから」「ぶー、いいじゃんちよつとくらい」

クロに窘められて、イリヤは不機嫌そうにこつちへ戻ってきた。今日ここへ来たのは、俺、イリヤ、クロ、美遊、それに遠坂とルヴィアの6人だ。当然このメンツということは、ただ遊びに来たというわけではなく――

---

---

---

「はあ？遊園地？」

カード回収のための工事の手伝いに行った帰り、ルヴィアがひよんなことを言い出した。

「はい。実は、大師父からこのようなものが届きまして」

そういつて懐から一枚のチケットを取り出した。

「えーつと、なにになに？『魔法のような体験を家族と共に！』？なんだこれ、よくある遊園地のチケットじゃないのか？」

「お兄ちゃん。これ、僅かだけど魔力の反応があるわ」

「なっ?!」

クロの言葉を聞いて驚く。なんだって、こんなただの入場券に魔力が込められてるんだ？

「ついでにこれが、チケットと一緒に送られてきたものよ」

今度は遠坂が、トートバッグから遊園地のパンフレットと思しきものを取り出した。

それには『おめでとうございます！あなたの家族はPlaylandでの昔ながらの家族の楽しみに参加する権利を獲得しました！』という謳い文句から始まり、園内のア

トラクシヨンの紹介などが掛かれてる。

「これも、見た感じは普通のパンフレットと何も変わらないな」

「まあ、そうなのよね。でも、チケットに残留する魔力の痕跡から、最初ははぐれの魔術師による悪質な悪戯ということとで処理されてただけ」

遠坂が何やら意味深な言い回しをする。何かあつたのか？

「これ、一般人に無差別に流されてるみたいなのよね」

「一般人に？それってまずくないか？」

魔術って確か、関係者以外には徹底的に秘匿しなくちゃいけないはずだもんな。

「その上、パンフレットに書かれてる遊園地、実在してるらしいのよ」

「そうなのか？だったら、調査に行けばいいんじゃないや……」

「協会が初めて件の遊園地を発見したのがポーランド。次はフィンランドで1回、ロシアで3回、中国で2回。しかも、出現してひと月ほど経つと消えてしまうみたいなの」

それって、移動してるってことか？しかも、その進路つてもしかして——

「そう。次の出現地は日本ってわけ」

「大した被害は報告されていませんが、放っておくわけにもいかず、そこでステッキを預かってる私達わたくしたちに白羽の矢が立ったというわけですわ」

そういうわけで、遠坂とルヴィアを手伝うべくイリヤたちと一緒に遙々敵地へとやってきたというわけだ。

「でも、この遊園地って世界中を移動してるんだよね。じゃあ、どうしてマスコットが”

ライオン丸くん”なの？」

イリヤがその辺を歩いてる着ぐるみを見ながら不思議そうに呟く。

ライオン丸くんとは文字通りライオンをモチーフにしたキャラなのだが、知名度でいえばせいぜい国内止まり。確かに言われてみればおかしな話だな。その上、着ぐるみを着てる人がやたらと多くないか？遊園地のほとんどが着ぐるみで埋め尽くされてるんだが。

「遊園地のマスコットは毎回変わるらしいわよ。恐らく今回も、日本のキャラクターに合わせたんじゃないかしら」

「へー、そうなんだ。でも、見た目は普通の遊園地と何も変わらないんだね」

イリヤの言うとおり、ライオン丸くんがモチーフとなつてゐる以外は普通の遊園地に見える。これが本当に、魔術によるものなのか？

「はあ……遊園地で仕事など、なんてナンセンスなんでしょう。そういう訳で、シエロ？  
せめて雰囲気だけでも遊園地を楽しみましょうか」

そういうと突然、ルヴィアが俺の腕を抱き寄せる。

なあつ？！、ルヴィアさん？女性特有のあれが俺の腕に当たつてゐるんですがそれは！

「一々それやらないと気が済まんのかアンタはあー！」

「げはあッ！」

すると案の定、遠坂の鉄拳ツッコミが入る。

ふう、助かった。ルヴィアはたまに常識外れの行動をしてくるからなあ。その度にルヴィアのところの執事が目を光らせてくるし。

「ほら、さつさと仕事を片付けるわよ」

「凜さん？一体何処に——」

「こんなところで立ち止まつても埒が明かないでしょう？」

イリヤの言葉にそう返した遠坂は、ルヴィアを引きずりながら、遊園地内に溢れか



えっっている着ぐるみの一体に近づいていく。

「ねえ、ちよつと聞きたいことがあるのだけれど」

『ようこそ！Playlandへ！どういったご用件でしょうか？』

あれ？思ったより社交的だな。魔術師が作ったって言ってたから、こう、もつと偏屈なものとはかり。

「この場所ってなんなのかしら？」

『このPlaylandは貴方達の楽しみに応える場所です！私たちは貴方達の要望にいつもお答えし、皆様にご満足していただくために常に常にベストを尽くします！』  
「ただ、遠坂の直球過ぎる質問に対しては、何処かずれた答えを返す着ぐるみのキャスト。流石にそう簡単には教えてくれないか。」

「ふーん。まあ、簡単に言う訳ないわよね」

『とんでもない！遠坂さん！そんな些細なこと、嘘を言う意味がありません！』

「ツ?!ルヴィア!」

着ぐるみの話を聞いた二人は、体勢を立て直して相手から少し距離を取った。

ど、どうしたんだ急に?!

「こいつ……知りもしないはずの私の名前を言い当てた!」

「ええ。たかが悪戯レベルと舐めてましたわね」

二人は警戒態勢に入りながら、それでもなお着ぐるみを見据える。

俺たちも加勢した方がいいのか？でも、さつきより着ぐるみのキャストが増えたせい  
か、二人のところへ直ぐに行くのは中々骨が折れそうだ。

「……」

「落ち着きなさい、ミユ。まだ戦闘になるって決まったわけじゃないわ」

サファイアを構えて轉身しようとする美遊をクロが手で制する。一方のイリヤは、急に張りつめた空気になったせいであたふたしていた。

『どうしたのですか？遠坂さん！エーデルフェルトさん！城内での危険行為はお止め下さい！』

「やっぱりこいつら、私たちの宝石を攻撃手段だつて認識してるわね」

『……申し訳ありませんが、これ以上は他のお客様のお楽しみを台無しにすることになります。どうかお止めください』

溜め息をついたように着ぐるみが忠告すると、いつの間にか周囲の他の着ぐるみが二人を囲うように立っていた。

「質問に答えなさい。ここは誰が作ったの？」

『……こんな事したくありませんでした』

その言葉を皮切りに、着ぐるみたちが二人に一斉に飛びかかった。

「ツ?! 遠坂! ルヴィア!」

俺も急いでで駆けつけようとするも、目の前に何人もの着ぐるみが立ちはだかり、行く手を塞がれてしまった。

「なっ?! ちよつと! 離しなさいよ!」

「貴方達! レディになんてことを——きやつ! 何処を触っているんですの?!」

すると、二人は着ぐるみ達に担ぎ上げられ、そのまま入園口まで運ばれていく。

「ツ! イリヤ!」

「うん!」

イリヤと美遊は互いにアイコンタクトすると、魔法少女の姿へと轉身する。しかし、俺たちの行動を阻むように着ぐるみが俺たちの周囲を囲んだ。

「なツ——お前ら!」

『彼女たちは他のお客様のご迷惑となりますので退場措置を取らせていただきました』

『誠に恐縮です』

『お客様も同等の行為を行えば、わたしたちも対処せざるを得ません』

『ご承知ください』

「くツ……」

着ぐるみたちは、こちらを見つめる。その着ぐるみゆえの無表情が、奴らの不気味さ

をより際立たせている。

まずいな、俺たちの目的は此処の調査だ。俺たちまで追い出されたら面倒なことになるかもしれない。

「……二人は本当に退場させられただけなんだな？」

『はい！もちろんですとも！』

よく耳を澄ますと、俺たちが入ってきた入口の方から遠坂とルヴィアの怒声が聞こえてくる。どうやら、一応こいつらの言ってることは本当らしい。

すると、俺の携帯に電話がかかってきた。

「もしもし?」

《聞こえる?衛宮君!》

「遠坂!」

電話の主は、さつき着ぐるみに追い出されたばかりの遠坂だった。

「無事なのか?!」

《ええ。本当に追い出されただけだったから。でも、再入場しようにもあいつらが邪魔で入れそうにないわ——ってルヴィア!こんなところで大技出そうとするなあ!》

よかった。とりあえずは無事そうだな。

《つたく……強行突破は最後の手段にしたいし、とりあえず私たちはこの周囲を探索し

つつ、入れそうな場所を見つけてみるわ。中の方の調査、お願いできる?」

「え? あ、ああ、分かった。気をつけるよ?」

《そつちもね。イリヤたちが居るとはいえ、中の方が危険度は高いんだから。それじゃあ》

そこまで言うと、遠坂は電話を切った。

「お兄ちゃん、ルヴィアさんたちはどうだった?」

「ああ、特に問題はないみたいだ。遠坂たちは外周の方を調べることにしたって」

先程の電話の内容を簡単に説明すると、美遊はほつと息を吐く。

いつの間にか、俺たちを取り囲んでいた着ぐるみ達も散り散りになっていた。

「でも、これからどうするの? 話を聞こうとしても、凜さんと同じことになりそうだし」

イリヤの疑問も尤もだ。こうなれば、情報は自分の足で稼ぐしかないか。

『それなら最初は何処へ行きます? ロマンチックなメリーゴーランド、手に汗握るゴーカート、あるいはコーヒーカップでT O K I M E K Iをどこまでもエスカレートさせちゃいますか?』

するといきなり、今まで静かにしていた愉悦型ステッキがしゃしゃり出てきた。俺は、何言ってるんだこいつ、という感情を目一杯乗せた視線をルビーにぶつける。

『ややつ! 土郎さん、そんな情熱的な目をしなくてもちゃんとわかってますよ。観覧車

で気になるあの娘と二人つきりになりたいのでしょうか？大胆ですねえこのこの！」

「なっ！お兄ちゃん、それどういうこと?!」

「お、落ち着けて！ルビーの言葉を真に受けるなよ！」

俺の懐まですずいっと迫ってくるイリヤ。その後ろで静観している美遊も、心なしか目が怖い……

『まあ冗談はこのくらいにして。正直な話、現状はこれが最善手だと思いますよ?』  
どういふことだ?

迫ってくるイリヤを宥めつつ、やや真面目なトーンで話し出したルビーの言葉に耳を傾ける。

『凜さんもルヴィアさんも、周囲の迷惑になるという理由でしよっ引かれました。つまり我々も、おおよそ遊園地に相応しくない行為をすれば、同様の対処をされる危険性があります』

『つまり姉さんは、遊園地で遊ぶフリをしながら調査をした方がいい、そう言いたかったのですね』

『その通りです！いや〜流石サファイアちゃんは話が分かる！』  
なるほどな。確かにそれなら園内を探索しても怪しまれないか。

「そういうことならお兄ちゃん！私、ジェットコースターに乗りたくない。お兄ちゃん

と隣の席で」

ルビーとサファイアの話の聞くや否や、クロが俺の手を握ってジェットコースターの方を指さした。

「あつ！クロずるい！」

「へへーん。こういうのは早い者勝ちよ！」

そして、二人して追いかけてこを始める。まあ、二人ともまだ小学生だもんな。遊園地と聞いたら遊びたくなるのも当然だ。

すると、美遊が二人のことをほーつとした表情で眺めていた。

「どうしたんだ？美遊。何かあったのか？」

「あ、ううん。ただ、遊園地に来たことが今までなかったから、どういうものか想像できなくて」

——ああ、そういうことか。

「大丈夫さ。ほら」

俺は美遊に手を差し出す。

「難しく考えなくていい。ただ、思ったとおりに感じればいいさ」

「……うん！」

美遊は一転して、笑顔を浮かべながら俺の手を取った。

「まあ、今日は遊ぶだけってわけにもいかないけど、もしよければ今度改めて皆で行こうか」

「うん、楽しみにしてる」

そして俺たちは、未だにじゃれ合っている二人と合流すべく歩き出した。

「この最初のガゴガゴするのがいいんだよね」

「正直に言うとうと理解できない。態々位置エネルギーを運動エネルギーに変換するだけのおおおあああああああああ!!」

ジェットコースターが加速すると同時に、美遊が今まで聞いたことのないような声を上げた——

「はんっ！アンタなんか最初からアウト・オブ・眼中なのよ！イリヤ！」

「上等じゃない！コーナー2コでバックミラーから消してやるんだから！」

クロとイリヤが峠を攻めるが如くゴーカートで競い合っていたり——

”筋肉”は信用できない。皮膚が”風”にさらされる時、筋肉はストレスを感じ、微妙



な伸縮を繰りかえす。それは肉体ではコントロールできない動き」

パアンツ

「銃は骨でささえる。骨は地面の確かさを感じ、銃は地面と一体化する。それは信用できる。固定」

パアンツ

「す、すごい！すべての弾がど真ん中に！」

美遊が射的場で、まるでスナイパーの様に的の中央を打ち抜いていたり――

「ふうく遊んだ遊んだ」

クロの満足そうな声を聞きながら、俺たちは道端に設置されていたベンチに腰掛ける。

「でも、こんなに遊んじやってよかったのかな？」

「いいのいいの。これも調査の一環なんだから」

「もう、クロは調子いいことばかり！」

確かに、アトラクションは何処も特別おかしなところもなかったし、これじゃあ本当にただ遊んでるだけだったな。

『それはそうですよ。だって、明らかに怪しいところは避けて通りましたもん』  
は？どういふことだ？

『皆さんが園内を隈無く歩いている間、私とサファイアちゃんで周囲の魔力反応を調べていたんですよ』

『調査の結果、園内の施設ほぼすべてから微弱な魔力反応を検出しました。でもその中で、他に比べて明らかに大きい反応を示している施設がいくつかありました』

『たとえば、そのフードショップ《ハングリーバーガーのキッチン》とか、後は外装がSFチックだった《異次元の扉》とか《レポートマシン》とか』

ああ、そういうえばそんなのもあったな。美遊が初めての遊園地だって言っていたから、比較的メジャーなところをチョイスしてただけなんだけど。

「でもよかつたのか？明らかに怪しいなら、中に入って見た方がいいんじゃない？」

『何言ってるんですか、土郎さん！今回の目的はあくまで調査。そもそも、この依頼は凛さんとルヴィアさんに来たものなんですから、我々が態々危険を冒す必要はありません』

まあ、それもそうか。まだ二人とは逸れたままだし、今回は一度合流して情報交換した方がいいかもな。

「それじゃあ、もうそろそろ此処を出るか」

「そうだね。もう日が暮れてきちゃったし」

うわっ、もうそんな時間だったのか。まさか、この歳で時間を忘れるほど熱中するなんて思わなかった。

休憩を終え、俺たちが入園口まで歩いていると、着ぐるみの一体が話しかけてきた。

『やあ、衛宮さん！楽しんでますか？』

「あ、ああ。暗くなってきたし、これで帰ることにする」

一々相手にしなくてもいいかもしれないけど、無視しても何をされるかわかったものじゃないし、一応最低限の会話をする。

『それは勿体ない！これから君たちの為にナイトパレードを行うんだ！それに新しくアトラクションもオープンするよ！ぜひ見て行ってよ！』

しかし着ぐるみは、俺たちを引きとめようと必死に気を引いてくる。

「いや、俺たちは——ッ?!」

奴の言うことを無視して隣を抜けようと視線を横に移した瞬間、俺たちの周りにいつの間にか着ぐるみ達が集まりだしていた。

『眠る場所だつて心配いらない！君たちの為にベッドルームだつて用意したんだ！』

「……お兄ちゃん」

「ああ」

美遊の声で全員警戒態勢に入る。

まずいな、これじゃあ遠坂とルヴィアの二の舞になっちまう。強行突破するか、それともここは様子を見てこいつらに着いていくか……

〔Der Wind schlagte einer der schwarzen Krankheit. 病の風は黒く黒く吹きつける〕

すると、どこからともなく声が聞こえてきた。

〔Ich habe die Wohltatigkeit nicht an allen. 我に一切の慈悲はない〕

〔Der rasende Fluch ist nicht vermiedener Unfall. 逆巻く呪いは不可避の災害〕

〔Berühren Sie die Dunkelheit durch den verrotteten Körper. 腐朽する己が身で深淵に触れよ〕

〔これは……高速詠唱？〕

壁の向こうから聞こえてくるそれは、壁越しであるにも関わらずはつきりと聞こえた。

〔Sie haben die Entlastung nicht an allen. 汝に一切の救いなく〕

〔Angegangen, Strudel der schwarzen Flamme und Ende umgegeben durch Aurora. 来れたれ黒炎の渦、極光の終焉〕

〔Hören Sie das Echo, das durch ein heftig gezerrißenes Ohr wutend gahnt. 千切れた己が耳で狂乱の残響を聞け〕

までよ？この声ってまさか——

Mein Finger öffnet das Gatter der unteren Welt.  
 【わが指が開くは冥界の門】  
 Nichts ist auf der königlichen Straßenerforderlich.  
 【霸道の上には何物も不要ず】  
 Geben Sie ewige Ruine zu allen in der Ansehtheit!  
 【眼前の悉くに永劫の滅びを!】

「ツ?!皆、伏せろ!」

Verkündigte Ende  
 【終末の死風!!】

俺の言葉とほぼ同時に、遊園地の壁が轟音と共に爆発した。

「な、何?!なんなの?!」

「何って、こんなことする人間は二人しか居ないわよ!」

その場に伏せながらも状況を理解しきれていないイリヤに、この事態を起こしたであろう相手に悪態をつくクロ。

そして、多分それは俺の想像した人物と一致してるだろう。

「どうよ!遠坂流ガント術最終奥義の威力は!」

「まったく、高速詠唱で30秒も掛かつては、とても実践向きとは言えせんわね」

未だ舞う砂埃の中から現れたのは、案の定と言うべきか、遠坂とルヴィアだった。なんとというか、いつでもパワフルだな、あいつらは。

「でも、これで助かった!皆、あの穴から脱出するぞ!」

「う、うん!」

怪我の功名というべきか、とにかくこれで外へ出られる！  
そう思った次の瞬間——

【越えて越えて虹色草原、白黒マス目の王様ゲーム——走って走って鏡の迷宮。みじめなウサギはサヨナラね？】

何処からともなく聞こえてきた少女のような声と共に、辺り一帯が光に包まれる。

「今度はなんなの?!」

目を開けられないほどの光は、たった数秒ほどで収まった。しかし、目を開けてみるとそこには——

「ツ?!壁の穴が!」

まるで、最初から何事もなかったかのように、遠坂の破壊した壁が綺麗にふさがれていた。

「ちよつ!どうなってるのよこれ!」

「これは、完全に閉じ込められましたわね!」

そして、そんな俺たちを取り囲むように、着ぐるみ達がにじり寄ってくる。

「ちいッ!遠坂!ルヴィア!こつちだ!今は逃げるぞ!」

「——ッ！ルヴィア！」

「言われなくとも！」

二人と合流した俺たちは、着ぐるみ達の包囲網の薄い方へと走り出した。

「何なのよ、あの壁！治るなんて聞いてないわよ！」

『こうなれば、この遊園地の原因を探し出して取り除くしか、脱出は難しそうですね』

「サファイア、目星はついていきますの？」

『候補はいくつか。まずは、ここから一番近い場所へ向かいましょう。こちらです』

サファイアの誘導に従い俺たちは、いつまでも立ち止まって此方を見ている着ぐるみ達から、逃げる様に走り出した。

「はあ……はあ……皆、無事？」

「な、なんとかあゝ」

俺たちが逃げ込んだのは屋内系のアトラクション。ここなら、ある程度身を隠せそう

だ。

「……あいつら、追って来なかったわね」

「恐らく、彼らの目的は『私たちを外に出さないこと』です。なので、遊園地の奥に走る分には、彼らは妨害する意味を失うのではないでしょうか」

遠坂と美遊の話を聞いて思考する。

でも、それならどうして遠坂とルヴィアは最初に追い出されたんだ？ 追い出す相手と閉じ込める相手で、何か条件が違うのか？

「それにしても、凜はどうしてあんな真似したのよ。携帯で連絡ぐらいすればよかったじゃない」

「したわよ！ 何度も！ でも、電波が届かないとかなんとかで繋がらなくて。そうしたら中が騒がしくなってきたから、やむを得ず突入しようよ」と

マジか！ まさか電話が繋がらなかったなんて。もしかして最初につながったのは、入り口に近かったからなのか？

「それも小癩にも、外壁には対魔力の結界が張られていましたの」

「持ってきてる宝石も少ないから無駄遣いはしたくない。幸いにもランクはあまり高くなさそうだったから、とっておきのガンドをお見舞いしたってわけ」

「ガンドって……あれが？」



「ガンドって確か、よく遠坂とルヴィアが指から飛ばしてる丸い球みたいなやつだよな。本気出すと、あんな破壊力になるのか……」

「それで、結局此処は何処なのよ？」

「そういうえば、サファイアに連れられるままに駆け込んだから、外装は全然確認しなかった。辺りを見回すと——トランプに紅茶に帽子に縞模様の猫？なんだっけ、どこかで見たことある様な。」

「これって、不思議の国のアリス？」

「ああ、なるほど！トランプ兵とマッドハッター、それにチェシャ猫か！」

『「どうやらここは、その”不思議の国のアリス”をモチーフにしたアトラクションのようですね』」

「しかし、本当にこんなところに遊園地の元凶があるのか？」

「周囲をきよろきよろと見回していると、ふと後ろから誰かの視線を感じた。」

「？」

「だが、振り返ってみても、そこにはトランプ兵の柄が掛かれた壁があるだけ。」

「気のせいかな？疲れてるのかも。そんなことを考えながら再び視線を前に戻すと、そこには背後の壁から飛び出て遠坂に向かって槍を構える別のトランプ兵の姿が——」

「危ないッ！」

俺は咄嗟に遠坂を抱きかかえ、そのまま床に転がる。そして、さつきまで遠坂の頭があつた場所をトランプ兵の槍が通過した。

「え、衛宮君?!」

「敵だ! 壁の絵の奴ら、襲い掛かつてくるぞ!」

「ツ?!」

すると、俺の言葉を聞いて取り繕うのをやめたのか、壁から次々とトランプ兵が飛び出してきた。

「イリヤ!」

「うん! 砲撃!」  
フォイヤ

しかし、イリヤと美遊が素早く轉身し、砲撃でトランプ兵を攻撃する。

「こいつ! 強さは大したこと——ないわねっと!」

クロも双剣を構え、トランプ兵を撃退していく。確かに実力自体は大したこと無さそうだ。俺も、干将莫邪を投影して加勢する。

しかし——

「こいつら! 次から次へと湧いてきてキリねーぞ!」

倒しても倒しても壁から無尽蔵に現れる。その速度は、こつちが敵を倒しきるよりも圧倒的に早い!

そのせいで、あつという間に出入口の扉の前を埋め尽くされてしまった。

「奥に逃げるわよ！最悪、壁をぶち抜けば脱出できるわ！」

遠坂の言葉を合図に、俺たちはトランプ兵の数が少ない建物の奥へと駆け出した。

「もー！次から次へとなんなのよ一体！」

クロが走りながら文句を漏らす。でも確におかしい。

急に襲い掛かってきたのもそうだけど、トランプ兵の動きも変だった。イリヤたちを相手にしている時より、俺が相手にしていた奴の方が心なしに動きが活発だった気もする。これも、何か関係があるのか？

すると、一番前を走っていた美遊の足が止まった。

「？美遊、どうし——」

そこまで言いかけて、言葉が止まった。

部屋の仲がやや薄暗くて見えなかったが美遊の、俺たちの目の前に何か居る。何か、立ちほだかっている。

「■■■■ツ！」

身長が2メートル以上あるのかというほどの赤黒い肌の巨人。背中と顔の両脇に刺々しい翼を広げ、体表には青白い線の模様が浮かび上がっている。

「何よ、これ……パーサーカークラスの化け物じゃない……」

誰かが言葉を零す。

それは圧倒的だった。ただそこに居るだけで相手に死を予感させるその存在感からは、あのバゼットと戦った時とは比べ物にならないほどの恐怖を感じる。

『皆さん。こんな時になんですが、いい報告と悪い報告があります』

互いに睨み合っているこの状況で、ルビーがその静寂を断ち切った。

「……くだらない事だったら承知しないわよ。それで？」

『まずはいい報告から。1ヶ所目にして大当たりです。巨人の肩を見てください』

ルビーの言葉を聞いて視線を向ける。さつきまでは動揺のあまり気が付かなかつたが、奴の肩に誰かが座っているのが見えた。

暗くてよくわからないが、腰までかかるくらいの長い白髪から察するに、女の子か？

『彼女から強い魔力反応を感じます。恐らく、あれがこの遊園地の核ですね』

「つまり、悪い報告っていうのは……」

『お察しの通り、彼女をどうにかするには、まずあの巨人を何とかしなければなりません』

最悪だ！よりによって、あんな奴を無力化しないといけないなんて！

すると、巨人の方に腰掛けている少女が口を開いた。

「やっっちゃえ、ジャバウォック」

「■■■■■■■■■■——ッ！」

少女の声を皮切りに巨人、ジャバウオックがその巨腕を俺たちに向かって振り下ろした。

「くッ！」

俺たちは四方八方に散らばり、何とか回避する。視線を戻してみれば、さつきまで俺たちが居た場所の地面が大きく抉れていた。

くそっ！なんて破壊力だ！

「速射！」  
シユート

空中に足場を作って回避した美遊が、奴の顔面に魔力弾を飛ばす。しかし、奴はそれに一瞥することなく俺の方へ拳を振り上げてきた。

「な——ッ?!」

俺は再び地面を転がりながら躲す。

やつぱりおかしい。攻撃した美遊じゃなくて、明らかに俺を狙っている。すると今度は狙いを変えたのか、俺に背を向け、目も鼻も口もついていない顔をルヴィアの方に向けた。

まずい!……いや、これはチャンスだ!幸いにも奴の動きは鈍足、これなら!

「I a m t h e b o n e o f m y s w o r d .」  
我が骨の子は私の狂剣。

投影するは捻じれた剣。それを、射易い形へと変化させる！

カ  
ラ  
ド  
ボ  
ル  
グ  
II  
「偽・螺旋剣！」

真名解放された宝具が、奴の身体の胸郭を貫いた。

「やった！」

同じく空中に退避していたイリヤが喜びの声を上げる。しかし——

「■■■■！」

「なッ?!」

奴の上半身を大きく抉った傷は、何事もなかったかのように瞬く間に修復された。

あの腕力に加えてこの再生能力?!そんなのありか!そして、再び標的を俺に戻した

ジャバウオツクが、すぐ隣で浮遊しているイリヤを無視して俺の方へ向かってきた。

……なるほど。なんとなく分かってきた。

「イリヤ!美遊!クロ!俺たちが囷をやるから、そのうちに肩の奴を!」

「えっ?!そ、それじゃお兄ちゃんが!」

「問題ない!そもそもこいつは、いや、こいつらは俺たちしか襲わない!」

そこまで言うのと、再びジャバウオツクの拳が俺に迫る。俺は反撃ではなく回避に専念し、無駄な攻撃も行わずにひたすら奴の周りを動き続ける。

「■■■■■■■■■■ッ!」

ちよこまかと動く俺に動きの遅いジャバウオックが追い切れるはずもなく、その場で俺を視線で追いながら右往左往し始めた。

「今だッ！」

俺の言葉を合図に、美遊がジャバウオックの死角に回り、サファイアにクラスカードを翳した。

「限定展開！」

出現したのは歪んだ短剣。すべての契約魔術を破棄させる、裏切りの魔女の宝具――

「破戒すべき全ての符！」

ジャバウオックの肩に乗る少女は、美遊の攻撃に抵抗することなく、そのまま胸を短剣で突かれた。



周囲の施設が光の粒子となって崩れ始める。ライオン丸くんの着ぐるみも、アトラクションも、トランプ兵も、ジャバウオックも、すべてが光となって消えてゆく。その中で、巨人の方に乗っていた少女だけが、俺たちの前に立っていた。

「貴女は、一体……?」

イリヤが尋ねる。無理もない。何故ならその少女の姿は、イリヤと瓜二つだったのだから。

すると、イリヤにそっくりの少女は微笑みながら口を開いた。

「あたしはイリヤあたしの見てるゆめ。かがみの中のイリヤあたし。いつもあたしはだれかのゆめ。

さよならイリヤあたし、あたしと遊んでくれて、ありがとう」

そう言うと、少女は光に包まれ、そして消えて行く。

気が付けばもうそこには何もなく、ただ何も無い草原が広がっていた。

「結局、なんだったのかしらね」

何とも言えない感情が心の中を埋め尽くす。

その時、ふとさつきまで少女が居た場所に目を向けると、そこに何かが落ちているのを見つけた。

「なんだこれ? 何々…… 『Nursery Rhymes』?」



俺が拾い上げたのは1冊の本だった。中は……白紙だ。何も書かれてない。

「どうやら礼装の類みたいだね。魔力が籠ってる」

「それにしても、『ナーサリー・ライム』だなんておかしなタイトルですわね」

「え？ どういうこと？」

ルヴィアの言葉にイリヤが疑問を投げかける。

「ナーサリー・ライムは絵本のジャンルのこと。言うなればこれは、本のタイトルに『S F』や『ミステリー』と書いてあるようなものですわ」

『Nursery Rhymes』、わらべ歌、子供たちの夢。

この白紙の本には、何が描かれていたのだろうか。いや、きっとこの白い頁は、見たものの夢を写す鏡なのかもしれない。

——こんにちはすてきなあなた。夢見るように出会いますか？——

## 番外編：シスターカレン

「悪いな、桜。買い物に付き合ってもらって」

「い、いえー！いいんです！私も見たいものがあつたので」

とある日の夕方、食料や日用雑貨品の買い出しに出ていた俺は、その途中で偶然桜に出会つた。話を聞いてみると、桜も目的地は同じデパートだったらしく、途中まで一緒に付き合つてくれることになつたというのが今の状況だ。

(こ、これは絶好のチャンス!?!いつも先輩に引つ付いている遠坂先輩も金髪の人も居ないし。風……なんだろう吹いてきてる確実に、着実に、私のほうに——)

「あら、奇遇ね」

「え?——あ、貴女は……ッ!?!」

桜が隣で何やら百面相をしていると、前方から歩いてきた、黒い修道服を身に纏つた銀髪の女性に話しかけられた。

ん?どこかで見つたことがある様な気がするんだけど、誰だっけ?桜は見覚えがあるみたいだけど……

「何?まさか私が誰だか分からないの?あの汗と湿気で空気が籠つた昼間の保健室で、

貴方の剥き出しの身体にそつと手で触れたあの日のことを忘れてしまったなんて……」

「せ、先輩!?まさか、あの後カレン先生と!」

「ち、違う!そんなこと——つてカレン先生?」

桜の言葉を聞き、目の前の修道女をよく見る。あの日のせいでポニーテールと白衣の印象が強かったけど、よくよく見ればカレン先生じゃないか!

何故分からなかったんだ……いや、もしかしたら思い出しただけなのかもしれない。あの日以来、保健室には滅多に近づいてないし。

「えっと、それで、カレン先生はこんなところで何を?それも、そんな恰好で」

「私のことを尋ねる前に、まずはわたしに謝る方が先なのではないかしら?」

むっ、確かにそうだ。いくら相手が相手とはいえ、顔を思い出せなかったのは失礼—

「ほら、言ってみなさいな。『私は肌を晒した女性を忘却の彼方に捨て置き、別の女とイチャイチャしました』と」

「あんた本当にこんなところで何言ってるんだ!」

言うまでもないがここは公道。勿論周囲には他の人もいるわけで……あつ、ほら!言わんこつちやない!あつちこつちから『不倫』だの『浮気』だの『二股』だの聞こえてきた!

「それで、私の用事でしたっけ？」

そして、そんな俺のことなど知ったこつちやないとばかりに、カレン先生は話を続けた。

……あんだ、こんな空気にしておいてよく悪びれもせずにいられるな。

「はあ……まあ、いいや。それで、カレン先生はなんでこんなところに？それも、そんなコスプレまでして」

「コスプレとは失礼な。むしろ、こちらが本職です」

本職、修道服ってことは要するにシスターだよな。ということは、つまり——

「え……っ？？修道女？カレン先生が？」

「何かしら、その目は」

いや、公務員が副業でできるの？とか、むしろカレン先生は他人の心を癒すより闘う方が得意なのでは？とか、色々あるけど。

「まあ、いいでしょう。今日は仕事です。シスターには盆も正月もないので」

「言いたいことは伝わるけど、シスターがその喻を使うのはどうなんだ？」

「それは貴方が気にすることではありません。それで、こちらの方から発情した雌の匂いがしたのだけ……」

そういつて、カレン先生は視線を俺の少し横にずらす。すると、さつきからやけに静

かだった桜の身体がビクツと震えた。

「おや。おやおやおや。そこに居るのは、何処とは言わないけれど濡らしながら、厭らしく尻尾を振ってセンパイに駆け寄っていた間桐さんじゃない」

「なツ！違、あれは——」

「え、何その目。公共施設であろうと構わず盛る雌が私に逆らうの？」

「あ、えつと——」

「ほるかみぜーりあ」

「~~~~ツ!!」

桜の慌てふためく様を見て、頬を高揚させたカレン先生が益々ヒートアップし始めた。さ、流石にこれ以上は見逃せん！

「ちよつと、言い過ぎですよ！カレン先生！桜は先生が言うようなそんな下心で看病してくれたんじゃないんですから！」

「ぐはあツ！」

「え？ちよ、桜?！」

カレン先生から桜を庇おうとしたら、何故か桜がその場で膝をついてしまった。

「愛しの先輩から守ってもらって、どんな気持ちですか？」

「ううー…、うわあーん！」

「さ、桜あつ！何処行くんだあー!?」

カレン先生の言葉攻めに耐えきれなくなったのか、桜は全速力で走り去ってしまった。

「この間と同じ捨て台詞なんて、芸がないわね」

そしてこの言いぐさである。苛めるだけ苛めておいて、最後の感想がそれかよ。

「あら、とどめを刺したのは貴方なんだけど、まあいいわ。それじゃ、付き合いなさい」  
ナチュラルルに思考を読むな……って、え？

「付き合うって、何に？」

「決まってるわ。異教徒の摘発よ」

---

---

「……つまり、カレン先生の所属している教会がこの辺りを仕切っていて、その教会に無

許可で活動をしている人が居る、と」

「まあ、そんなところね。摘発とは言ったけれど、結局はただの注意喚起。近頃は、挨拶も碌にできない人が多くて困るわ」

カレン先生が溜め息をつく。いや、挨拶よりも余程問題のある人が目の前に居ますけどね。そもそも、挨拶とか摘発とか、思想・良心の自由はどうなってんだと思うけど、そのあたりの話は藪蛇になりたくないのでもやめておこう。

それよりも……

「先生、ひとつ聞きたいことがあるんですけど」

「何かしら？」

「その……時折襟元から見える紐は何なのかな？とつい思いました」

カレン先生の横を歩いていると、身長差でやや覗き込む形になるせいか、襟の内側にロープが見えるのだ。そしてそれは、気のせいではなければ首元を縛つてるように見える。

カレン先生のことだ。変な理由な気がしてならない

「ああ、これは一種の枷よ」

「枷？」

「自らに枷を掛けることで、日々の生活の中に精神修行を取り入れてるの」

あれ？どうやらまともそうだな。

「そうね、貴方に分かりやすく言い換えるなら……縛りプレイかしら」

「いや、それはちよつと違うんじゃないや」

「違わないわよ。ほら」

カレン先生が修道服の中を見せる様に襟元を指で伸ばす。すると、中に着ている服の上から、先生の身体を縛るように紐が六角形に結ばれ——ん？

「つて、拘束<sup>しほり</sup>プレイってそういうことかよ！少し感心して損したわ！」

「逆に何だと思ったの」

この人……完全に開き直ってやがる……っ！

「あのー……ちよつとすみません」

俺たちが騒いでいると、向こうから警官がやってきた。なんだ？何か事件でもあったのか？

「何？私はこう見えて忙しいのだけけれど」

「先ほど住民の方から、此方に『子供の教育のよろしくないようなことをしている人が居る』と苦情がありました。申し訳ございませんが少々お話を聞きしてもよろしいでしょうか？」

俺が先生に視線を向けると、先生はそれを避ける様に視線を逸らした。一応、変なこ



としての自覚はあったんだな。

「人違いではないですか？ 私はこの通り敬虔なシスターで——」

「その人物の特徴は、黒い修道服を着た銀髪のシスターと伺っているのですが」

「……」

完全に一致してるじゃないか。しかし、警察にしょつ引かれるのは流石に可哀想だな。ここは助け舟を出すべきか……

「ところで、君はそのシスターの知り合いかな？ よければ君も署に——」

「イエ、私ハ道ヲ尋ネラレタダケノ一般人デス」

「なッ!? この男、いけしやあしやあと………はあ………つはあ………つ」

俺は我が身可愛さにノータイムでカレン先生を見捨てた。いや、だって、明らかに先生の自業自得だし、こんなことで警察までお世話になりたくない。

だけど、何故先生は俺に見捨てられて息を荒くしてるんだよ。

そして、あれよあれよという間に先生は警察の人に連れて行かれてしまった。

……買い物行こう。

「はあく、ようやく終わった」

買い物を通り終えた俺は、デパートを後にし、自宅への帰路についていた。

そういうば、カレン先生はどうなったんだろうか。多分注意されるだけなんだろうけど、むしろ連れて行かれた先で変なことをしてないか心配だ。

「きやつー！」

「ん？——おわつとー！」

そんなことを考えていたせいか、俺は曲がり角を歩いてきた人とぶつかってしまった。咄嗟に相手の手を掴んで転ばない様に受け止めることはできたものの、手に持っていた買い物袋の中身が辺りに散開してしまった。

「つと、大丈夫ですか？すみません、ぼーっとしていて」

「いえ、私も前方不注意でしたので。それで、ええつと、もう腕を放していただいても大丈夫ですよ？」

「え？……わあつーご、ごめんなさい」

受け止めるときにうっかり相手を抱き締める状態になっていた俺は、相手に指摘されて直ぐに腕の力を緩め、彼女を解放した。

俺の懐から離れて立ち上がった女性は、穏やかな眼差しと清楚な佇まいが特徴の、二十代後半ぐらいの尼僧だった。ただ、カレン先生の修道服のようなゆつたりと空間に余裕のある服装とは対照的に、ボディラインを強調するような黒の僧衣を身に纏っているが。

「あら、袋の中身が散らかってしまってますね。お手伝いします」

「い、いえ、大丈夫です。俺が片付けますから」

「他人からの好意はありがたく受け取っておくものですよ？」

「は、はあ……」

彼女の窘めるような言葉に丸め込まれてしまった俺は、結局彼女に手伝ってもらった。なんとというか、言葉の節々から母性を感じさせる人だな。ウチの母親とは大違いだ。普段のあの人はどちらかというところ、大きな子供みたいだからな。

「はい、これで全部です」

「態々すみません。こちらからぶつかっておいて」

「気になさらないでください」

しかしなあ、こんないい人に一方的に迷惑をかけっぱなしって言うのも……

「どうしても気になさるのでしたら、ひとつお願いしてもよろしいかしら」

「え？あつ、どうぞどうぞ！遠慮なく！」

すると、俺の意思を汲み取ったのか、はたまた偶然か、彼女は俺にお願いをしてきた。

「はい。実は私、お恥ずかしながら道に迷ってしまいました」

「それなら案内しますよ。俺、この辺りに住んでるので土地勘はありますし」

「それはありがたいですわ。それでは、お願いしましょう。実は、ここなのですが——」

「まあ、妹さんが三人いらつしやるのですか」

「はい。正確には、一人は妹の友達なんですけどね」

案内している道中、彼女と世間話に花が咲いていた。どうやら彼女はとある神社？の尼僧で、仕事のついでに布教活動をしようとしてここに立ち寄つたらしい。その仕事というのも、どうやらカウンセリングらしく、信心深い人には特に好評と言っていた。

「しかし、まさか姉妹丼だけでなく他人丼まで頂いている方とお会いするなんて、世界は広いですわ」

あれれー？おかしいなー。俺はイリヤたちの話をしてたのに、急に食べ物の話になつたぞー。

……服装を見たときから薄々感じてたけど、この人もしかして変態カレン先生編なのか？い、いや、ただのムツツリなだけかもしれない！

「つとと、着きましたよ」

「何から何まで、ありがとうございます」

「いえ、これもお互い様ですし」

彼女の持っていた地図を元に辿り着いたのは、公園の近くにある広場だった。休みの日の為か、そこそこに人が賑わっている。

すると、彼女は急に両手で俺の手を包むように握ってきた。

「ここで会ったのも何かの縁ですし。よければ、少しお話いたしませんか？」

「え？ええつと……」

こ、これって、テレビとかでよくある勧誘の手口なのか？こ、こういう時はどうやって断れば！

俺があたふたしていると、その様子を見た彼女は軽く笑みを零した。

「心配していただかなくとも、ただお話しするだけですわ」

そう言つて彼女は、俺の頬に右手をそつと添えた。

「貴方のような方に初めて会つたものだから、興味が湧いたの」

その瞳からは、理性の光の奥底から一点のムラもない黒が映り、その眼は、目の前の俺を見つめていながら何処か別のナニカを見ているようでもあった。

俺は、その純粹なまでに黒く染まつた深淵を覗き込もうと——

「何をやってゐるのかしら？ その駄犬は」

「へあッ!」

急に声を掛けられて、慌てて辺りを見回すと、広場の方からカレン先生が歩いてきた。

「せ、先生! どうしてここに!?! というか、警察の方は?」

「そんなの、私の有り難いお話を聞いて悔い改めてもらったわ」

い、いったい何をやらかしたんだ……

「それで、何故ここに居るのかと問われれば、異教徒の摘発と言つたでしょう」

先生は俺の隣に立っていた尼さんを見て、吐き捨てる様に呟いた。な、何だかまずい気がする!

「ちよ、ちよつと先生! あまり手荒な真似は——」

「誰にでもホイホイついていくような駄犬は黙つてなさい」

「あべしっ！」

彼女と先生の間に入って仲裁の準備をしようとしたら、その先生に容赦なく蹴られて、そのまま地面を転がった。

痛たたた、何もそこまでしなくとも……

「あらあら、ずいぶんとお厳しいこと。そんなことでは愛想を尽かされてしまいますよ？」

「貴女には関係のない話です。そもそも、アレが簡単に他人を切り捨てられるわけないでしょう」

「うふふ。ええ、あのような方は初めて見ました。もつと近くで観察みしていたいものです」  
「残念だけど、貴女の出る幕はもうないわね。今度は教会うえに話を通しなさい。もつとも、許可なんて下りないでしょうけど」

「ええ、そうさせていただけますわ。聖堂教会のシスターさん」

話してる内容はよく聞こえなかったが、俺が地面に伏している間に決着がついたようだ。とりあえず、穏便に済んだようによかった。

「それでは士郎さん。私はこれで失礼させていただきます。またお会いできる日を楽しみにしていますわ」

「え？あ、はい。お元気で」

彼女は一礼すると、そのまま広場を後にしてこの場を去って行った。なんとというか、独特な雰囲気の人だったな。

「あつ、そういえば、名前聞いてなかった」

「忘れなさい。名とは存在を結び付ける楔。あんな女、気にすることはないわ」

「は、はあ……」

なんだか、先生にしては棘のある言葉だったな。いや、いつも言葉に棘はあるけど、なんとというか、普段は相手を罵るように罵るのに、今の言葉からは只々棘しか感じなかった。

まあ、いいか。大方、別の宗派の人だから気が合わないだけかもしれないし。

「何をしているの？ さっさと行くわよ」

「は？ 行くって、何処に？」

「決まってるでしょ？ 異教徒の摘発よ。あれで終わりなわけじゃないでしょう」

「ええ……」

当然俺に拒否できるわけもなく、そのままズルズルとカレン先生の仕事に付き合わせられる羽目になったのだった。



報告書

20 ■■年■■月■■日

本日、冬木市にて

彼女がカウンセリングの仕事で新都  
に立ち寄っております

彼女が担当した患者

の■■%が自殺した件との関係性は、現時点  
では不明

個人的見解を言わせ

てもらえば、あれは世間一般で言われている聖人君子ではない。そう見えるだけで、その真意は（訂正されているため閲覧不可）以上で『殺生院キアラ』の報告を終了する。本日も”異常なし”

カレン・オルテンシア

## シロウ・ジョーンズ～『魔法の宝石』を追え～

「わあ～すごーい！見てみてミュ！見渡す限り海だよ、海！」

「今どの辺？まだ着かないの？」

「まだ、出発したばかりなんだけど」

窓の外を眺めて目を輝かせているイリヤと、目的地に到着するのが我慢できない様子のクロに、二人を窘める美遊。そう、俺たちは今、小型の飛行機に乗って南の島に向かっている。

「大空の旅は楽しんでいただけてるかしら？」

「快適よく快適～」

「さ、流石はルヴィアさん。まさか、こんな自家用ジェットを持ち出してくるなんて」

何を隠そう、というかこんなことができるのは限られているが、俺達を今回のバカンスに誘ってくれたのはルヴィアだ。彼女の提案で、とある島に1泊2日の小旅行（お嬢様基準）に行くことになった。

だが、何故こんなタイミングで行くことにしたんだろう。

「あら？飲み物がまだ来てませんわね。給仕係！何をしているのかしら、早く用意いた

しなさい！」

ルヴィアが手を2回叩くと、奥から長い黒髪をツーサイドアップにまとめたやや釣り目気味のメイドが、むすつとした表情で給仕用のカートを押しながらやってきた。

「あらあらあらあら、嫌ですわ！メイドともあるう者がそんな無愛想な顔をして。ほら、私に仕えることに最大限の榮譽と喜びを感じ、心の底から溢れ出る笑顔を見せてみなさいな」

「……………こう、です、かあッ?」

ルヴィアの煽り文句に引き攣った笑顔と心の底から溢れ出る殺気で応待する、やたらと赤が似合いそうなメイド。とまあ、暈すまでもなくこのメイドは遠坂その人なわけだが。

今まで度々出てきたが、何故遠坂が宿敵であるルヴィアの家でメイドをやっているのかというと、宝石魔術の使い過ぎで財政難に陥ったところを上手いことルヴィアに騙されたらしい。ルヴィアの目的は遠坂を用人人として扱き使うことのようなので、給料は出ているものの日々精神的ストレスに悩まされているとは本人の談。

まあ、俺から言わせれば、遠坂もルヴィアにちよくちよく反撃しているらしいので、お互い様な気がする。

「うう……………見ないで衛宮君。そんな同情的な目で……………」

俺が回想しながら遠坂を見ていると、遠坂は憐れんでいると勘違いしたようで、顔を両手で覆い隠しながら俯いてしまった。

「そ、そんな悲観することないって！それに、不躰かもしれないけど、遠坂のメイド姿は似合ってるし自信を持っていいぞ」

「……本当？」

「ああ！昨今の日本に広まっているミニスカタイプではなく、伝統にして王道のヴィクトリア様式のメイド服。安易にジャパニズムに染まらないその姿勢は実にグッドだ」

俺がサムズアップすると、遠坂は頬を若干染めながら、照れくさそうに視線をそらした。

（なんか、メイドについて語ってるお兄ちゃん、やたらとテンション高くない？）

『恐らく、あれは俗にいう“フェチ”と呼ばれるものではないでしょうか？』

（……特に意味はないけど、今度イリヤの家に遊びに行くときは、メイド服仕事着を着て行くね。特に意味はないけど）

（止めて！私の言えた義理じゃないけど！）

『イリヤさん、前にメイド姿の美遊さんを見て暴走してましたしねえ』

イリヤたちの方を見ると、三人（+α）で仲良く話しているようだ。

「くっ！私わたしとしたことが！この溢れ出るお金持ちオーラのせいでメイド服を着れず、遠

坂凜に遅れを取るなんて！」

「ほう……つまり、何？私は庶民顔だとも言いたいのかしら？」

その一方では、ルヴィアと遠坂がいつものように火花を散らしている。ああ、もはや見慣れた光景だ。

なにせよ、皆思い思いに楽しんでるようでよかった。

まあ、これで何事もなく終わっていれば苦勞がないわけで。

「うわあ、綺麗な海！」

「ホントねー」

目の前に見渡す限り一面の海に、白々と広がる砂浜。それを前にして、イリヤとクロが遠い目で見つめている。

「よーし！時間も勿体ないし、早く水着に着替えちゃおう！クロ！向こうまで競争しよー！」

「ふっふーん。私に勝てると思ってるの？その伸びた鼻、へし折ってあげるわー」

こんな和気藹々な様子を見てると微笑ましくなるな。

——砂浜の上にいる飛行機の胴体に穴が開いていなければ。

「イリヤ、現実逃避はそれくらいに……」

「な、何のことかなミュ？私は、飛行機が胴体着陸してるとこなんて全然見えないから！」

「そうそう！着陸する前に変な音が機内に響き渡った気がしたけど、気のせい気のせい！」

イリヤとクロが、あまりの出来事に現実から目を背けている。

そうだよな。ただの不時着ならともかく、その原因が遠坂とルヴィアの二人だって言うんだから目も当てられない。

まさか、あの二人の喧嘩のせいで、そのまま不時着することになるなんて。

「ふう、ようやく終わった——って、4人とも、こんなところで何騒いでるのよ」

2人が乾いた笑いを浮かべていると、向こうから探索を終えたと思われる遠坂がやってきた。

「……何騒いでるのよ、じゃないよ!どうするのこれ!?旅行と聞いて期待して来てみたら数時間足らずで遭難とか、意味わかんないんですけど!」

すると、さつきまで必死に現実逃避していたイリヤの不満が一気に爆発した。

「し、しようがないじゃない!ルヴィアの奴が、飛行機ぶち抜くようなガンドを打つんだから、避けるしかないでしょ!」

「……なんで、ガンドを打ち合うことが前提みたいに言ってるの?」

「す、すまん、イリヤ。俺も、あまりにも学校でよく見る光景だったから、つい止めるのが遅れて……」

「学校でもこうなの!」

「大丈夫、お兄ちゃんは悪くないから」

場の空気を感じ取って、流石にバツの悪そうな顔をする遠坂。

あつ、そういえば、一つ聞きたいことがあったんだ。

「なあ、遠坂。今回の旅行の目的って、結局何なんだ?この間海で会ったときは、カード回収のための工事だったんだろ?」

イリヤの付き添い兼保護者役として海に行ったとき、浜辺で工事をしていた遠坂たち



と偶然出会ったのだが、曰く地下深くに眠るカードの場所まで穴を掘っていたのと。

工事が終わらないとカード回収に取り掛かれないとはいえ、二人が今の時期に何の目的もなく、短期間とはいえ遠出するようなことがあるだろうか。

「……特に隠しておくことでもないし、別にいいか」

そう言うのと、遠坂は懐から一枚の紙を取り出した。

「これは……地図？」

「そう。遠坂家が今まで管理してきた遺産、それが隠された地図よ」

「へえ、なんだか宝の地図みたい」

『随分と胡散臭そうですね』

「うっさい！これでも代々引き継がれてきた由緒あるものなんだからね！」

クロとルビーが俺の肩から地図を覗き込み、好き放題言っている。

まあ、ルビーの言うこともわからんでもない。今時、宝の地図と言われてもなあ。まあ、遠坂のことだからちゃんとした代物なんだろうけど。

「ほら、工事も順調でカード回収ももうすぐじゃない？今のままじゃ戦力も心許ないから、ここらで戦力増強しようと思ってるね」

なるほど、確かに筋は通ってる。

「じゃあ何？結局私たちは、その手伝いに呼ばれたってわけ？うわ〜テンション下がる」

「流石にそんな騙すような真似は致しませんわ」

クロの言葉が聞こえたのか、今度は遠坂と反対方向を探索していたルヴィアが帰ってきた。

「どういうことだ？今の話を聞く限り、少なくとも遠坂の目的はその地図みただけど。」

「私は単に、無料で飛行機を貸すのが癪でしたので、遠坂凜が遺産の発掘に四苦八苦しているところをシエロたちと共に浜辺で傍観しようと思っただけですもの」

「最低だ！この人、最低な発想だよ！」

『お二方の喧嘩に他人を巻き込まないで欲しいのですが』

まったくもって、その通りだ。

だが、今は文句を言ってる場合じゃない。とにかく、助けを呼ぶなり何なりしてここから脱出しないと。

「それで、そっちはどうだった？」

「貴女の目測通りでしたわ」

「成程ね。じゃあ、多分今起きてる問題も……」

「何か分かったんですか？」

二人が情報交換しているところを美遊が訪ねる。何かしら、脱出の手掛かりが分かればいいんだが……

「ええ。とりあえず、幸か不幸か、ここが目的地だったってことがね」

目的地、つて此処が遠坂の遺産がある島ってことか？ そいつはまあ……現在位置が分かっただけよかつたと思うべきだな。

「今いる場所が分かるなら、助けを呼べば！」

「残念だけど、そうはいかないみたいなのよ」

「このあたり一帯、恐らくこの島全域に結界が張られていますの。そのせいで、外部との通信はすべて遮断されていますわ」

何だつて!? た、確かに、この島が遠坂家魔術師のものなら、外敵用の結界が張ってあってもおかしくない。

それじゃあ一体どうすれば……

「ここが件の島つてことは、この結界も遠坂の人間が張ったはず。それなら、結界の起点を見つければ解除できるはずよ」

「最悪、起点を破壊すればいいですし」

ああ、成程。詰まる所、当面の目的は結界の起点探しになるわけか。

「でも、起点っていつてもどうやって探すんだ？この島結構広いぞ？」

「まあ、これだけの規模だから、セオリー通りに考えれば島の中心部ね」

そう言つて、遠坂は再び地図を皆に見せる。するとそこには、地図に描かれている島のちようど真ん中に×印が書かれていた。

「凜さん。この“ぼつてん”は何なの？」

「遠坂家の遺産の在処よ。ここに行けば、たとえ結界の起点はなくともそれに付随する資料はあるはず」

えーつとそれはつまり――

「そういうわけだから皆、遺産探しに出発よ！」

「えー！結局手伝わされるのー!？」

……なんだか、体よく利用されている気がしてならない。

今回の一件は偶発的……なものだろうけど、すべて遠坂の手の上で踊らされていたと言われても納得してしまうような展開だ。

クロジやないが、これから起こるであろうことを想像すると溜息しか出ない。

「まったく……オーギュスト！」

「(ちらに)」

「うわッ!？」

ルヴィアが指を鳴らした直後、背後から突然老執事が現れた。

びつくりしたー…もしかして、この人が飛行機を操縦してたのか？機内では見かけなかったけど。

「貴方は飛行機の傍で退路を確保しつつ、救難信号を送り続けなさい。わたくし 私たちは結界の解除に向かいます」

「御意」

オーギュストさんがルヴィアに一礼して、こちらの方へ歩いてきた。

どうしたんだ？飛行機は逆方向のはずだけど——

「土郎殿。くれぐれも、お嬢様の身に怪我が無きよう、よろしくお願い致しますぞ」

「は、はいー！」

それだけ言って、オーギュストさんは飛行機の方へ歩いて行った。

……あの威圧感、逆らったらタダじゃ済まなそうだ。

「ちよつと衛宮君ー！何やってるの？さっさと行くわよ！」

「あ、ああー！」

この先の出来事に一抹の不安を覚えながらも、俺は遠坂たちの後を追った。

「ハハハね」

意気込んで歩き始めたはいいものの、特に何が起こるわけでもなく、あつさりと目的地へと続く洞窟の入口へとやってきた。

「なんか拍子抜けね。何にも起こんなかったし」

「こらそこ、油断しない。むしろ、ここからが本番なんだから」

確かに、何かしらの罠を仕掛けるなら、こういった狭い空間の方が有効だ。中は暗いし、一層気を引き締めないと。

「さあ、行くわよ！」

懐中電灯を持つ遠坂を先頭に、俺たちは先の見えない洞窟へと入っていった。

「随分と大きな洞窟ね」

「今のところ、特に変わった様子はないけど……」

クロとイリヤが辺りをキョロキョロと見まわす。確かに、光が届かない以外は至って普通の洞窟だ。この先に、お宝か何かがあるようには到底思えないが。

「気をつけなさいよ。仮にも此処は魔術師の罠なんだから、罠の一つや二つあるに決

まってるわ。皆、足元には気を付け——」

遠坂が注意を促そうとしたその瞬間、遠坂の足元からポチツと変な音がした。

「ん？何か踏んだような——あべしッ！」

そして、遠坂の頭上から金盥かなだらいが落ちてきた。突然のことに反応出来なかった遠坂は、その脳天に見事直撃し、そのまま地面に倒れてしまった。

「だ、大丈夫か!?遠坂!」

「うっわー…、綺麗に入ったわね」

倒れる遠坂の姿を見て、クロが感心したように呟く。

な、なんだって急にタライが？

「……お兄ちゃん。これ、錆びないように魔術が施されてる」

「マジか!？」

『なんという才能の無駄遣い。ルビーちゃん、そういうの嫌いじゃないですよ?』

となると、あれか?遠坂の先祖はこの罫のために態々錆びないタライを用意したつて  
のか?どんだけ意地が悪いんだよ!

「り、凜さん?」

「……」

イリヤが心配そうに遠坂に近づく。

すると、遠坂はその声に応えるようにむくりと立ち上がった。

「……気をつけなさいよ。仮にも此処は魔術師の壱なんだから、罠の一つや二つあるに決まってるわ!」

「仕切り直した!?!」

もしかしなくても、さっきの出来事をなかったことにするつもりだ!

そうして、再び歩き出す遠坂。口調や声のトーンこそさっきと同じだが、その目から放たれる無言の圧力に、俺たちは黙って遠坂の後ろについて行くしかなかった。

「皆、足元には気を——」

しかし、奇しくも先程と同じセリフの途中で、遠坂の足元からスイッチが押された音が聞こえた。

だが——

「甘〜!」

遠坂は咄嗟に足元のスイッチから右に離れる。

成程! さっきと同じトラップなら、落下地点から離ればどうってことはない。

さっきの余程悔しかったんだろうなあ、と思いながら遠坂を見ていた、次の瞬間——

「ひでぶッ!」



避けた方向の頭上から、再び金盃が落ちてきた。

「と、遠坂?!」

膝から崩れ落ちた遠坂を見て、慌てて駆け寄る。

こ、これは流石に、なんと声を掛けたらいいものか……。

『タライの射出口から見て、凜様を追尾したのではなく、元からこの位置に仕掛けてあったようです』

サファイアがタライの落ちてきた穴を見ながら、そんなことを言ってきた。

つまり、なんだ。このトラップを仕掛けた人間は、遠坂がこつちに避けることを読んで上で仕掛けたってことか? なんて無駄な洞察力……

「……」

あつ。遠坂の奴、今度はすんなりと立ち上がった。

「……………気をつけなさいよ。仮にも此処は魔術師の罠なんだから、罠の一つや二つあるに決まってるわ」

……またやり直すのか。いや、もはや何も言うまい。

三度歩き出す遠坂の背中を追いかけるように俺たちは黙って後に続いた。

「皆、足元——」

しかし、いや、やはりともいうべきか、さつきのセリフを言い終える前に遠坂が足元

のスイツチを踏んだ。

「舐めるなあ！」

だが、こつちだつて予想していたと言わんばかりに、遠坂は気合の入った声をあげて、両腕を頭上でクロスした。

成程！例え何処から落ちてこようと、上から降ってくる以上、頭をガードすれば防げる！

冷静に考えれば、なんでこんなことに熱くなつてるのか意味不明だったが、俺はこのとき遠坂の勝利（？）を確信していた。

「たわらばッ！」

真横から金盃が飛んでくるまでは。

「と、遠坂?!」

力なく横たわる彼女の元へ駆け寄る。

タライ自体は錆びないようにしてある以外は至って普通のタライだった。威力も大したことはない。ただし、精神的ダメージはその限りではないだろうが。

「……さ、流石にこれは笑えませんわね」

あのルヴィアでさえ、遠坂を同情的な目で見ている。いや、ここまで遠坂の思考を読んでいる相手に畏怖の念を抱いているのかもしれない。

「……ん？」

「ふっ。」

「ふっざけんなあああッ！」

あ、とうとう遠坂がキレた。

「何?! 何なのよこの陰湿な罠! それも狙いすましたかのように私だけ狙ってくるし!」

完膚なきまでに手の内を読まれ、だけど被害はただの悪戯レベル。ここまでおちよくられた遠坂は流石に限界だったようだ。

「行くわよ、衛宮君! 相手の顔を拝んでやろうじゃない!」

「いや、罠を仕掛けた奴は遠坂の先祖おおおああああッ!」

「お、お兄ちゃん!」

遠坂は俺の首根っこを掴むと、そのまま洞窟の奥底へとダツシュしていった。

やる気を出すのはいいけれど、できれば俺を巻き込まないで欲しい——つて早速後ろからお約束の大岩があーッ!

時には床から矢が飛び出し、時には天井が落ちてきたり。

そんな苦難を乗り越えて、俺たちはようやく目的地と思しき扉の前までやってきた。

「ここまで長かったね」

『ええ。凜さんも本当ならここに……凜さん！私は貴女の勇姿を忘れません！』

「勝手に殺すな！」

いやー冗談ですよー、と悪びれる様子のないルビーを、遠坂は壁に手をつけて肩で息をしながら睨みつける。ちなみに俺は、未だに襟の後ろを掴まれたままだ。

ここまでのトラップ、8割ぐらいは遠坂が引つかかっていたもんな。因みに残りの2割は遠坂に連れまわされたせいで俺が巻き添えを食らった分だ。

お陰で俺も遠坂も服がボロボロだ。

「とにかく……ここまで来たらこっちのものよ！オラアッ！」

遠坂が恨みを込めたヤクザキックで扉を蹴り開ける。

その部屋の奥にあったのは、硝子のショーケースに入った宝石ひとつだけだった。

「何？これだけ苦労して、宝石一個だけ？」

それを見たクロがあからさまにテンションを下げる。

俺からしても、遠坂にあれだけ巻き込まれておいてその成果がこれだと、流石のため

息を吐かざるを得ない。

だが、俺たちの中でもルヴィアと遠坂の二人だけは違う反応を見せていた。

「ん？遠坂、どうし——おわッ！」

その場で立ち尽くしていた遠坂は、俺を掴んだままショーケースの元へ駆け寄った。

「痛たたた……どうしたんだよ、急に？」

「……なんてこと。これ、アレキサンドライトじゃない！それもキャッツアイがダブルで！……こんなの見たことない！」

遠坂が興奮した様子でショーケースに顔を近づけた。

な、なんだ？そんなに貴重な宝石なのか？

俺も気になって中をのぞくと、そこには拳大ほどの、赤と緑に輝く綺麗な宝石が鎮座していた。

「ルヴィアさん。アレキサンドライトとかキャッツアイって何なの？」

「そ、そうですね。アレキサンドライトは環境光によつて赤から緑へ色を変える宝石で、キャッツアイは宝石に猫の目のような光の筋が出る宝石。どちらも非常に希少なのに、その性質を両方持つアレキサンドライトキャッツアイの価値は、言うまでもないですわ」

『しかも、あれほどの大きさの上、キャッツアイの線が2本。金銭的な意味はもちろん、

魔術の面からも非常に大きな意味を持つかと』

『あれほどのものならば、一度に2属性を同時に貯めるくらいのことは出来そうですねえ』

まだ部屋の外に居るイリヤの疑問に、ルヴィアが答え、サファイアとルビーが補足する。

宝石魔術のことはよくわからないが、話を聞く限り相当な代物みたいだな。遠坂も未だに興奮しながら宝石を食い入るように見てるし。

「そういうわけで、ふんッ!」

すると、遠坂はまるでジュースを買うような気軽さで、ショーケースをぶち破った。

「ちよッ!遠坂!」

「何よ?ご先祖様のものは私のもの、私のものは私のものでしょ?そういうわけで、お宝頂きよ!アッハッハッハ!」

駄目だ……遠坂のやつ、まだテンションが可笑しいままだ。

だけど、さつきまでの罠のことを考えると――

【宝石の盗難を感じ。自爆装置を起動】

突然聞こえてきた妙な音声と共に、俺と遠坂が入ってきた入り口の扉に鉄格子が出現し、出口が塞がれてしまった。

「し、しまったああああッ！」

『『しまった』じゃないだろおおおおッ！』

あんな強盗紛いのことをすれば、こうなることぐらい分かるじゃないか！

【危険ですので、直ちにこの場から500メートル以上離れて下さい。20, 19, 18  
……】

『美遊様！』

「うんッ！——シユート！」

まだ檻の外側に居た美遊は、サファイアの言葉を聞き咄嗟に轉身。鉄格子へ向かって魔力弾を放った。

だが——

「ッ!? 弾かれた!？」

鉄格子に触れた魔力弾はかき消えるようにその場で霧散した。

「まさか抗魔力結界!？」

「だったら、私の宝具で！」

「お待ちなさい、クロ！ 洞窟の中でそんな火力のものを使えば、たちまち崩れてしまいま

す！」

「そんなこと言ったって、後20秒で何とかしないとお兄ちゃんが！」

「どうやら、あの鉄格子にも細工がしてあるらしい。」

「今までの罠と違って殺意高すぎないかコレ!？」

「ど、どうすんだよ！閉じ込められたら避難も何も！」

「いえ、それ以前に、20秒足らずで500メートル離れろとか無茶にもほどがあるわよ！」

【遠坂たるもの、常に優雅たれ】

「うっさいわね！今それどころじゃないっての！」

「と、遠坂。これ、お前ん家の家訓……」

「どこからか聞こえてきた自分の家訓にまで文句を言い出す遠坂。」

「まずいまずいまずい！イリヤたちはカレイドステッキの力で何とかなるにしても、俺たちは打つ手がない！」

「……おかしい」

「おかしいって、あんなショーケースを叩き割ったらこうもなるって！」

「違うわよ！いや、違わないけど……こんなやり方じゃ、コソ泥だろうと後継者だろうとお構いなしに吹き飛んじやうじゃない！」



【……11, 10, 9……】

残り10秒!

イリヤたちは必死に入り口を破壊しようとしてるけど、あれじゃあ間に合いそうにな  
い!

「お兄ちゃん!」

イリヤの悲惨な声が俺の耳に届く。もう、駄目なのか……?」

すると、遠坂が握りしめていたアレキサンドライトが淡く輝きだした。

「ツ!? 遠坂! これって!」

「え……? なツ! この宝石、既に魔力が——」

【遠坂たるもの、常に優雅たれ】

「———そういうこと、ね」

さつきまで慌てふためいていた遠坂の顔に、不敵な笑みが浮かんだ。

「イリヤ! あんたは美遊と一緒に全方位型の多重防壁を展開して! とにかく自分達の身  
を守りなさい!」

「で、でも、それだと凜さんとお兄ちゃんが!」

「大丈夫！衛宮君はもつと私の近くに！」

「あ、ああ！」

遠坂の指示通り、俺は遠坂に近づき、イリヤたちは戸惑いながらも自らの周囲に防壁を展開する。

「なるべく姿勢を低く、目を開けちゃダメ！呼吸も止めて！」

「な、何をする気なんだ!？」

「何って、決まってるでしょう?！」

【……6, 5, 4】

遠坂は、手に持つアレキサンドライトを地面へ翳す。

「私は遠坂の魔術師。だったら、使うのは当然——」

【……3, 2, 1】

「宝石魔術よ！」

【0】

「ふあゝ。あゝつゝいゝゝ」

夏の暑さにダウンしているクロが、ソファの上で力なく寝っ転がっている。

「もう、クロってば。この間はあるなに遊びに行きたーいとか騒いでたのに」

「暫くは遠出なんて懲り懲りよ。やっぱり夏休みは、休んでこそその夏よね」

「休むのもいいけど、宿題も早めにやらないと。言っとくけど、私は絶対に写させないからね！」

「何よ、ケチ〜」

イリヤとクロの会話を聞き、俺は日常の有難さを噛み締めながら昼食の準備を始めた。

あの自爆の一件、結局俺達は遠坂の機転で何とか生き残ることができた。

と言うのも、あのアレキサンドライトには火と風の自然霊が既に宿っており、その魔力を開放することで爆風を起こして、自爆装置の爆破の衝撃を外側へ押し返したらしい。

遠坂曰く『宝石魔術を扱える人間でなければ、宝石諸共吹っ飛ばす』仕掛けだったようだ。他人の手に渡るくらいなら、というのは分からなくもないけど、巻き込まれる身にもなってほしい。

因みに、本来は1度使用すると使用した宝石が風化してしまう宝石魔術だが、衝撃を押し返すほどの魔力を開放してもアレキサンドライトは風化せずに残ったそう。遠坂の遺産の名にふさわしいスペックはあったようで、あれだけ苦勞した甲斐はあったつてもんだ。

そして、結界の維持も担っていた宝石を手に入れたことで通信も回復し、無事こうして帰還出来たってわけだ。

そんなこんなで、俺がつい前日のことに思い耽っていると、インターホンからチャイムの音が聞こえてきた。

「誰だろ。はい、今出ます」

昼食の支度を一旦中断し、居間を抜けて玄関の扉を開けた。

「やつほー、衛宮君」

「あれ、遠坂？どうしたんだ？」

噂をすればなんとやら、件の遠坂が訪ねてきた。

急にどうしたんだろう。確か、いつもなら今の時間はルヴィアのところで働いてると思ったけど。

「さあ、衛宮君。出かけるわよ！」

「出かけるって、何処に？」

「決まってるじゃない！次の遺産の在処よ！」

……は？

「ルヴィアの奴、今度は飛行機を出し渋ったんで、さつき気絶させてきたから。あいつが目覚める前に自家用機を飛ばらうわよ」

「ちよ、ちよつと待て！いろいろと突っ込みどころはあるんだが……とりあえず！遺産

探しはこの間やつただろ！」

「何言ってるの。遺産が一つだなんて誰も言っていないじゃない」

ま、マジで……？

「ほら、さっさと行くわよ！」

「え？ なッ、ちょッ——イヤアアアッ！」

そうして俺は遠坂に連行され、3日ぶりに空の旅をする羽目になるのだった。

なお、この後、追いかけてきたルヴィアと壮絶なドッグファイトを繰り広げたり、俺の不在に気付いたイリヤとクロがハイライトを失った美遊を引き連れてきたりしたが、それはまた別の御話。